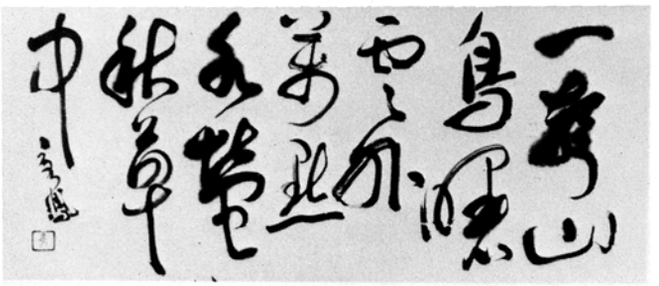
北海道書道展・招待会員・会員

物故者追悼特集(1)

青沼　秀鳳（あおぬま しゅうほう）……1980年 …… p 1
赤石　蘭邦（あかいし らんぽう）……2009年 …… p59
赤坂　錦城（あかさか きんじょう）……1995年 …… p25
安喰のり子（あじき のりこ）……2014年 …… p70
阿部　石彩（あべ せきさい）……1991年 …… p15
池田　敬岳（いけだ けいがく）……2023年 …p101
石井華賀子（いしい わかこ）……2014年 …… p71
石川　玉舟（いしかわ ぎょくしゅう）……2020年 …… p93
石崎　閑雲（いしざき かんうん）……2022年 …p101
石田　栖湖（いしだ せいこ）……1997年 …… p26
一鷹　春谿（いちたか しゅんけい）……1979年 …… p 2
伊藤　東海（いとう とうかい）……1983年 …… p 3
伊藤　天進（いとう てんしん）……2019年 …… p92
岩井　鶴泉（いわい かくせん）……1986年 …… p11
岩黒　一峯（いわぐろ いっぽう）……1966年 …… p 4
臼井　和子（うすい かずこ）……2002年 …… p41
宇野　渓雪（うの けいせつ）……2015年 …… p75
宇野　小夜（うの さよ）……2007年 …… p54
宇野　静山（うの せいざん）……2010年 …… p62
蛯名　翠象（えびな すいしょう）……1994年 …… p23
遠藤　相洲（えんどう そうしゅう）……1979年 …… p 5
及川　泉石（おいかわ せんせき）……2019年 …… p85
大井　秋聲（おおい しゅうせい）……2000年 …… p31
大川　瀟湖（おおかわ しょうこ）……2021年 …… p95
太田　鶴堂（おおた かくどう）……1999年 …… p28
沖中　棟舟（おきなか とうしゅう）……2009年 …… p60
小黒　秋峯（おぐろ しゅうほう）……2008年 …… p55
長内　敬子（おさない けいこ）……2024年 …p104
小比賀秋嶺（おびか しゅうれい）……2003年 …… p45
柏木　淳風（かしわぎ じゅんぷう）……2019年 …… p91
嘉瀬　萬秋（かせ ばんしゅ）……2002年 …… p38
片倉　大成（かたくら たいせい）……2017年 …… p83
金津　墨岱（かなつ ぼくたい）……2004年 …… p46
金丸　梧舟（かなまる ごしゅう）……1994年 …… p24
金丸　蘇洞（かなまる そどう）……1980年 …… p 6
金子　鷗亭（かねこ おうてい）……2001年 …… p33
萱　　登柳（かや とうりゅう）……2022年 …p100
河合　蕉竹（かわい しょうちく）……2010年 …… p63
河原　啓雲（かわはら けいうん）……2018年 …… p87
君田　康子（きみた やすこ）……2023年 …p102
桑島　雁来（くわじま がんらい）……2001年 …… p34
桑原　翠邦（くわはら すいほう）……1995年 …… p22
越坂　柳徳（こしさか りゅうとく）……2004年 …… p48
斉藤　香月（さいとう こうげつ）……2024年 …p104
佐藤　大象（さとう たいしょう）……1992年 …… p20
佐藤　大朴（さとう たいぼく）……1985年 …… p10
佐藤　　満（さとう みつる）……2016年 …… p78
真田　　昇（さなだ のぼる）……2022年 …… p96
塩田　慥洲（しおだ ぞうしゅう）……2003年 …… p42
柴田　蕙山（しばた けいざん）……1987年 …… p13
島田　無響（しまだ むきょう）……2015年 …… p72
新谷　谿雪（しんたに けいせつ）……2024年 …p105
須藤　武夫（すどう たけお）……1986年 …… p12
須摩　明石（すま めいせき）……2000年 …… p29
田上　小華（たがみ しょうか）……2012年 …… p66
武田　　恵（たけだ けい）……2022年 …… p97
竹原　静涯（たけはら せいが）……1992年 …… p17
竹村　亭舟（たけむら ていしゅう）……2001年 …… p32
多田　博英（ただ はくえい）……2020年 …… p94
立野　大秋（たての たいしゅう）……2016年 …… p80
田中　翠鶴（たなか すいかく）……2001年 …… p35
田山　芝洞（たやま しどう）……2003年 …… p44
千鶴　敏子（ちづる としこ）……2024年 …p105
千葉　軒岳（ちば けんがく）……2019年 …… p88
辻井　京雲（つじい けいうん）……2019年 …… p90
土田　静峯（つちだ せいほう）……2008年 …… p57
寺島　瑤林（てらしま ようりん）……2015年 …… p76
中川　清風（なかがわ せいふう）……2011年 …… p64
永澤　楊舟（ながさわ ようしゅう）……2004年 …… p49
中嶋　一光（なかじま いっこう）……2007年 …… p53
中島　荘牛（なかじま そぎゅう）……2013年 …… p67
永田　青雲（ながた せいうん）……2015年 …… p73
長縄沙恵子（ながなわ さえこ）……2013年 …… p68
奈良　一玄（なら いちげん）……1990年 …… p16
二階堂北翠（にかいどう ほくすい）……2003年 …… p47
野村　墨水（のむら ぼくすい）……2022年 …… p98
橋本　宇外（はしもと うがい）……2006年 …… p52
蓮沼公仁子（はすぬま くにこ）……2002年 …… p39
長谷川遅牛（はせがわ ちぎゅう）……1993年 …… p19
長谷川東邦（はせがわ とうほう）……1992年 …… p18
畠山　紫香（はたけやま しこう）……2024年 …p106
馬場　　怜（ばば れい）……2017年 …… p82
濱　美奈子（はま みなこ）……2008年 …… p58
原　　錦穂（はら きんほ）……2012年 …… p65
原田　如峰（はらだ じょほう）……1996年 …… p27
平田　鳥閑（ひらた ちょうかん）……2023年 …p102
廣瀬　香雲（ひろせ こうりゅう）……2015年 …… p74
廣田　岳洋（ひろた がくよう）……2008年 …… p56
福村　雪華（ふくむら せっか）……2006年 …… p50
福森　龍子（ふくもり りゅうこ）……2017年 …… p84
藤根　凱風（ふじね がいふう）……2017年 …… p81
藤根　星洲（ふじね せいしゅう）……2002年 …… p40
藤原　太眼（ふじわら たいがん）……2022年 …… p99
本間　敬三（ほんま けいぞう）……2016年 …… p79
本間　桂龍（ほんま けいりゅう）……2018年 …… p86
前田　錦象（まえだ きんしょう）……2005年 …… p51
松井　琴舟（まつい きんしゅう）……2002年 …… p37
松田　幸子（まつだ さちこ）……2002年 …… p43
松本　暎子（まつもと えいこ）……2024年 …p106
松本　春子（まつもと はるこ）……1989年 …… p14
丸山　薫風（まるやま くんぷう）……1999年 …… p30
水島美枝子（みずしま みえこ）……2001年 …… p36
村井藻々子（むらい ももこ）……2009年 …… p61
村上　碧舟（むらかみ へきしゅう）……2019年 …… p89
毛利　壽海（もうり じゅかい）……1993年 …… p21
山口　子羊（やまぐち しよう）……1962年 …… p 7
山田　九溟（やまだ きゅうめい）……2013年 …… p69
山田　汎暁（やまだ はんぎょ）……2015年 …… p77
山本　玉沙（やまもと ぎょくさ）……2025年 …p107
山本　芳甫（やまもと ほうほう）……1977年 …… p 8
吉田　瞭風（よしだ りょうふう）……2023年 …p103
渡辺　緑邦（わたなべ りょくほう）……1983年 …… p 9

青沼秀鳳



略　歴

明治40年８月８日、蘭越村出身。昭和４年札幌師範学校卒業。池田高女、庁立小樽高女教諭等を経て昭和23年第一師範学校教授、学芸大学、北海道教育大学教授となる。昭和31年、36年、38年同大学岩見沢分校主事。のち同大学名誉教授となる。北海道書道教育連盟事務局長、会長を歴任。個展３回、50年訪中、昭和34年北海道書道展審査員となる。45年青沼先生の半生を集大成した「秀鳳の人と書」発刊される。正四位勲三等旭日中綬章を受章する。

昭和55年６月24日没。71歳。



秀鳳先生は書道研究室の指導教官であり、以後21年間公私共にすっかりお世話になりました。先生は人も知る無類の世話好き、温顔を絶やさぬ人格者でした。教え子とのコンパや旅行も大事にされましたから、先生との触れ合いも多く、崇拝に似た信頼の糸でいまだに強く結ばれております。昭和50年、先生と書のルーツを訪ねる旅をしましたが、古典の作者と作品の話は勿論のこと、漢詩をとうとうと詠じながら中国大陸をかけめぐり、しかも連日昼夜を分たぬ酒豪ぶり、など、まさに詩人李白の生涯にも似た豪放磊落、天衣無縫ぶりを懐しんでおります。

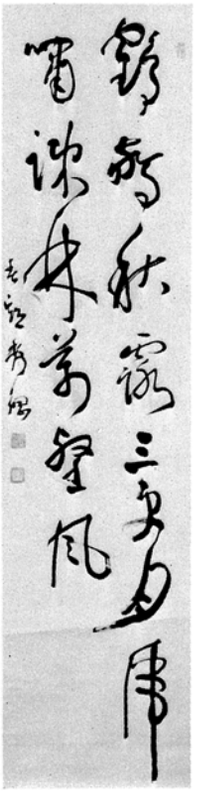
秀鳳大師の書は高潔で格調すこぶる高く、韻致に富んだ詩情豊かなものが中心で、先生の人と書が渾然一体をなしています。

先生は大学の主事職を永年勤め、書道教育連盟の名会長として今日の基礎を築き、全書研の副理事長として毛筆習字復活運動の先頭に立ち、また全道書道展を創設、月刊〝書の研究〟を創刊するなど、名実共に北海道書道教育の活性化に尽力、そのご功績は永遠に消えることなく輝きを増しております。

酒仙秀鳳翁、静かに天国の楽園でまた美酒を一献やりましょう。先生作詩作曲の「かぼちゃ節」を高唱したいものです。

＜小原道城記＞

一鷹春谿



略歴

明治31年当別太に生まれ、独学して正教員試験に合格、札幌市立高女に勤務のかたわら大正11年文検習字教員試験に合格して教諭を17年間、藤女子学園に16年間勤続。この間石川梧堂、大阪の益田雪華に師事、次いで近藤雪竹に最も傾倒。

大正15年北都書道会をおこし書初展を40回、「書学研究」誌を134号を続刊。昭和８年書道連盟を首唱結成。35年現連盟展の招待作家として病中も力作をよせる。著書も十指を数える。



(1) 性来の好学　すべて独学であった。

大正末期、川谷尚亭の「書の研究」、辻本史邑の「書鑑」誌上の月次清書で活動し、益田雪華の「書道」では大塚鶴洞・石井梧鳳らと上位を争い全国の注目を浴びた。

(2) 頭悩精敏

第１次連盟展の直後、会計部の私あてに葉書で庶務部立替払いの請求が送達されたので、すぐ検算したがどうしても１銭５厘多い。電話照会したところ「電話料より葉書が安いし、超過分はそのハガキ代です。」と。ただ、舌を巻き頭を垂れるのみ。後年の億万長者への原点か。

(3) 書道振興の先達

書道の振興は展覧会・講習会が大切な要件で私と交々中央大家を招いて催したが、書誌だけは同調しなかった。昭和２・３年と川谷・比田井両先生を迎えて開眼された道書壇も２年に石井先生死去、５年に大塚先生函館に移ったので春谿先醒独り先達となり本道書道の振興に尽されたご功績は偉大である。

(4) 終焉

54年２月26日、奥様からのお電話で先醒のご最後を知らされた。行年81才であった。

そして「主人の遺言ですが、葬儀委員長をお願いしたい。」と。一瞬戸惑ったが、すぐ馳せつけて枕頭に焼香し、副委員長さんが某校長さんであったので少し安心してお受けしあの壮厳盛大な葬儀を済ませたのである。

今、申越しのまま拙文を属して先醒のみたまに道人の後輩として深く感謝をささげ、ご冥福をお祈りする次第であります。

＜金丸梧舟記＞



伊藤東海先生の郷里は小野道風の生誕地に程近い春日井市である。土地の人は第二の道風を待つこと久しかった。先生は「おれが現代の道風になってやる」と心に決めたという。

先生28歳の時、義兄に招かれて北国の天地を求め来道、札幌には大塚鶴洞先生がおられ大いに意気投合、北海道の書の開発を話し合う。東海先生の発案で移動展覧会を始めた。これが移動展の嚆矢となる。この頃金子鴎亭、桑原翠邦、三宅半有の諸先生と親交を深める。

先生は日頃、廻腕法による新しい書のあり方を力説、札幌、小樽、旭川と講習に努め大きな収穫を得た。

更には一転して大阪に移住、独自の雑誌、学書大道を発刊し敢然と自己の信念と書論を貫かれた。

終戦時後の２、３年は岐阜県に疎開し、仙人のような枯淡な生活をされた。先生が貫かれた孔子の精神は現代の激しく変革する世相に相入れない一面もあるとも聞くが、先生の清澄な心境と硬骨なまでの持論は書人の貴重な教範として永く後世に彩光を留めることであろう。太子17条憲法６曲屏風草稿奉納記念展は、本年３月大阪四天王寺本坊、方丈の間で開催された。

＜小比賀秋嶺記＞

伊藤東海

略歴

明治26年、愛知県春日井市鳥居松に生まる。

大正９年、妻キヌの兄に招かれ北海道深川に住む。書道塾を開く傍ら文具店を営む。

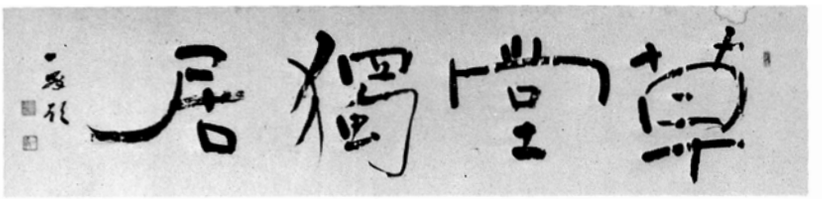
大正14年、現代大家作品移動展を計画、小樽、札幌、旭川に於いて実施、比田井天来、川谷尚亭、鈴木翠軒ほか日本書壇大家の作品を展示。

昭和元年、大阪に移住、独力で雑誌学書大道創刊。昭和27年、住友銀行名執筆。

昭和57年、四天王寺聖徳太子17条憲法執筆。

昭和58年４月逝去。91歳。





岩黒一峯

略歴

明治40年４月、札幌市に生れる（本名・清、書号は一峯）札幌１中中退、鉄道教習所卒業。

大正12年、幌西小学校に奉職、幌西小に24年間、札幌東高校、美香保中学校、北辰中学校教頭と38年間の教師生活を続ける。

書は大塚鶴洞に師事、北海道書道教育連盟理事、北海道書道会同人。

昭和41年１月没す、58歳。

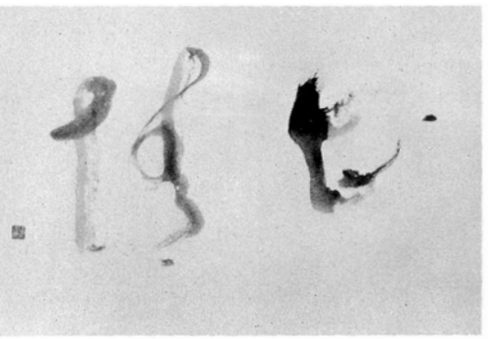


故岩黒一峯君、君がこの世を去ってから、早や18年にもなる。君は北辰中学校の教頭ととして赴任して間もなく咽喉に悪性腫瘍ができ入院治療につとめたが、その甲斐もなく死去したのだった。昭和41年１月19日（通夜）である。将来を嘱目されていながら早逝したのは惜しみても余りがある。君は生来温和で、人を容れる雅量に富み人の世話をよくした。酒好きで、道でパッタリ会うとよく焼鳥屋で飲み交わしたものだった。書も温厚で力作をよく書いた。墨遊の編集の主幹として活躍し、加納守拙先生の残された志を継いで書教育によく尽した。

昭和12年の頃だったと思うが、彼と結婚の約束をしたといって旭川からU子が札幌北光小学校に転勤して来たのである。旧北光小の２階教室でU子はわたしに本当の事を打ち明けたのであった。然し彼は既に結婚してしまっていた。これを知って彼女はひどく心を傷め、翌年旭川に帰っていった。酒の場で彼にその事を話し「かわいそうなことをした。」とやりこめた事がある。彼神妙に聴いていたが、今も思い出されるエピソードである。U子は旭川に帰って住職と結婚したときくが、幸福に暮らしているだろうと思い又念願している。

＜安達翠洋記＞

遠藤相洲





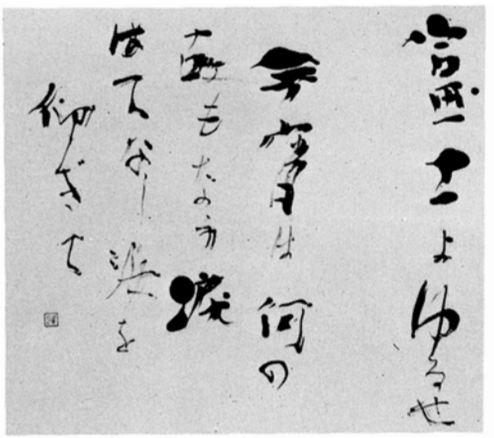
私と先生との出会いは、初めて書の手ほどきを受けた高校時代である。昭和９年、難関の文検に合格された先生は、古典をさらに幅広く深めようとして、かなりの墨量を示されていた。当時、桑原翠邦氏、上田桑鳩氏との親交もあったようで、室蘭で両氏の揮毫会をもったことを記憶している。先生が奎星会同人となった理由はさだかでないが、前衛書志向というよりは、上田桑鳩氏の書に対する敬けんさ、深遠さに惹かれての個人的な親交であったと思う。そういえば、先生は、書とかけはなれたところでの人間くさい関わりを極端にきらっていたようで、結社にのめりこむことなく、自らの書をいかに展開していくか、真剣に書と対峙し、たしかな書学と書法を追求した書人であったと思う。だから、おのれの書学から求めてやまないものへの傾倒は、かな書の尾上柴舟、日比野五鳳、漢字の西村桂洲、書学の宇野雪村へと続くのである。その意味で、振幅の広い書究の姿勢を示され、自らを研磨することを主眼とされていたように思う。

先生の書風は、まことに温雅清韻の筆を表現され、それは、たしかな古典からの転移であり、また、先生の人となりであったと思う。　＜原田如峯記＞

略歴

遠藤　相洲　福島県生
大正13年　札幌師範卒
昭和９年　文部省習字検定試験合格
〃 26年　奎星会　同人
〃 29年　日展漢字の部入選
〃 30年　毎日書道展委嘱
〃 35年　全道展審査会員
〃 ６年～40年　室蘭市内高校勤務
〃 54年９月没。

金丸蘇洞



略歴

大正８年	北海道江差町に生まる
昭和23年	北海道鴎臨書道会を創立会長となる
昭和38年	北海道書道展審査員、毎日展審査員
昭和41年	創玄展審査員
昭和49年	北海道書道連盟常任委員長
昭和51年	北海道教育大学教授
昭和53年	北海道文団協賞、江差町教育功労賞
昭和53年	第１次北海道書道家友好訪中団々長
昭和55年	死去　享年61歳　＜２月＞
昭和55年	叙勲　正五位勲四等旭日小綬章



師は「和顔愛語」の人であった。誰に接しても、その眼は優しく、思遣りに満ちた言葉で話された。しかし書を論じられる時の情熱は大波の寄せるような激しさがあった。終戦を陸軍大尉として中国で迎えられたが、昭和21年復員、23年北海道鴎臨書道会を創立し書作活動の第一歩を踏み出された。昭和27年金子鴎亭先生に師事されるや、書への情熱は一気に燃え上り古典の追求と近代詩文書の研究に没頭された。昭和32年第11回日書展に横書きローマ字入りの作品を発表し最高賞を受けたが、この形式のものは我が国最初のものと言われている。

その後昭和36年に日書展大賞、37年日展入選38年北海道書道展準大賞、毎日展準大賞などを受賞し書壇に輝かしい足跡を残されたが、昭和54年病魔に浸され、翌55年２月28日門人一同の願いもむなしく長逝された。昭和53年11月江差町教育功労賞を受賞されての帰り私と長沼洗洞さんと交代で運転し、先生を助手席にお乗せして馴れない手つきでシートベルトを締めていただいた事が昨日のように懐しく思い出される。　＜麓　竹露記＞

山口子羊



子羊書の言いしれぬ抒情性や精神性は、見るものの心弦に触れつつ、時にプリズムのように屈折した光影を、こちら側に投げかける。腕にまかせて書く、といった薄手な器用さなど彼は持合わせない。むしろ自分のふかい息づかいにたのんで書く、というところがあった。

その生涯の求道的な軌跡を見るとき、山口子羊は精神の低みから高みへと、止揚を図るすぐれた＜錬金術師＞であった。彼の書は、その錬金といういとなみの、まさに頂点に位置していたといえよう。いわば心の＜修羅＞をくぐり抜けたものの勁さと冽さが、子羊書にはある。

ひとはややもすると子羊書の本質を看過ごす。あたかも、くみし易しと見る。だが彼の書は、常に筆が手を通る前に、実におどろくべき丹念さで心を通るのだ。そこに表わされたものは形而上的であり、それは凡庸の理解のはるか遠いところで、ふかく息づいている。

ぼくには山口子羊の＜孤独＞が見える。スノビズムに充ちた書壇という風土の中で、自らを酸化させることを彼は生涯きびしく拒みつづけた。だがその孤独さゆえに、むしろ山口子羊の書は比類ない美の豊穣をもたらし得たことに、ぼくは祝福をおくりたい。　＜長谷川白羊記＞



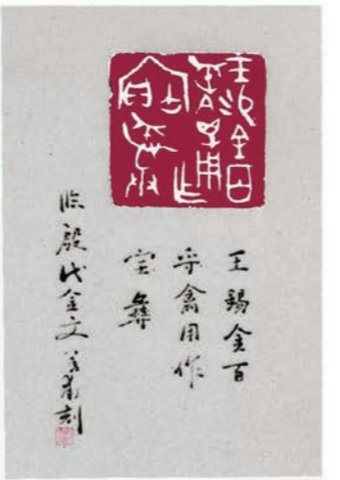
略歴

大正後期より川谷尚亭に師事。終生唯一至上の師と仰ぐ。〈昭和１・４〉大阪に赴き直接尚亭の指導を受く。甲子書道会助教となる。〈昭和34・１〉第１回北海道書道展招待作家となる。〈昭和35・４〉札幌にて第１回個展開催。〈昭和37・９〉桑原翠邦主宰書宗院展招待作家に推さる。〈同10・５〉北大病院にて胃癌のため死去。行年58歳。〈昭和38・43・49〉年忌を卜し遺作展開催。その他、43年と49年の物故作家展にそれぞれ出品。



山本芳甫先生を語る時、我々第５部の関係者は篆刻という普及していなかった芸術を北海道書道展に採り上げていただいた功労者として存在する大恩人であることを忘れてはならない。それ迄はあちらこちらにポツポツと同好者が自作に優越感を持って篆刻を誰れでもが出来るものではないとささやかな自惚れを持ち自慢ばかりしていたようである。先生はこれら全道の作家に警鐘を与え、技術的に競うことを提唱し研究し合う機関を設け道展で発表し殻からの脱皮を実現させたのである。その間中央部から森田緑山、次いで松丸東魚の両先生を招聘し本道作家に目を開かせたことはご存知の通りである。道展に参加した後も初心者の指導には骨身を惜しまず字法、章法、刀法を説かれ、書いたら彫れ、彫ったら書け、を口癖に「書」と「篆刻」の密接な繋りを今日に至るまで受け継いだ人である。今日道展で競う第５部の姿をあの汚れを知らない純粋な山本先生が唯慶んでおられるであろうことを考えるとき感「ひとしお」のものがあり「和」を保ち、第５部の隆昌を関係者共々誓い合って先生に恥じることない部門として躍進することに精進いたしたいものと感じている次第であります。　　＜阿部石彩記＞

山本芳甫



略歴

明治40年２月12日留萌市に生る。昭和初期より古典を求め青木万有に師事、淳風会同人。雲龍書院を主宰。昭和15年大日本書道院展入賞、昭和17年大東亜書道展特選。戦後石田栖湖等と共に活動、北海道書道会同人。昭和30年北海道書道教育研究会同人、同年北樹会々員、第１回道展特選依嘱作家。書宗院展無鑑査。旭書道会主宰。昭和41年道展審査会員。同年より北海道篆刻会初代会長を務め道展第５部創設の礎を築いた。

（昭和52年３月18日没　70歳）

渡辺緑邦



略歴

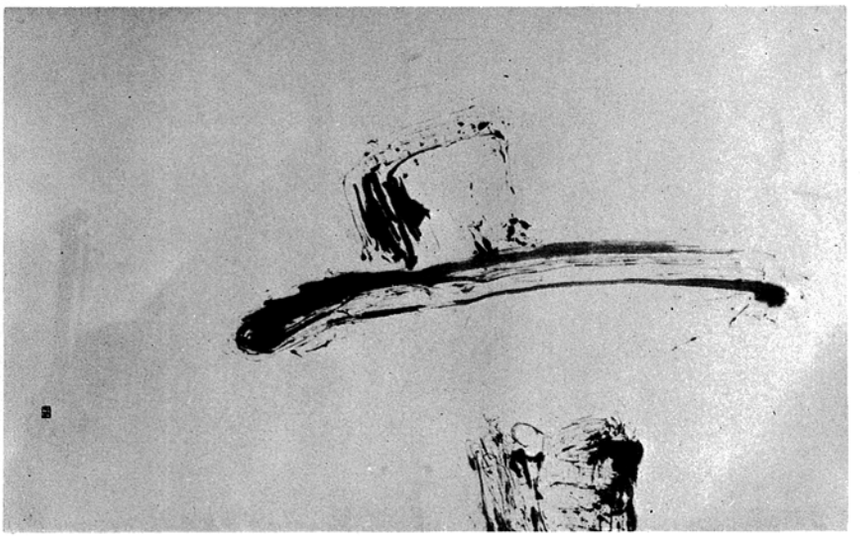
大正７年１月１日　石川県羽咋市に生る。昭和22年札幌へ移る。25年第２回毎日書道展　漢字部最高賞。北海道文化奨励賞受賞。書道誌・北海書芸発刊。35年北海道書道展創設に参画。脳溢血で右半身不随となる。翌年奇跡的に快癒。書号錦舟を緑邦に改める。38年日展特選。45年日展会員、同45年、49年、57年日展審査に当る。「北海道戦没者之霊」揮毫奉仕（39年～19回）著書　感謝状・表彰状・賞状、渡辺緑邦涙と汗の50年　師　金子鴎亭

（昭和58年１月１日没　65歳）

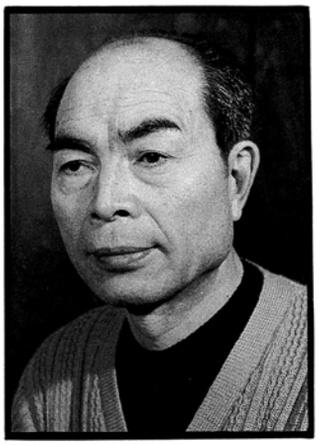


31年春、先生とお宅の物入れを整理した。大きな物入れではなかったが、本と作品で埋っていた。整理するより師の作品群、勉強に打たれボーツとしていた。楽毅論、左繍叙、高野切三種等、現寸大の臨書が今でも頭にある。又この時、初めて旧書苑を見せて下さった。これも私の気持を燃えさせた。出ものがあっても当時の私には手の届くものではなかった。数年前再版された覆刻版を手にし、開く度、師を思い出している。57年秋、翌年に予定されていた書業50年回顧展と、作品集の作品をお預りした。その際、以前から私の脳裡に焼付いている作品が少いのでお尋ねしたら、麻生に引越し後、冬のすがもりで、氷の固りにしてしまったとの事、誠に残念な思いである。20年程前の話であるが、古法帖とか、原拓を見たことがあるかとのこと。実は嘉瀬万秋兄と青木万有先生のお宅へ一本下げて行って、色々見せて戴きました。お話も伺い勉強になりましたと答えたら、先生、僕は大変感激した事があると言う。小樽の宇野静山先生のお宅に遊びに行き、机上にあった古法帳を見て驚いたと言う。その古法帳、何十回習ったことか、指でめくるところが円くなっていたよ、君!!

＜我妻緑巣記＞



故　佐藤　大朴



略　歴

明治42年　北海道空知郡上富良野村に生る
昭和26年　加納守拙・岩黒一峰らと北海道書道教育研究会を興し、月刊誌「墨遊」を刊行
昭和27年　第６回書道芸術院展特別賞、審査員推挙
昭和30年　書道芸術院脱退、墨人会に入会
昭和31年　石田栖湖・宇野静山・加納守拙・金丸梧舟・松本春子・渡辺緑邦氏らと北海道書道連盟を発足させ、46年まで常任委員
昭和35年　北海道書道展発足、創立会員、４部審査員
昭和37年　塩田慥洲・馬場怜氏と北海道墨象会設立
昭和45年　第１回個展
　　墨人会客員に推挙される
昭和47年　札幌オリンピック冬季大会大倉飛躍台会場貴賓席に「飛」を掲げる。現在ブランデージ博物館（アメリカ）に収蔵
昭和50年　第２回個展
昭和53年　第３回個展
昭和54年　北海道文化賞受賞
昭和57年　第４回個展
昭和59年　けがで倒れ入院（１月１日）
昭和60年　１月22日没

昭和30年１月東京上野の美術館で開かれた書道芸術院展見学の折変った作品（非文字）が目に止った。「こんな変な作品を書くのは誰だろう」と思い近寄ると「佐藤大朴・札幌」とある。「同じ北海道に変った作家がいるものだ」と思い帰道した。これが最初の出合いである。二年後初めてお会いし、次第にその人柄に魅せられていった。

先生の豪放磊落な性格は広く知られるところだが、反面非常に繊細な神経の持ち主で、あたたかく人を包んでくれる人であった。

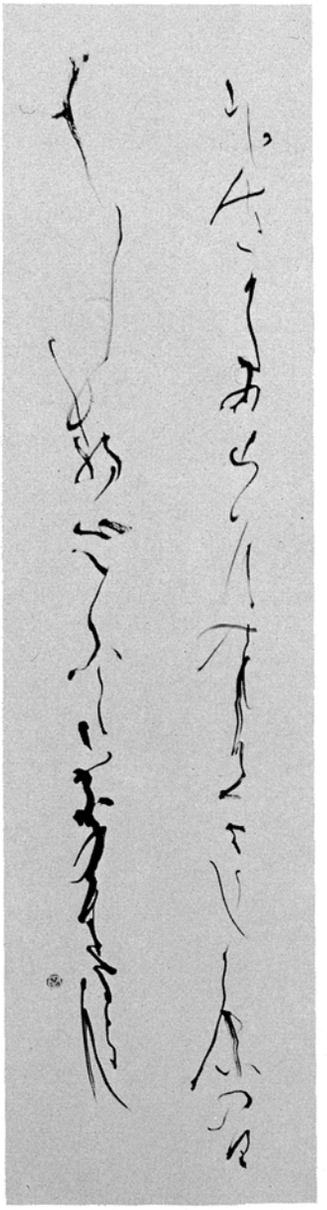
先生は青年期の大半を北見で過ごした。その間加納守拙・金子鷗亭に師事し臨書に熱中した。その後大沢雅休に師事し、昭和26年札幌に居を移してから創作活動に力を入れるようになった。禅を学び、その発想のユニークさと豊かさは刮目すべきものがあった。昭和30年代の「宇宙的書」から「人間風在の書」に至るまで、井上有一・新井狼子・須田剋太らの多くの知友が全国に居り、アトリエには山頭火・放哉らの書籍が山積みされていた。これらの中で自身の書の方向が裏付けされていったように思われてならない。

酒を好み、酔う程に歌う「赤とんぼ」と連発する「つや子」はあまりにも有名だった。火葬場で見た太い大腿骨、がっしり組み合った顎骨は生前の巨大なエネルギーの源にふれる思いがし、存在感の大きさに今更乍ら驚嘆した。

今はつや子夫人のそばで安らかに眠ってほしいと切に祈るのみである。　（島田青丘記）

故　岩井　鶴泉





「思えば書壇に凡そ縁の遠い者たちが、荒磯に蝕ばまれつ果てゆく北の海の魚礁の名残りに『青魚』の名を求め、地味な仕事の繰り返えしの中に一つの節を迎えた」

これは先生が率いる第10回青魚会展作品集にみる巻頭の一節です。この青魚に象徴される世界こそ岩井鶴泉の書の原風景であるように思える。

一方先生の真摯な姿に、北海道におけるかな書道の先達者たれ、と勇気と助言を与えた出合い人、石田柄湖。そして鶴泉の今日にみる書風確立の礎を創らしめたもう一人の出合い人、今は亡き師、西谷卯木の存在を無にして語れないと思います。

あの風貌から受ける飄飄とした人柄、他人を思いやる優しさと自分に厳しい姿勢とが渾然一体となって形創られた、流麗にして大胆、簡素にして深遠な書美の世界が確立された。

先生が北海道書道展を土俵に今日をしてあらしめたのは、40年代の正筆会との関わり、そして50年代の北海道書人団創立会員という重鎮の中で、深く静かに沈潜した。そしてこの数年程前からは、破竹の勢いで奔走、かな書道の育成と隆盛に貢献された。まさに超人的エネルギーとバイタリティーに富んだ岩井鶴泉、酒を愛し酔うほどに潤いを増し、親分肌の風格は多くの方々を酔わしめた。加えて学生時代相撲で鍛えた体で50代からはじめたゴルフは大方の認めるところである。

思えば太く短かく大きく深く歩んだ道程、その道程は私たちに人生のドラマを彷彿させてくれるようである。

北海道の書壇に燦然と輝くであろう鶴泉の書美、永訣は肉体の滅亡と解すれば、鶴泉芸術は永劫に朽ちることはないであろう。むしろ血肉となって甦り、その存在は倍加されるであろう。

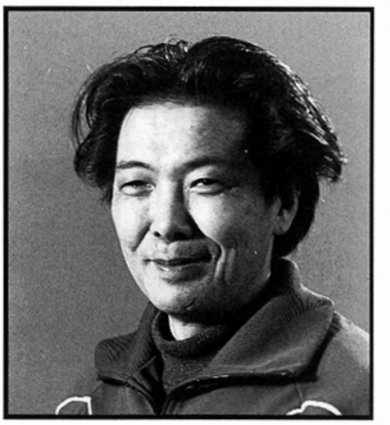
今は亡き岩井鶴泉先生、安らかに永遠の眠りにおつき下さい。

（八巻水鷗記）

略　歴

昭和３年	札幌市に生まれる
昭和43年	第10回北海道書道展大賞受賞 北海道書道展審査会員に推挙 書道研究青魚会設立
昭和53年	正筆会菁華書作展札幌展開催実施の責任者として奔走（主催　北海道新聞社、後援　北海道書道連盟）
昭和55年	ベニス市主催の「今日の日本書道展」に全懐紙作品出品
昭和56年	北海道書人団創立会員 北海道書道連盟常任委員長、第23回北海道書道展運営委員長に就任
昭和57年	北海道正筆設立
昭和58年	正筆会常任委員に推挙
昭和60年	10月入院（診断の結果胃癌と判明）
昭和61年	４月16日没





故　須藤　武夫

私が須藤武夫氏の名を知ったのは昭和35年１月、第１回北海道書道展の会場だった。作品を見ていくうち、すごい迫力の作にぶつかり圧倒され名前を見ると、須藤武夫・札幌とあった。以来私は彼を意識し、「今年彼はどんな作品を発表するだろう。負けないように頑張らなくっちゃ。」と発奮の材料にした。４回展で共に会友になった折、今は亡き佐藤大朴先生に紹介され、「あなたが須藤さんですか。」「あなたが島田さんですか。」の挨拶を交わしたのが初対面で、お互い心の中で良いライバルだった事を話し合い、大いに話に花が咲いたのを昨日の事のように思い出す。以来彼とは心の通い合った友であった。彼はふだん無口で謙虚なのはよく知られているが、酒を飲む程に愉快になり大声で書を論じ合ったり平素の彼からは想像つかない豪放な面を見せてくれた。ニセコで作品を書き合った時勢いあまって淡墨が入ったバケツをひっくり返し、頭から墨をかぶり体中墨だらけになった事も懐しい思い出である。彼は自宅の６畳のアトリエで毎日毎日書き続けていた。60年８月第１回個展を終えた時「島さん個展やってよかった。次の目標がだんだん具体的に見えて来た。また書くぞ。」と言った言葉が忘れられない。終了直後大筆を購入し、墨を作って準備が整った直後彼は入院してしまったのである。彼の心中を思う時、本当に病魔がにくい。

彼は海を愛し、雄大な景色を見ては感動した。「俺は広い海や大きな山に負けない作品を書きたい。」と常に言っていた。彼の作品からは巧緻性を見い出すことは出来ない。彼は巧緻性を自分から追い出し、独自の根源の美を求め続けた希少の作家であった。若い頃は徹頭徹尾暴れまくり迫力に満ち溢れた作品が多かったが、近年は大きさの中に沈潜した空気がただよい、時に温かく、時に冷厳なまでの空間の冴えを感じさせた。彼が今後どんな作品を発表するかに大きな期待を寄せていた人は決して少なくはない。書業半ばにして逝ってしまった事は痛恨の極みである。今は彼の冥福を祈ると共に、今年12月２日から開かれる遺作展（市民ギャラリー）で彼の偉業を偲びたい。

（島田青丘記）

書　歴

1928　札幌郡恵庭村島松（現恵庭市）に生れる
1962　北海道墨象会会員加盟
1963　第４回北海道書道展で特選、会友に推される
1965　墨人会会友加盟
1967　天彗社会員加盟
　　第８回北海道書道展で準大賞、会員に推される
1979　札幌墨象会会員加盟
1985　第１回個展、於札幌市民ギャラリー
1986　８月14日逝去



柴 田 蕙 山　（本名）晶　敏

大正９年11月10日帯広にて出生

書　歴

1．毎日書道展　審査会員
1．書宗院　評議理事
1．北海道書道展　昭和35年審査員
1．道東書道展運営委員・審査員、
1．（蕙山書院）―北方書学院主宰
1．全日本書芸文化院、総務審査員
1．社団法人、創玄書道会審査員
1．近代詩文書作家協会評議員

個　展

1．昭和23年以来26回
　東京２回、札幌・釧路・帯広23回
　マレーシア芸術学院の招きにより１回

賞・表彰

1．帯広市文化奨励賞　昭和36年11月３日
1．帯広市文化賞　昭和51年11月３日
1．藍綬褒章受賞　昭和61年４月29日



故　柴田　蕙山

柴田蕙山氏を憶う

赤石　蘭邦

柴田蕙山氏が昨年５月14日に亡くなられた。今、一周忌がめぐってくるにあたり氏の遺業を偲びたいと思う。

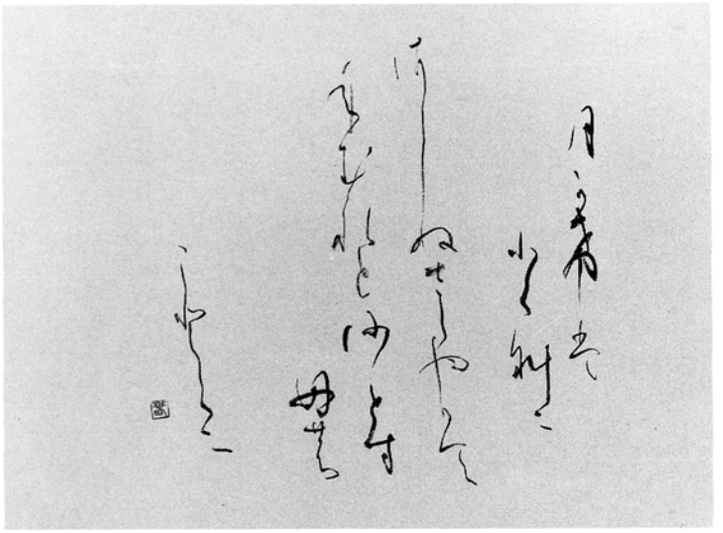
道展審査員並びに毎日書道展・創玄書道展審査員・書宗院評議理事そして本家の北方書学院長等の所属役柄を見事にこなした氏は道東地区の育成に果した功が大きく道展のそれも忘れがたい影響を私たちに残している。

氏は早くより桑原先生に師事、金子先生の書業に協力する。私とは１・２のちがいこそあれ昭和20年代の学書・公募時代は共通した道ゆきを通る。23年第１回毎日展から日書美展及創玄展・書宗院展と一緒であり審査会員の年次も接近している。第５回道展から氏を第一部に迎え以後の親交多く所蔵の名品鑑賞に預る次第である。

氏の毎日展出品作には、八木重吉の詩を好んで書かれたものが書を通して慈愛と清浄心を伺いみる。漢字書風は剛健或は重厚・淡白も併せて清流が流れている。道展作品集を開くと篆・隷体を筆頭に行草までよくした手腕特に還暦以降の禅句―無・明暦々露堂々・真玉泥中異・明珠在掌など私の趣好と重なる。書禅一味の境を進む。

氏が郷土帯広市に在って刑務所面接委員・連合PTA会長ほか社会教育面に関わり、市・道からの受賞と61年に藍綬褒章を受ける。この業績と相俟った書の求道熱情の士の60代の長逝はまことに惜しまれてならない。

桑原先生の追悼文の中に「『臨書重視の書道の確立は誰かがやらなければならない命題である。それをやるのが翠邦の責任』と熱心に私に説いて下さったのが実に我が蕙山先生だった……」文中のかげに弟子を惜しまれいかに信頼されていたか、この言葉に引き入れられる。





故 松 本 春 子

春子さんの人と書

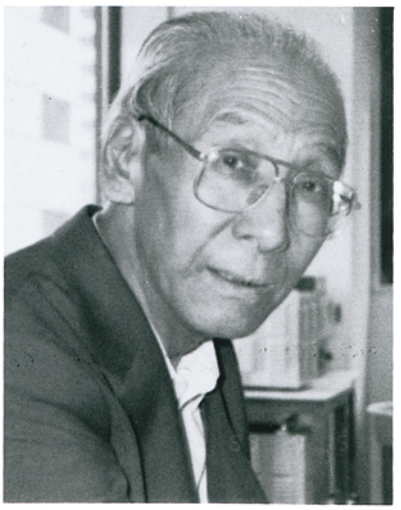
石ばしる垂水の上のさわらびの
萌え出づる春になりにけるかも

これは萬葉集第八巻に志貴皇子の懽の御歌一首として載せられているものであるが、春子さんはこの歌に眼をむけられ、その中の「さわらび」をとり上げて我が名とされた。数多くの萬葉歌の中からこの歌をとり上げたということは如何に萬葉に精通していたかを物語るものであろう。このさわらび会の結成は昭和12年であるが、その６年前の昭和６年10月尾上柴舟に師事している。この年春子さん29歳であるからいわば晩学といっていい。しかし春子さんの努力は年を超えていた。35、6歳で泰東の７、８回展に連続特選をかち得た。その前年は仮名部での最高賞をかち得ている。その時の作品は、柴舟調で一見柴舟の書と紛う程洗練された、玉をころばす様な玲瓏としたものであった。これ等の入賞によって、仮名作家としての立場を確固たるものにした。柴舟のあとに、仲田幹一に師事しているが、然し必ずしも幹一一辺倒ではない。大きな示唆を受けながらも、苦悩の道が続いてそこに春子調が確立されたのであった。さて、春子さんの足跡は、とても北海道在住の人とは思われない超人的なものであった。東京三越で31年、44年、51年と大規模な個展を開いた。これは並の努力で出来ることではない。44年の時は秩父宮妃殿下の御来場あり、51年の第２回展と同時期に開かれた現代女流書展では熊谷恒子さんと共に、美智子妃殿下のご案内役を努められた。勿論、日書美展、創玄展、毎日展での活躍は言うも更。その永年の業蹟に対し、道文化奨励賞、北海道新聞文化賞、道文化賞が次々と贈られた。

道文化賞の折、これで差上げるものはなくなったと私は述べた。所が、その11年後の54年に道開発功労賞が贈られ、開発に書が考えられるとは考えもしなかっただけにびっくりした。その祝賀会で、差上げるものはないと申したのは誤算であった。然し誠に嬉しい誤算であったと述べたのであった。誠に春子さんは、北海道仮名界の宝であり、北海道書壇の大きな誇りであった。再び「春子」は出ないと断じたら他の人に失礼だろうか。その春子さん、昨年６月、90歳の天寿を全うして亡くなられたが、巨星墜つ悲しさを込めて弔辞を捧げた。

宇野　静山





石彩先生を悼む

越坂　柳徳

阿部康彦（号・石彩）
大正６年、札幌市中央区南２条西１丁目生れ、平成３年４月４日、74才で永眠

書　　歴

第25回毎日展から刻字部で連続４回入選
第14回北海道書道展会友に推挙される
第17回北海道書道展準大賞受賞
第32回書道芸術院展審査会員に推挙される
第８回全道書道展審査会員に推挙される
1977年篆心社を創設主幹となる。

先生は昔、印章組合理事長の重責を果されたことがあるとお聞き致しておりますが、そのこともあってか、中央で活躍されておられる篆刻大家の先生方とも精通する面が多く本道の篆刻技術向上のため、森田緑山次いで松丸東魚の両先生を招聘し、御指導を授けられたことは、本道の篆刻愛好者の開眼の糸口になったことは間違いない。

刻字に於いても本道では初の日本刻字協会展を札幌東急百貨店で開催し、大盛会のうちに終了したのも私達の気憶に新しい処であります。

又刻字の指導面でも、中央から内藤香石、長揚石の両先生を次ぎ次ぎにお招きになり、札幌講習会を連続して開催し数多くの毎日書道展入選作家を世に送り出した功績を忘れることが出来ません。

一方北海道書道展では、第５部創設以来初の専任審査員となり、出品点数百点を目標にしておられた様ですが、今回展は百十点とその目標を悠々達成したのに、そのことすら知らないまゝに息を引きとられたことは誠に残念でなりません。今後私達は先生の残された足跡を範として第５部発展のため盡力する所存です。謹しんでご冥福をお祈り致します。





人生の師との別れ

渡辺　美明

故人は第22回北海道書道展に於いて運営委員長を勤められた。僕が準大賞を頂いた年なので22と云う数はすぐ出て来る。いつも上品な背広を着こなしていた姿を思い浮かべながら、遺作に目を通してみた。
故人の姿・意志そのものが浮んで来てしまった。
敗戦を抱えその肩に重くのしかかった日本の歴史が持つ苦悩と抑圧をはね返し今日を築き上げた世代の確固たる一人として猛烈な精神と生き方を持つ故人の姿そのものが伝わってきた。不思議に思った。僕如き凡愚では先ず筆法・書法と云った事が目に映るのが常だったからである。故人にとって上手、下手は二の次で、書それ自体が故人その人を語る手段であり、書法だけの書ではすまされないと云う意志を源に強く持っていたのではなかろうか。

自身の死を目前に自覚し「迷惑をかけるけれどよろしくお願いします」と云った故人。見舞いの方々に気遣っていた故人。故人の故人たるものが、その書から伝ってくる感じと僕の中で一体した。

大いなる今日の基礎を築いた世代の１人がまた消えてゆく。僕にとって父が人間の師ならば故人は人生の師。悲しみは個人のものとして、感謝と精進を誓って心からご冥福をお祈りしたい。

奈良一玄書業略歴

大正12年１月１日　北海道歌棄郡歌棄村（現寿都町）に於て出生。名、専太郎。

昭和14年　17歳　樺太庁立大泊商業学校卒業。
昭和30年　32歳　札幌市、渡辺緑邦先生の指導による本格的書道入門。
昭和37年10月　第５回「日展」初入選。以後入選３回。
昭和39年　41歳　第５回北海道書道展準大賞。
昭和40年　42歳　５月北海道書道展審査員。苫小牧書道連盟副会長。
昭和41年　43歳　第２回「創玄展」準大賞。
昭和42年　44歳　２月創玄書道展一般部審査員。
７月毎日書道展第３部(近代詩文書)委嘱。
11月ホテル「トマコマイ」に於て初の個展開催。
昭和47年　49歳　書号を白寿から一玄と改称。
昭和49年　51歳　「北海道近代詩文書の会」創立運営委員。
昭和50年　52歳　書道研究「一玄社」創設主宰。
昭和52年　54歳　室蘭書道連盟顧問就任。
昭和54年　56歳　４月第21回「北海道書道展」運営委員（審査部長）
９月「日中友好書家訪中団」として中国広洲、西安、洛陽、上海等の古磧、石窟を視察研修。金子鴎亭先生の指名による「北玄12人展」出品。
昭和55年　57歳　２月「北海道近代詩文書の会」事務局長就任。
「中国旅行記」（碑林龍門への路）出版。
10月北海道書道連盟常任委員長、並びに第22回「北海道書道展」運営委員長就任。
平成２年　５月17日逝去（享年67歳）





竹原静涯氏を悼む

私の中学校時代の教師に水泳（古典泳法）のすばらしい泳ぎをされる竹原先生がおられ、初めて見た泳ぎに感嘆した記憶がある。静涯氏と初対面のとき、ふとその先生の面影が思い出された。後で宇野静山先生から竹原栄先生のご子息であることを伺い、これ程まで似た親子が……と思った。それから今日まで30数年間に亘り書を通しての交際が続いたのである。

氏が高校時代宇野静山先生に書道を学んでいたが受験の一時期書を休んだことがあった。その折宇野先生は氏の素質を見込まれたのでしょう。「筆を折ってしまうことのないように」と助言されたそうである。その言葉を励みに書の道を歩み続けることを心に誓い両親からも叱咤激励されたことが精進の糧となり今日の自分があると懐古していたことがあった。氏はその期待に応え精進を重ね日展では初出品で見事入選を果し、また数々の書展（日書美、毎日、創玄、道展）において優秀な成績を収めてきた。日展出品作は橘逸勢の三十帖冊子を基調にした氏独自の作風で今だに私の脳裏に鮮明に焼きついている作品の一つである。

こうして着々と自己研鑽に励んでいた矢先に体調を崩し病と闘いながらも筆を持ち続けた氏の精神力と書に対する意欲には只々頭の下る思いである。昨年の道展出品作を書き終えた後再入院し、道展の終わった５月28日享年58才で遂に帰らぬ人となった。

長年に亘り書を通して得た掛け替えのない友を失ったことは誠に無念の一言に盡きる思いである。また氏の人生において、どうしても書き添えておきたいものに水泳との係わりがある。向井流水法の伝承者として期待を一身に集めていたことでる。父であり師でもある竹原栄氏は向井流の直属師範で向井流水法会々長の要職にある。子息静涯氏は厳しい修練に耐え向井流の師範でありまた副会長を務め日本水泳連盟日本泳法委員会の委員も務める等将来を嘱望されていた実力者であった。日本水泳連盟にとっても誠に掛け替えのない人材を失ったことであろうと思う。

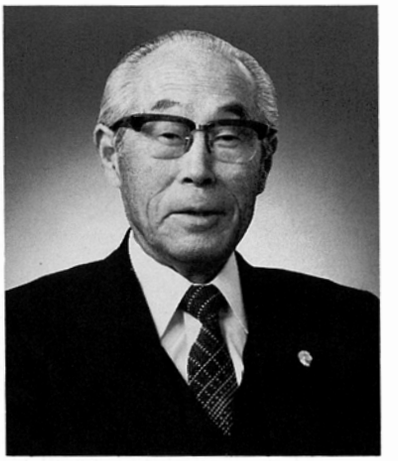
枚挙にいとまのない氏との触れあいの一端を記してこころからご冥福をお祈りします。

土　田　静　峯

役　職

臥龍社同人
創玄展審査員
北海道書道展審査員
日本教育書道連盟審査員
全日本書道能力検定審査員
日本書道美術館参与
書芸社主宰





的が近づく―長谷川東邦先生を憶う

東邦先生逝って既に一年、誠に感無量のものがあります。生年月日が私が一年後で同じ、奥様のお名前と亡妻の名前も同じ、子供も四男二女で同じといろいろ因縁めいたものがあり、日頃から何かしら心の通い合うものがありました。特に次の事が思い出として残っています。

◎半世紀以上にもなるのでその事実は判然としませんが、氏が美唄に居られた時です。学校の視察か何かでお訪ねした事がありました。丁度どのお子様かが出産なさった時だったので他の場所でと案内され、その時の道々の話し合いは文検の事で、私がいろいろ質問の形でお聞きしたかと思います。話がはずんで氏の体を押すようにするので、その後会うとよくその事を言われたものです。

◎氏が夕張高女に在職中の事です。学校に氏を訪ねた事がありました。どこかの会に出品の為の作品か、教室の天井から下まで届く程の大作を掲げてありました。たしか「伊都内親王願文」の臨書作品だったと思います。そして作品を前にして「将来書道に生きるのだ」と熱っぽく語られた事がつい最近のように思い出されます。

◎小樽に住むようになられた氏は硯池会で多くの後進の指導をしておられ、毎年その展示会を催し、その都度出て来て何か話すようにとのお誘いがありました。皆さんの作品を拝見するのもさる事乍ら、氏とお会いして話し合うことを楽しみに欠かさず出かけたものです。いつの年だったか定かでありませんが、氏は弓道でも名をなし範士であられるので、弓道の事について聞いたことがあります。「無心になること、的にあてようなどと考えないで、正しい型で、ひたすら無心になる事によって的の方がこちらに近づいて来るものだ」と、物事の極意というか哲理ともいうべきものを聞いたことがあります。

毎年の道展の審査会で、また硯池会展の会場でお会いし話し合う事を無上の楽しみにしていましたが今になってそれもかなわず、全く世の無情を思わないではいられません。

以上思い出の二、三を記し氏の永遠に安らかに眠られますよう心から祈るものです。（合掌）

（平成五年三月三十日）

藤根星洲

長谷川　譲（東邦）経歴

明治39年６月５日	長沼町に生れる
大正15年	札幌師範第一部卒業
〃	沼東小学校教諭
昭和４年	沼貝小学校（現美唄小）教諭
７年	文部省検定（書道）取得
17年	夕張高等女学校教諭
25年	小樽緑陵高等学校教諭
48年	小樽女子短期大学講師
平成４年	４月27日逝去
	東邦院法弦日譲居士　享年87才

書　　歴

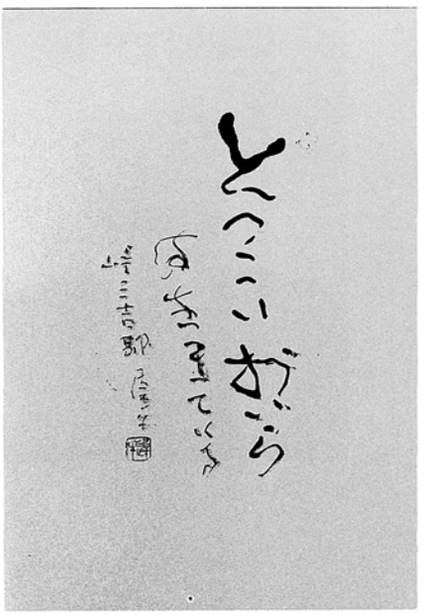
北海道書道展審査会員
小樽市展書道審査会員
書宗院参与理事
全日本書芸文化院総務
硯池会会長

弓　　歴

㈶全日本弓道連盟参与
㈶全日本弓道連盟範士九段
北海道弓道連盟連合会名誉会長

表　　彰

小樽市体育功労者表彰
北海道スポーツ賞受賞
小樽市文化功労賞受賞
文部大臣文化功労賞受賞





長谷川遅牛先生を偲ぶ

平成５年２月23日、遅牛先生が永遠の眠りにつかれました。前日の夕刻までも病床で筆を執っていたのに……。

地元室蘭で生まれ、行政・財界・文化という多方面での活躍はもとより、その功績には限りなき多くの人々が認めるところで、まさに〝巨星墜つ〟の感がいたします。

昭和35年毎日展グランプリ受賞の際、地元のパーティーの席で「私は書に今後の生命をかけ、この地に骨を埋める」と、きっぱり言ったのが印象的であります。

北海道書道展の創設時から、道書壇のけん引車として貢献されてきたことは衆知の通りでありますが、自ら書作においても恐ろしいほど厳しく、日常でも先生のアトリエは書き損じた紙の山。これを見るたびに私は「体の不自由な先生でさえ、こんなに書いているんだ」と自分の尻をムチ打つことが常にありました。左手で書くようになって18年間、精神力だけでなく「書」に命を賭けているとも言えるそのパワーには頭の下がる毎日だったのです。色々な書展に足を運んでも、見る眼はことの外厳しく、絶対に妥協することなく、自分の信念たるものを率直に言う人でした。そして自ら歌を詠むなど新しい感性に富み、今日的な素材で作品を発表することも多くありました。昭和54年には歌集「うつせみ」を刊行、原始林叢書114篇が掲載されています。そして平成２～３年にかけて、飢餓救済の一翼を担うため渡米、ニューヨークで個展を開催、益金を寄付するなど、ボランティア精神も旺盛でした。

以前から書は心の表現であることを主張していましたが、今年３月には「心象の書」として個展を開くべく、作品づくりに取組んでいたのです。病床でも一日として筆を休めず、多くの傑作を生み、私達もこれはすばらしい書展になるぞと胸をときめかせていたものです。

先生の強いご遺志もあり、３月９日から５日間、東京でこの書展を開催し、80点を展示しました。これには大変多くの先生方やファンが駆けつけて下さり、先生を偲んでいただくと共に、数々の励ましのお言葉も頂戴いたしました。

先生は亡くなられましたが、脳裏に焼きついている作品は、どれもがパワーを蓄えた、むしろ若々しい作品ばかりです。遅牛先生の黒と白の世界は永遠に生き続けるものと私は信じ、その執念を引き継いでいきたいと固く誓っております。

新井山　蘭　牛

長谷川正治（遅牛）の足跡

1913.1.27	室蘭市に生まれる
1947	短歌山下秀之助氏に「原始林」同人として迎えられる
1949	書道「随鷗社」（金子鷗亭主宰）入会。日本書道美術院展入選
1952	日本書道美術院展最高賞を受賞
1955～1970	室蘭文化団体連絡協議会会長
1955～	北海道書道連盟創立会員
1960	毎日書道展大賞受賞
1960～	北海道書道展創立会員、審査会員
1961～	毎日書道展審査会員
1963～1969	日展連続７回入選
1967	室蘭市功労者（教育文化）受賞
1970	第１回日本書道使節団員として渡欧
1971～1979	室蘭市長
1975	脳血栓で右半身不随。以降の書作は左手となる
1979	短歌歌集「うつせみ」刊行
1979～1983	室蘭書道連盟会長
1982	室蘭市特別功労者受賞
1992	創玄書道会名誉会員





佐藤大象先生を憶う

私と大象氏との出会いは、彼が昭和40年、我が師塩田慥洲先生を慕って、俗称「塩田道場」と言われ、正しくは『慥心窟』ですが、この慥心窟に通いはじめた頃よりはじまり、同じ屋根の下の仲間として約28年の交友を深めてきた心の友であった。

彼は、酒を最も好み、ほろ酔いで歌をうたい仲間と語り合って時間を忘れ、自然の風物を好み、特に日本三大名石と言われる「神居古潭石」（旭川市神居古潭・石狩川中流より産出）の油沢の肌の深い重厚な味わいに魅せられ、集めた古潭石で家の中・外も問わずいっぱいであった。

その他、盆栽や陶芸にも手を広げその才能を発揮していたし、深川地域での文化活動も意欲的で、指導者としての老人福祉活動をはじめ、深川市書道連盟会長、深川市文化連盟役員など、文化活動や福祉にも大きな貢献をしたのである。

また、墨原社会員としての活動の他、地元深川にも書道の振興を願い、昭和43年『墨生会』を結成、主宰。大象氏曰く「書は人なり」をモットーとして、みんなが、自らが幸福になる為に「書」の本質を基に技術に偏らず心をみがき仲間と共に融合し、練磨して自分自身の世界をつくり・広め・共に手を取り合って心で納得のいく良い世界を築くよう頑張ろう……と。

また一方、道展第４部作家を中心とした北海道墨象会夏季合宿大会を地元深川で開催したのをはじめ、墨原社夏季練成会を毎年開催の労を取り、深川の青少年スポーツセンターの大体育館一面に敷きつめられた新聞紙の上に大画仙紙を敷き、上半身裸で半ズボン、ねじりハチマキ姿で大筆を紙面食い込ませ、やおら天を仰ぎ腰をふんばり歯をむき出し自分の命を紙面に刻み込む姿は、顔を赤らめ仁王の様な姿は今も私の脳裏に浮かんできます。

彼は、常に新しい自分を求め、繊細な筆の一方で激の筆へ、そして大きく空間をきるダイナミックなタッチが彼の独特の世界であり、一線一画がきっぱりと張っていながら静かでゆるやかな空気を漂わせる書風こそ、日々の練磨と自然と遊び「書」こそ我が命として生きるあかしとしていたといって過言ではなかろう。

彼の晩年は、病魔との闘いの連続であった。しかし、病に侵されてなお筆をとらない日はなかったと言われ、昨年の第33回北海道書道展の審査会には、病床よりの参加であったし、７月の墨原社夏季練成会にも姿を見せ、仲間が書いている姿に自分を融合させ、無心・無欲・潔な心で作品製作をしておりました。

彼の不屈とも言える生き方や精神は、今後の私どもの生き方を大きく揺さぶり続けるに違いありません。

水　上　祥　邦

佐藤大象先生略歴

- 大正７年３月　秋田県沼館町に生まれる。
- 昭和８年　北海道富良野へ（15才）
- 昭和28年11月　深川市へ
  墨原社会員（塩田慥洲先生に師事）
- 昭和43年４月　墨生会結成（主宰）
- 昭和44年　書宗（現代日本書芸文化）師範合格
- 昭和48年　北海道書道展会友推挙
- 昭和52年６月　深川市書道連盟会長
  （平成４年まで13年間）
- 昭和58年　北海道書道展審査委員
- 平成４年５月　74才にて逝去





毛利壽海先生を偲んで

昨年、七月末の社中展で、作品を解説しておられた先生が、その直後入院され、一ケ月余りで信じられないように急逝されました。

いつも入院されても、日頃の篤い信仰心と気力によって、不死鳥の如くお元気になられた先生ですから、今回も、と安心しておりました矢先の事でした。

つくづく人間の生命の儚さ、呆気なさを痛感致しました。

先生の精力的な書活動は、今さら述べるまでもありませんが、それにしても、あまりにも全力で駈け抜けて、そして逝ってしまわれました。それは、先生が若い頃から人並以上のご苦労をされ、歩んでこられた、これまでの経験から培われた人生哲学であったのでしょう。

先生は、常々、書の道を深めると共に、独創性と表現の幅を拡げる事に、精力を傾けてこられました。その書は、漢字、かな、詩文書の各ジャンルにわたり、それぞれに個性的な表現を試みられました。又、旅行や写真が好きで、自然に接しては、そこに書に通ずる精神や、ヒントを感じておられたようです。私共にも、「書だけではなく自然（森羅万象）から学べ」と晩年言っておられましたが、私が、この言葉の意味を理解することが出来るのは、いつのことでしょうか。

とにかく色々な意味で大きな先生であった事は間違いありません。まだまだ、やり残した仕事があって悔まれるでしょうが、これからは、空の上で、のんびりと筆を持って好きな書を書いて下さい。そして、私共が怠けておりましたら、時々夢に出て来て「しっかり書け」と叱って下さい。

残された弟子の一人として、先生の書への情熱と幅広さ、独創性は、学ぶべきものとして、継いでゆきたいと思っております。又、そのように頑張る事が、先生への一番の供養と考えております。

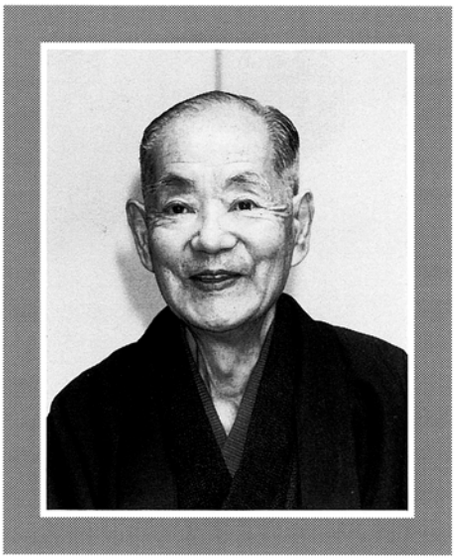
先生本当にお疲れ様でした。安らかにお眠り下さい。

（合掌）

安　宅　大　海

毛利壽海先生略歴

大正12年	北海道厚真町に生まれる。
昭和19年	国有鉄道教習所専修部（卒）
34年	苫小牧市に書心美術院結成（主宰）
36年	苫小牧書道連盟創立（副会長）
37年	苫小牧市文化賞
44年	創玄書道展準大賞・会員推挙
	北海道書道展会員推挙
52年	苫小牧市文化功労賞（社会教育部門）
53～55年	東京帝国ホテルにて個展
56年	毎日書道現代展審査会員推挙
59年	上海美術館にて個展
60年	パリ書道芸術賞（国際文化日仏交流芸術賞）
63年	サロンド・パリ国際アートワールド賞
平成３年	英国・日本国際フェスティバル美術展最優秀賞
５年	中国南京中山稜顔真卿碑林永久保存
	70才にて逝去





桑原翠邦先生の急逝を悼む

去る三月二十七日早朝、桑原先生の急逝の報があり驚愕悲嘆その極に達しました。本道の書家又は先生に関わりある多くの方々も同じ思いであったろうと思われます。早速葬儀に参列しましたが告別式の冒頭、皇室より賜った次のようなお言葉のご披露がありました。「平成七年三月二十九日、午前十時、宮内庁侍従職手島様よりお電話あり、口頭にて左の如く、天皇、皇后両陛下よりのおことばを喪主にお伝え頂きました。

『大変残念です。心より弔意をお伝えするように』

また、三月二十九日午後五時半、東宮御所より御使者がお見えになり

皇太子殿下
秋篠宮文仁様
紀宮清子内親王様

三宮様御連名の盛花一篭と花のようなことばを賜りました。

「皇太子殿下に桑原先生のことをお伝え申し上げましたところ次のようなおことばを頂戴しましたのでお伝えいたします。

『桑原先生には長い間、書道のご指導を賜り有難く御礼を申し上げます。当時の事を思い出し大変なつかしく思っております。どうぞご遺族の方々もお力落としなく呉々もご健康に留意されますように』

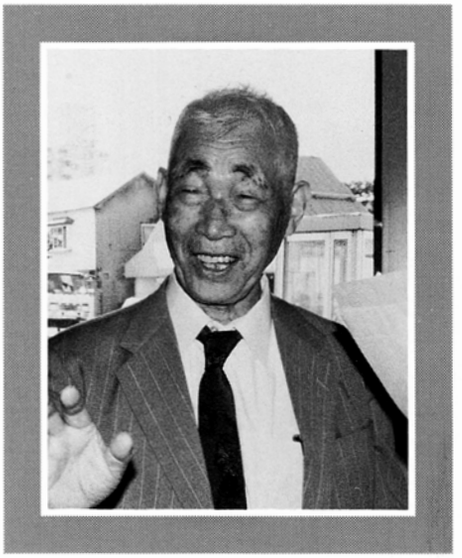
とのおことばでございました。」

そして葬儀は多数の参列者の中厳かに盛大に施行されました。

先生は二十代の前半より全国的にその名が通り、昭和七年請われて天来先生主宰の書学院教授となり、三十代には天来先生の命を受け北京に航し研鑽の傍ら書を教授し、書道親善に尽されました。又古典重視の立て前から古典の臨書を主とした書宗院展を昭和三十二年から開催し、今日に至っているものです。昭和四十七年からは東宮御所へ書道御進講の命を拝し、それまでの各種団体の会長・審査員等の一切の役職を断ち、ひたすらその任に専念して居られたものであります。尚、北海道書道展は第一回展より招待会員として出品なされ、その清新で格調高い作風はわれわれ後進の範とされるものでした。尚、私個人としては昭和二年秋から今日迄六十有余年、書の道は勿論、人の道においても大きなお蔭を蒙っている者で、今日あるは全く先生のお力によるものと深い感謝の念を持っているものです。今その先生と永久のお別れをするに至り誠に痛恨の極みであります。充分その意を尽くせませんが茲に先生のご冥福を心より祈りこの稿を閉じます。合掌

（平成七年四月四日）

藤根星洲





蛯名翠象先生を偲んで

蛯名翠象先生が小樽から埼玉の越谷へ居を移されたのは二十五年も前のことである。その間千紫会をはじめ中央・地元で後進の育成と個展による作品の発表に傾倒され、遂に独自の書境を結実された。さらに北海道書道連盟顧問・北海道書道展招待作家として、毎年想を新たにしたフレッシュな作品で本道書壇の振興に尽力下された。

実は残念なことに御長男葵氏は平成五年急逝された。心少しく癒された頃かお手紙を頂いた。その一端を借りて蛯名翠象先生のお人柄を偲びたい。

「…親思いのよい子でした。インドネシア・ボルネオ等の東南アジアとの取引が中心で出張も多かったが、行く時帰った時は必ず元気な声で電話を入れる子でした。時折仕事の合い間を見ては北千住・浅草で落合って杯を傾けることもあり、飲んべいと親思いは親ゆづりでした。それが僅か三週間余りの入院で七月十九日他界しました。…今回個展とのお話があり恥かしい作をならべ「花還る」展としました。「花還る世上の塵」の一句から取りました。「世上の塵」の方がよかったでしょう。おそかれ早かれ世上の塵となる身でしょう。亡息に捧げる個展で御座います。…」

昨平成六年六月、小樽潮陵高校同窓の有志と道内門人の方々によって米寿記念展「花還る」が開催され大変な肝銘を与えたが、実は亡息葵氏に捧げられた個展であり、さらにやがて間もなく「世上の塵」となり行く先生自身への鎮魂の個展であった。そして同平成六年十二月三御日に蛯名翠象先生は逝去された。

紙面がないので只一つ。

先生は酒仙であったが、お宅で飲む場合は最先に隣室に伏せてをられたお父様に銚子と盃を持参された。「親父がウマイといって飲んでくれた」という時の先生は、いかにも嬉しそうであった。親思い・子思いの先生でありました。今、在りし日を想い深い哀悼の意を禁ずることができません。

倶会一處　合掌

佐藤　　満





噫々　梧舟先生

百万言をついやすよりも、この略年譜の一行一行が輝きをもって、先生の北海道文化・教育・書道界に残されたご功績を示されております。

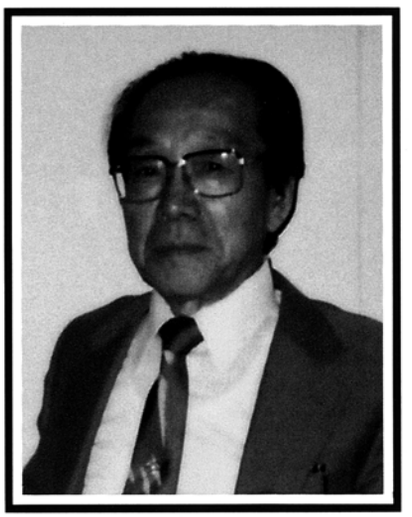
先生は、ご自分の書風を教えることよりも、書の学び方をお導きになられたのでありました。

ここに改めて先生の偉大なる業績・芸術をしのびつつ、ご冥福をお祈りいたします。

（謹しみて竹村亭舟記）

金丸梧舟先生ご経歴

明治39　江差町、金丸忠吉氏の長男として生まれる。
大正10　北海道札幌師範学校入学
14　同校卒業、円山尋常高等小学校訓導、師範学校附属小学校訓導
昭和 2　文検習字合格、九月、札幌師範学校教諭、号梧舟
3　円山開村記念上田翁碑揮毫
7　泰東書道院展特選
8　泰東書道院展特選
北海道書道院主宰、三越にて第一回展を開く
9　泰東書道院展褒賞
10　泰東書道院展無監査
11　陸軍特別大演習の上表文揮毫
15　根室開港碑揮毫
21　北海道書道文化連盟結成
22　北海道書道教育振興会結成、初代会長
23　米軍指名により筆跡鑑定
昭和24　第一回北海道文化奨励賞受賞
27　毎日書道展審査会員
30　北海道書道連盟結成、初代委員長
35　北海道書道展創立会員
初代運営委員長
44　北海道教育大学定年退職
45　文書鑑定功労により藍綬褒章受章
46　文書鑑定の功により警察庁協力功労章受章
47　札幌オリンピック両陛下展望間屏風「世紀雪典」揮毫
冬季オリンピック警察記念碑文揮毫
48　北海道警察殉職者之碑揮毫
57　毎日書道展参与会員
62　書業六十五年記念個展（札幌三越）、作品集刊行
平成 5　勲三等瑞宝章受章
6　７月19日逝去、享年90歳
本名　金丸吉雄、臨池庵主人





畏　　敬——赤坂錦城先生を偲んで

錦城、赤坂長五郎先生に初めてお目にかかったのは、昭和25年、故渡辺緑邦師の北海書芸本部教室でありました。当時の先生は、遠幌地区書壇の代表者として、熱心に指導なさっておられました。以来、先生と私は前後して日展に入選し、北海道書道展会友委嘱、審査員推挙も前後するなど、因縁めいたものがありました。

40有余年、緑邦門の同期生として、恩師亡き後も、渡辺美明先生の書道くらぶの行事や、毎年の書道審査会など、同席のその都度、ご高説を拝聴し、激励されました。

先生は、書道一筋の人生であったと拝察します。書道に打ち込む先生は、物静かな中にも、毅然とした態度に秘められた激しい尚志を感じました。

錦城流の美しい多字数作品は、古典を多年研究されたご研鑽の成果が、見事に開花されたものであります。

善意にみちた誠実な先生のお人柄は、多くの人々の信頼を受け、畏敬されました。先生と私は、書のジャンルや書風を異にするところがありましたが、教育理念や信仰の面では共鳴するところ誠に大きいものがありました。

平成４年、全道書道展の文部大臣賞受賞祝賀会での先生のご挨拶に、幾多の苦難を乗り越えてこられた先生の軌跡をおうかがいすることができました。

「よき師に恵まれ、よき先輩、同僚に励まされ、社中の皆さんに助けられ今日あることは只々感無量です。一人での勉強では、この度の栄誉は得られなかったでしょう。」と述懐されたお言葉から、書道を愛し、門人を愛する先生の限りない情熱を感じました。

みちしば会は、昭和41年、固い師弟の絆で結ばれました。「みちしば」の由来は、道ばたに生えている草花が人やけものに踏まれても枯れることなく、土にしっかり根を下ろし、逞ましく生きる強さが好きで命名したと聞いています。奥様の赤坂千艸さんが第二代会長となり、水野竹城ら道展会友５名を副会長に、竹島胡風を事務局長とするみちしば会が、いよいよ健やかに発展されるよう祈念いたします。

現代の風潮は、よほどのことがない限り、人から厳しく叱責されることがなく、誰もがお互いを甘やかし、人の不正を見て見ぬふりをすることが少なくありません。心から叱ってもらいたい人に、本当に叱る資格があり、納得のいく方法でたしなめることの出来る人間は少ないのが世相です。先生は人々に愛情をそそぐ一方で、人間教育に厳格な方でした。先生の真摯な生活態度は、求道によるものでありました。

単刀直入の話し方の中に、限りない愛情が秘められており、多くの人に慕われた先生はいま、泉下にあられます。

先生は、中央書壇に、道書壇に幾多の人材を送り出されました。「出藍の誉れ」をした弟子たちを心から祝福する寛大な心の持ち主でありました。

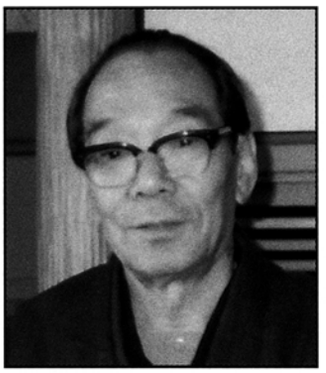
先生のご遺徳を偲び、改めて深い感謝と畏敬の念を禁じ得ません。唯々合掌、心からご冥福をお祈りいたします。

前田　錦象　記

赤坂長五郎、錦城先生経歴

大正３年10月15日　栃木県に生まれる。
昭和８年　短距離競走で、栃木県代表となり国体出場。書道の独習をはじめる。
18年　水戸連隊に入ったが、病弱（肺浸潤）のため除隊。この隊は、その後戦闘で全滅し、先生は九死に一生を得た。その頃、信仰に入る。
22年　夕張市遠幌に移住。同地区書壇の指導者として活躍。
25年　渡辺緑邦先生に師事。
30年　日本書道美術院展推薦一席、毎日新聞社賞を受賞する。
36年　札幌市に転居。
36年　日展初出品し初入選。
40年　北海道書道展会友に委嘱される。
40年　日展に入選。
40年　創玄現代書展に選抜され出品する。（金子鷗亭先生単独審査）
41年　みちしば会主宰。
44年　北海道書道展会員に推挙される。
56年　全道書道展審査員となる。
58年　東京タイムズ新聞社展で特別賞受賞。
60年　全日展に出品知事賞を受賞。
61年　安芸全国展で特別賞として書道美術館賞を受賞する。（南不乗先生単独審査）
平成４年　全道書道展で文部大臣賞を受賞。
平成７年11月４日　命終
師硯院釋錦城　　享年　82歳

—悼—



石田栖湖先生を偲んで

〈栖湖大安〉札幌時代から栖湖先生の書室にかけられている扇額の語句です。この作は魚目先生の書で細身の線で書かれた、どこまでも静謐なたたずまいのものです。

栖湖先生が、北樹会を興したのは、一九六一年でした。この会の機関誌の創刊号の冒頭で、栖湖先生は、「書を単に楽しみや道楽でなく、体をぶつけ合って研究していく、そして、誰の思惑にも遠慮せず、書に関する限り一切妥協を排して納得いくまで論争をしよう——こういう場があったらという願いが実を結んで、ここに北樹会が生まれた。」と書いています。私は、この文章に、先生自身の強い生き方をみるのです。まさに先生の生き方そのものと言えましょう。それは誰の思惑にも遠慮をせず、一切の妥協を排して、からだごと書を求めた結果が、先生の作品には厳と存在するからです。先生は常に自らを厳しく律する中での書の創造活動を続け、完成をめざされました。先生の自らを律するという行為は、古典の臨書という形で行われました。

栖湖先生の古稀を祝う会でのことです。右卿・鷗亭・魚目・南谷・方鶴と大先生方に続く席に、鶴泉さんと私が座すことになりました。この席上、右卿先生が、「石田さんは、意態ともによく得た臨書をする人で、このことでは日本一だよ。」と話されました。

また、栖湖先生は、饒舌や過度の装飾を極端なまでに嫌われた方でした。先生のこの思いが、先生独自の〈栖湖宇宙〉を築かれたのかと思います。無駄な動きを一切そぎすて、ひたすら書美の極点をおい求めた結果が、あの清くも情感溢れる世界の展開となったのかと思います。

私は、ここ十数日、「栖湖臨書選」の肉筆の折帖を開き続けてきました。そしてこの肉筆の書から、私はたくさんのメッセージを送り続ける先生を見ています。

偉大な先生に親しく接する機会を得たことを心から感謝し、衷心より先生のご冥福をお祈り申し上げます。

あるじを失った書室には、今日もあの〈栖湖大安〉があることでしょう。

合掌



愛其静

〈略　歴〉

明治四十三年、北海道根室市に生まれる。

昭和九年、上京し、比田井天来に師事、書道芸術社同人、書学院同人、大日本書道院展の審査員を歴任する。

昭和二十年、病を得て札幌に転居する。北海道では北海道書道連盟の結成の中核として活躍する。また同時に、北海道書道展の創立会員として尽瘁する。北海道立美術館建設期成会の初代事務局長としても活躍し、今日の道立近代美術館の設立に多大な貢献をする。

昭和三十六年、「北樹会」を結成し、代表として後進の育成にあたる。昭和四十三年、東京に転居する。

東京では、月刊誌「書人」「新習字」を主宰発行、日本書道専門学校教授・主事としても多大な功績を残す。

著書に、「栖湖臨書選・全四巻」、「臨書入門」雄山閣刊、「臨書精選」中四巻執筆、日貿出版がある。

中野層翠

—悼—



嗚呼！……原田如峰先生

定年を明年にひかえ、まだ59才、あまりにも短かかった生涯ではないか…。

若いころから病気にはおよそ縁遠いはずの彼が、病魔におそわれるとは…。

自分を飾らぬ率直さ、謙虚さで、いつも他に対するこまめな気配りを忘れなかった彼のやさしさは、多くの教え子にしたわれ、教育現場の重要なポストを歴任、そして明年めでたく定年を迎えるはずであったのに…。

「定年後は室蘭に帰り、じっくり書の勉強をやり直したい。そして出来れば札幌で個展を開きたい。」「妻と中国に旅行もしたい」数々の定年後の夢を語っていた一年前の彼。その夢もかなわず逝ってしまった彼。残念無念。

今でも電話口から彼の元気な声が聞こえて…。

唯々合掌

松井琴舟



霞彩

〈経　歴〉

昭和11年10月2日　室蘭市にて出生
　高校時代は遠藤相洲先生に師事
昭和34年3月北海道学芸大学札幌分校卒業
　室蘭市蘭東中学校、東明中学校、北辰中学校、豊浦中学校歴任
昭和57年　北海道書道展準大賞
昭和60年　室蘭市蘭東中学校教頭
平成元年　白老中学校長
平成５年　苫小牧市光洋中学校長
平成７年　苫小牧市明倫中学校長
平成８年　7月19日　胃ガンにて逝去　享年59歳　本名　稔

・北海道書道展審査会員
・北海道教職員美術展招待作家
・北海道書道教育連盟副会長
・藻臨会理事
・勲五等瑞宝章受章



鶴を東山墓園に瘞む

平成11年３月23日、太田鶴堂先生病のため逝去なさる。享年89歳、茲に北海道書道展に関係の皆さんに、生前のご厚情と葬儀の際に賜わりましたご高配に、遺族にかわりまして、厚く御礼を申上げます。

先生は、昭和48年４月、学芸大学函館分校をご退官後も、お元気で悠々自適のうちに、書の研鑽の毎日を過ごされましたが、最近著しく体調をくずされ、入院加療のかいもなく、遂に不帰の客となられました。

先生は、明治43年６月19日、旭川村にご誕生になられ、少壮の頃より書の研究につとめられて、旭川師範学校に入学されました。卒業の翌年、昭和８年に文検習字科に合格されましたが、その後、北海道庁立小樽中学校教諭を経て、昭和18年７月、若狭翠亭先生の後任として、北海道第二師範学校教諭に迎えられました。爾来、定年退官なさるまで、30年間私共の教育と、先生ご自身の研究を積んで来られました。その間、日本書道美術院、毎日書道会、創玄書道会、函館書芸社会長、北海道書道展、函玄者会長、青氈社主宰等や審査会員を歴任なされ、戦後の書道界に多大な足跡を残されました。その功績により昭和44年に、函館市文化賞、昭和56年には、教育界への業績顕著なるをもって、勲三等旭日中綬章を受けられました。



先生ご来函以来、50有余年にわたり、慈父の不肖の子を諭すが如く、私を訓育下さった先生、忘れ得ない思い出も数多くございました。

昭和19年頃、先生は県命になって古筆の臨書をなさった時期があり、その量は膨大なものでした。傍らの私に「この戦争は、何時までも続くわけがない。必ずや自由に芸術活動が出来る日が到来するであろう。私はその日のために準備しているのだ。」と仰有いました。後年先生の顔法を基調とした放胆な作風の中に、時として表現なさる繊細な筆致は、壮年時代の和様研究の成果とお見受け致しました。

戦後直後のことでしたか話題が田代秋鶴先生の急逝のことに触れられると、「田代先生のご逝去は、まことに残念、儂の師は秋鶴先生１人だけだ。２度と師は持たぬぞ。」と絶句なされ、「人との交わりは、浅い方がよい。親密なれば、この悲しみは癒し難いのだ。」と涙ぐまれました。

当時、30歳代の少壮書家、将来は嘱望されながら、秋鶴先生没後は、敢て師を持たれなかった先生、私共の窺い知ることの出来ない、辛い思いをなさったこともございましょう。

私が函館分校に勤務してからのことでした。先生とご一緒で、信州大学の研究会参加の途次、良寛の生誕の地、出雲崎を訪れた時のことでした。とある民宿の床の間にかけてあった、良寛の草書の大幅、私には到底読みおうせるものではありませんでしたが、先生は、これをよどむことなくお読みになり、「旅行の出発前に手元の図録によって、調べておいたのだよ。」と種を明かされました。半分物見遊山の気分で、準備を怠った私には、鉄槌を下された思いが致しました。

３月26日、葬儀は当市の名刹高龍寺において、厳かに執り行われました。先生逝かれて２旬、今は天界に在り、現世において特にお親しかった、青沼秀鳳、加賀栄治両先生と共に、書や文学について、何時までも果てることのない、語らいをなさって居られることでしょう。

心からご冥福をお祈り致します。　　永田　青雲

太田鶴堂先生足跡

明治42年　０才　北海道　旭川村で出生
昭和２年　18才　旭川師範学校　本科第１部に入学
昭和７年　23才　小樽市入船尋常小学校訓導
　高松宮殿下小樽市に御成りに際し、同市の委嘱により手宮古代文字説明板を揮毫
昭和８年　24才　文部省検定試験「習字」合格小樽に書道教育盟創設
　皇太子殿下ご生誕にあたり、「奉祝の表」を揮毫奉呈
昭和９年　25才　根本富枝と結婚　比田井天来に益を得る。
昭和11年　27才　北海道庁立小樽中学校教諭　翠軒・秋鶴に書を学ぶ。
　天皇陛下北海道行にあたり、「奉迎の表」を揮毫奉呈
昭和18年　34才　北海道第二師範学校教諭として函館に根を下ろす。高校講師　司法筆跡鑑定　個展開催　碑文の揮毫などで地域に密着した活動に力を入れる。
昭和24年　40才　北海道学芸大学　書道教官として学生の指導に熱が入る。金子鷗亭と親交を深め、中央書道展の審査員をつとめる。
昭和35年　51才　毎日書道展審査会員
昭和39年　55才　創玄書道会創立理事　函館書藝社初代会長
昭和40年　56才　学書40年記念個展（３回目の個展）
昭和44年　60才　函館市文化賞　還暦記念個展
昭和48年　64才　教育大学を退官　名誉教授　函玄社会長
　青氈社を主宰し書展開催
昭和50年　66才　学書50年記念個展
昭和56年　72才　勲三等旭日中綬章
昭和60年　76才「喜壽」学書60年記念個展
平成８年　87才「鶴堂翁　米壽を祝う会」開催
平成10年　89才「鶴堂翁　卆壽を祝う会」開催



悲報！

須摩明石君の死を悼んで

平成12年３月23日逝去享年73

懐旧

今日も隣の醫務室を訪れる。

「やあ須摩さん、相変らずやっているね」「うん、此この処が良くわからないのでね」

「どれどれ、これはこの様な書き方と思うがね」

「いや私はこの筆法が正しいと思いますが」

顔真卿祭姪文稿、条幅練習の一コマ。君との関係はこうして始まった。同じ道を学ぶ者にとって、語らずして意志の素通が出来る。処は自衛隊南恵庭駐屯地醫務室、三佐の地位で醫務室長をしていたのである。小生は南部隊Ｐ・Ｘ売店主。



君は職務の合間に、必ず一度は筆を持って研究している。努力、努力、努力、この積み重ねこそ、道を窮める者の真実の姿ではないか。小生が道展審査員になって、丁度二十年目にして君が審査員になる。こんな嬉しいことはない。飛び上がらんばかりの喜びも束の間、本年は当番審査、漸くめぐりきた君が力の見せ処。この重責を果たすべく、急に襲いかかっきた病魔と闘いつつ、如何に苦しみ続けたことか。今一度立ち直らんとする君の姿をみて、その気持ちが手にとる様にわかる。手遅れした癌との闘い、審査日目前にして刀折れ矢尽きたとはこのことか。

君を慕い、君に頼った子弟の悲嘆は如何ばかりか、私共書を愛する者にとって君と語り合えないことが如何に淋しいことか。

新しい書の在り方を次々に発表する君の審美眼は、素晴らしいものがある。創玄展、毎日展、北海道書道展等、大きな展覧会に発表された君の作品は、見る者の心を打つ作品である。小生の後継者としていた君が、私より元気で、私より十才も若い君が先に無限の旅に出立しようとは、何と世の中は無常なことか。もう君とこの世で二度と語り合うことが出来ない今となっては、君の意志を傳えることが私の勤めと信ずる。君があの世に於いても意志の強い君のこと、筆を持って、書を楽しみながら自由に思いきっり書いていることであろう。いつまでもいつまでもこの道を楽しんで下さい。

最後に須摩さん、皆で君の冥福を祈りお別れします。安らかにお休み下さい。永遠の幸せを念じてさようなら。

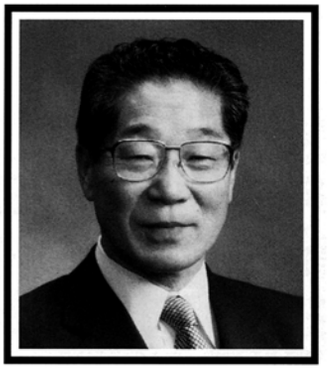
天進合掌

北海道書道連盟、北海道書道展関係の皆様に生前に寄せられましたご厚情と、今回の葬儀に際して賜わりましたご高配に遺族に換りまして厚く御礼を申し上げ搦筆致します。

（伊藤天進・記）

須摩明石先生足跡

昭和３年　北海道瀬棚町に生まれる。
〃 25年　札幌管区警察学校に入校（旭川）
〃 49年　第一施設郡に所属（南恵庭）
〃 49年　日本書道研究会に入会し伊藤天進先生に師事
〃 53年　定年退官し、書道教室を開室
〃 58年　日本書道研究会の同人となり渡辺美明先生に師事
平成元年～４年　恵庭書道連盟会長
〃 ５年　毎日展会員
〃 ７年　創玄現代書展、白鷗賞
〃 ９年　北海道書道展審査員
〃 10年　恵庭市文化賞
〃 12年３月　73才にて逝去



『丸山　薫風先生を偲んで』

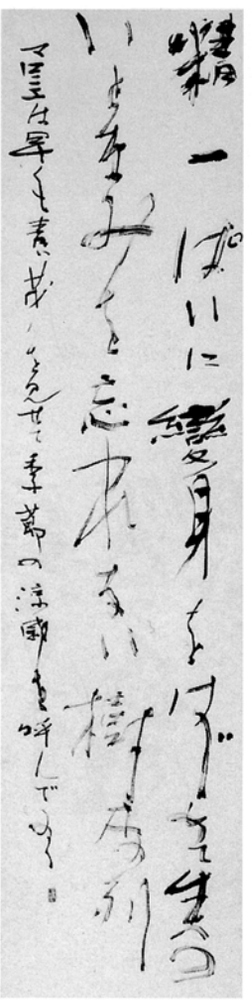
薫風会20年記念誌に次のような、先生の詩がよせられております。

いろいろな人々から
いつも
見守られ
はげまされ
力づけられながら
薫風会と
名付けて
20年
かたよらず
とらわれず
ひろくひろくの
心を忘れず
また明日から
力強く
歩きだそう　(1979・8)

この詩は、先生のお人柄や、生活信条のすべてがうかがい知れるもののように思われます。

この詩のこころは、薫風会の教えでもありました。先生は昭和23年健康を崩されて、千歳少年院を退職、岩見沢市に転居されて療養中のところ、千歳市以来の恩師故渡辺緑邦先生のすすめもあって、書の道に入られ、昭和32年岩見沢市成人学校講師の委嘱をうけたのを機会に、「将来書道に生きる」意志を固められたのであります。昭和34年「青葉のかおりを吹き送る初夏の風」が大好きで、これに因み書号を「薫風」と名付け、会の発足となったのであります。尓来書を通じて市の文化振興に情熱を傾けられて、市文化連盟の結成に参画。昭和41年には、市内各会派に呼びかけて、市書道連盟を結成。昭和42年日韓書道交流を開始、以来20有余年交互に書展を開催、その間同国忠南大学講師、自宅に同大学生をホームステイさせるなど、日韓両国の文化交流に、多大の貢献をされました。これらの貢献によって、昭和64年10月忠南大学長から感謝楯を贈呈されました。

昭和50年北海道新聞社主催による「南空知ファミリー書道展」開催には、各市町村開催者に精力的に協力を要請し、困難を克服して広域に亘る書道啓蒙を図られた熱意には只々頭の下がる思いであります。一方先生ご自身は、病を抱えながら日夜を徹して、研さん精進され、近代詩文書分野において薫風流と評されるほどに、独自の作風を創出、結実されたことは、まことに畏敬の外ありません。市内における近代詩文書に対する酷評もあった頃、毅然として実践を貫き近代詩文書に対する認知の醸成に真摯に取り組まれていた先生の意気軒こうであった姿が思い出されます。先生は旅行が大好き、その行き先々での写真撮影、見事なタッチで描かれたスケッチブック、軽妙な散文など、何時も素晴しく、素人離れした作品に接し、深い感銘をうけたものでした。先生には、日頃の無理が重なったのか平成2年3月病に冒されるところとなり入院、6ヶ月の後小康を得、退院されて一同愁眉を開いたのでありますが、先生は病床にあって、退院したならと考えていたのでありましょう。早速部屋に篭り、翌春にむけ個展開催の意慾をたぎらせ、書作に没頭され出したので、病気の再発が最も心配されるところでした。しかし、ご自身は斃れて後止むの気概で、一向に気にすることなく酷使、平成3年2月危惧されていたことが現実のものとなり、再び病床に臥すことになったのであります。その後、加療は長期にわたり、同年3月には、最愛の奥様を亡くされ、哀しみと、苦しみのなかの療養生活となりました。その胸中は、いかばかりか察するに余りあるものがありました。病床に度たび訪れましたが、その都度話の中に出てくる言葉は「退院したら韓国に行こう」という、まことに心に残る無念とも思われる一言でありました。先生の残された業績は極めて大きくその墨跡は、市民会館をはじめ、諸施設には墨こんもあざやかに、流麗な筆致の「書」が掲額されております。また、市開基80周年記念に埋蔵され百年後に開かれる「カプセル」に先生の書が内蔵されております。



先生は、高潔な人格、強い精神力、深い愛情をもって、私共門弟に多くの教訓を遺して下さった慈父のような師でありました。私は昭和38年4月以来30有余年にわたって、書道のみならず、人生におけるお導きをいただき、今日あるは先生のお蔭と心から感謝を申し上げるものであります。「精一ぱい生きる」とよく揮毫されていた先生、無念にも平成11年6月29日享年78歳をもって永遠の眠りにつかれました。

ここに先生のご遺徳を偲び心よりご冥福をお祈りいたします。　合　掌　　(角田　碧水・記)

丸山薫風先生足跡

大正11年6月　紋別郡興部町に生まれる
昭和22年　故渡辺緑邦先生に師事
32年　岩見沢市成人学校講師
34年　書道研究薫風会創設
37年　岩見沢商業高等学校講師
〃　岩見沢光陵中学校養護学級講師
38年　北海道月形高等学校講師
〃　駒沢大学書道部講師
〃　岩見沢市社会教育委員
〃　株式会社五番舘企画部
41年　岩見沢市書道連盟会長
42年　北海道書道道展大賞受賞、会員推挙
〃　創玄展準大賞受賞、会員推挙
45年　日展2回展～10回展連続入選
46年　岩見沢女子高等学校講師
47年　岩見沢市文化功労章を受く
50年～南空知ファミリー書道展
63年　岩見沢市政功労章を受く
64年　韓国忠南大学長の感謝楯を受く
平成11年　6月29日逝去　享年78歳
本名　丸山　安一



大井秋聲先生を偲んで

故大井秋聲先生は昨年十二月二十三日，静かにご逝去なさいました。門人が階下に集い作業最中のことでしたが，奥様すら後で気が付かれたとのことで，当年八十五才，まさに大往生でした。

ここに掲げる遺作の般若心経は，先生四十才代直前の頃の御作と承っています。精魂こめて書いておられるそのお姿を想像するだけでも心が熱くなってまいります。

「心眼ですよ」とぽつりとおっしゃったそのお言葉を今も忘れることが出来ません。「書くこと以前の心の問題」と「書くことの窮極の目的」とを同時に答えた簡潔明解な「天の声」として私には響きました。

先生は知性に富み，人に倍した行動力をお持ちでした。お若い頃から書を深く愛され，数多く子弟の養育につとめ，更には北海道書壇への貢献度は高く，その業績は広く人々の周知するところであります。

現在の六華書道会は，終戦直後の，あの，人心定まらぬ混乱期にあって先生は「その平安を取り戻すため使命は書家にあり」と深く志し，十一月三日文化の日に決然立って現在地に創設，以来，今年は五十六年目を迎えました。

書は主として神郡晩秋先生に師事，かな古典の臨書に精魂を尽くされ，漢字かなで知られる小野鵞堂，漢字は日下部鳴鶴流を体得，やがては大井流とも称される独自の書風を開発なさいました。

先生の書は，あくまで美しく，その澄めること摩周湖の透明度の如く，優雅なること仏の慈眼の如く，実に厳しさと優しさを同時に蔵されておられました。昭和二十八年，私が入門の頃，澄んだ先生の瞳と，輝く筆の流れに感動し，いつしか足を向けて寝ることすら出来なくなりました。

先生の晩年は不幸にも大きな交通事故に会われ，お話しも，笑われることも少なくなり私達門弟はとても残念でした。

先生はお酒が好きでした。ある席で，先生は突然立ち上がり，声をふりしぼるようにして「まりもの歌」を絶唱なさいました。そのお目に光るものを拝見したのです。この歌は，先生にとって何だったのでしょう。きっと深い感動をお持ちになっておられるのだと知りました。

はからずも，この歌が先生を送る葬送の曲になったのです。このことを私は病院のベッドの上で聞かされ，泣けて泣けて仕方がありませんでした。それは，どこかで先生も懸命に歌っておられるような気がしてならなかったからです。　合　掌　　（小比賀秋嶺・記）



般　若　心　経

大井秋聲先生足跡

大正５年	大井荘之助，ヨネ，７男として現在の豊平区月寒中央通り３に誕生
〃 13年	神郡晩秋先生に師事
昭和20年	六華書道会開塾（11月３日）
〃 28年	第１回むつはな習作展（大丸）
〃 30年	北海道書道会結成に当たり発起人
〃 34年	日本書道美術院展審査員
〃 35年	北海道書道展審査員
〃 38年	第１回むつはな心墨会書展 紺綬褒章受賞
〃 40年	第８回日展入選 創玄書道展審査員 東洋書道学院設立（世田谷区）
〃 44年	第１回個展（東京新宿三菱信託銀行） 『むつはな現代かな帖』発行
〃 48年	毎日展会員
〃 50年	随想集『落花の華』発行
〃 52年	札幌帰塾
平成２年	六華ビル新築
〃 ４年	北海道新聞社より北海道書道展審査員表彰
〃 12年	12月23日逝去　享年85歳



畏敬する亨舟先生の書業に
敬意と感謝をこめて

亨舟先生の書業の偉大さの第一は，その自在な書作品にあります。先生は，書法を古筆に求め，原寸大で学ぶことでそれを極めました。そしてその臨書作は，あくまでも精妙で，その説得力は計り知れないほどに傑出したものです。さらに，古筆臨書から開放された亨舟芸術は，淳雅にして洒脱，加えて峻抜なもので，観る人に限りない感動を与えるものです。晩年の巻子本萬葉集は，先生の代表作で，その豊かな内容に圧倒されます。

第二は，書教育における功績です。北海道書道教育連盟の会長・全日本書写書道教育研究協議会の副理事長として果たされた先生の功績は歴史的とも言えるものです。今日の書写書道教育の確たる定着は先生の力によるところが大です。

第三は，書の普及発展に尽くされたことです。北海道書道展・心画院・千紫会・北心書道会・天心社・墨花会その他の団体の審査会員あるいは代表として，長年斯界の発展に多大の尽瘁をされました。

第四は，それらの書業を支えた人間亨舟の巨大さにあります。先生は，一世の高士とも言える人物です。他に対しては限りない愛情を注ぎ，そして自らは，高い知性をもって律し，どこまでも高潔にその境涯をみごとに貫き通しました。

先生の残された数多くの偉業に心からの讃意を表しますとともに，末永くそれらを伝えていきますことをお誓いいたします。　　（中野層翠・記）



回　　帰

竹村亨舟先生足跡

大正14年　旭川市に父晋・母元子の長男として生まれる
昭和19年　北海道第一師範学校卒業（担任・千葉日出城先生・金丸吉雄先生・二本木実先生）金丸梧舟先生より号亨舟をいただく
昭和24年　文部省・東京美術学校書道講習修了（国内留学）
　　新十津川文化賞
昭和32年　金田心象先生に師事，心画院会員となる
昭和36年　日展初入選・金田心象先生紹介により鈴木翠軒先生千紫会々員となる
昭和41年　北海道書道展大賞
昭和45年　千紫会主催万紅展鈴木翠軒賞（日本橋・三越）
昭和49年　文部省派遣により印度及び欧米六カ国視察
昭和54年　北海道書道教育連盟会長
昭和59年　札幌市立北栄中学校長をもって教職を退く
昭和60年　札幌市教育委員会成人学校講師
　　還暦記念書展（札幌・パークギャラリー）
　　作品集『心花』刊行
昭和62年　北海道教職員厚生会ギャラリーノールテ相談員
平成６年　文部大臣奨励賞（全道展）
　　古稀記念書展作品集『亨舟書集』刊行
平成10年　亨舟復始展（札幌・大丸藤井セントラルスカイホール）
平成13年　４月16日逝去　享年77才



北海道を思う鷗亭先生

招待作家として、長い間本展をお見守り下さった金子鷗亭先生。昨年11月５日95歳の生涯を閉じられました。

平成元年に北海道開発功労賞（北海道功労賞）、そして文化功労賞・文化勲章をお受けになられた先生でしたが、昭和７年志を立てて、比田井天来先生の許に上京され、古典の精髄を究め更に現代書の開拓に終生を捧げられました。特に近代詩文書のパイオニアとして書の戦後史に一頁を画されたことは申すまでもありません。道南の松前町ご出身の先生のその望郷の念は常に本道の書の発展に対する期待に重なっておりましたが、上京する私に事ある度に北海道の書活動の現況に深い関心を示されながらそれぞれの人達を懐しむのでした。ご自身もまた度々にこの地に足を運ばれ、両手をひろげての数多の書人と握手を交わし懇談するのでした。書人の総親和を希う北海道書道連盟の誕生についても、先生のご努力や、厚い気配りによるものであることを忘れることができませんが、そうした動きの中での本道書人の高ぶりが、ついには半世紀にわたる歴史を重ねる北海道書道展開催に結びついたのです。先生は本展にも何度かお出かけ下さって、時に進んでパーティーにも参加されたりし、大勢の書人と歓談することを此の上なく楽しみにおられました。

また第５回記念展のときなどは、先生は北海道新聞誌上で「北海道の実力は全国的な水準にある。指導者層の健全な思想に敬意を表しなければならない。書人の皆さんは古典に極めて真摯に対していて、それが新古典的また前衛的な思考となって北海道の新しい時代をつくっている。」という意味の所感を述べながら、独自の方向をもっている本展への期待と欣びの気持を大きく表明しておられましたが、当時をふり返るととても懐しいことばかりです。

「巨匠金子鷗亭が川端文学の精髄の一語一語の内奥に、おのれのなまの肉声のかようべき通路をみい出したとき、すでに彼の墨痕の比類ない豊饒のリズムは決定されていた。」これは昭和57年に先生が川端文学燦文集を題材にした個展を札幌で催した時、詩人の原子修さんが、当時北海道新聞に「文と書の見事な協奏」と述べた所感の一端でありますが、毎回の本展にご出品下さった先生の一作一作に宿された躍動を今更のように偲ばずにはおられないのです。

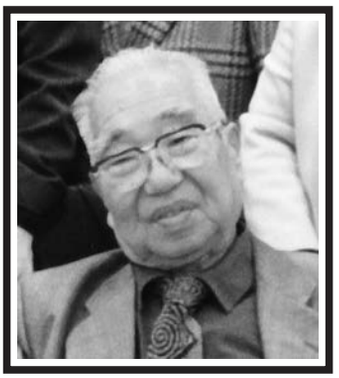
昭和35年の第１回展に招待作家として６人の諸先生をお迎えいたしました。先生はその最後のお一人として40余年にわたって北海道を思い、本道書人の活躍と本展発展の充実を希って下さいました。今は、天高く旅立たれた先生のご冥福をお祈りするばかりです。　　（中野北溟・記）



北原白秋詩「海雀」（昭和27年作）

金子鷗亭先生足跡

明治39年　５月９日松前郡松前町に出生　名賢蔵
昭和４年　函館師範学校卒業
昭和８年　『書之研究』誌上に「新調和体論」論文を発表
昭和23年　毎日新聞社主催毎日書道展創設
昭和24年　随鷗社結成
昭和27年　「全国戦没者追悼之標」揮毫
昭和35年　第１回北海道書道展招待作家
昭和35年　日展会員
昭和38年　「全国戦没者追悼之標」揮毫、以降歴年
昭和39年　創玄書道会創立、会長就任
昭和40年　第１回創玄展開催
昭和41年　第１回個展開催・日展文部大臣賞受賞
昭和42年　昭和41年度日本芸術院賞受賞
昭和48年　近代詩文書作家協会創立、理事長
昭和50年　日展常務理事
昭和54年　「金子鷗亭の書業」刊行
昭和56年　川端文学燦文集による個展開催（東京）
昭和57年　日展参事・紺綬褒章受章
昭和58年　勲三等旭日中綬賞受賞
昭和59年　「書とその周辺」刊行・道立函館美術館に作品、古美術、美術関係図書寄附
昭和61年　北海道立函館美術館鷗亭記念室開室
昭和62年　昭和61年度毎日芸術賞受賞・毎日芸術賞受賞記念「金子鷗亭60年のあゆみ展」、「現代書の父金子鷗亭書業60年のあゆみ展」開催
文化功労者顕彰
平成１年　北海道開発功労賞受賞
平成２年　文化勲章受章・松前町名誉町民
平成３年　「文化勲章受章記念金子鷗亭書展」開催
平成５年　「金子鷗亭四季を謳う」個展開催
平成７年　「金子鷗亭小品展」開催
平成13年　11月５日永眠（享年95才）



桑島雁来先生を偲んで

先生は青年時代、札幌東区の雁来に住んでおられた。当時このあたりは谷地で蘆が自生し、朝な夕なこの光景を友としていたという。ある日水辺に自生する蘆の群生から雁が勢いよく飛び立つ羽音に心躍らされ、この地名と相俟って「雁来」という号を終生の友にしたという。

私にとって先生との出合いから知る限りでは雁来の「雁」は頑固の「頑」が先行していた。しかし、正筆会と、組し、ご指導を受ける過程で、子供のような純真さと素朴さの漂うおじいちゃんというイメージに変わっていった。時にはストレートに、しかも的確に虚を突く回転の速さに敬服した。

故西谷卯木（日展評議員）に師事し、関西のかな書道を北海道に根付かすべく努力されたことも並々ならぬものがあった。ちょうど「雁蘆辺を羽ばたく」姿に似つかわしかった。

昭和十二年「蘆州会」を設立、昭和四十年代「あしす会」と改名するころ、懐刀のお子さまを会の土俵の中で育みながら会員の拡張に尽力を注がれた。田上小華、鈴木竹華両先生がそれで、この両翼に支えられながらわが思いを成就されていった。叶えられたその金字塔が平成十二年、札幌市民ギャラリーでの桑島雁来白寿記念展併設第二十五回あしす会展であった。お子様に恵まれ、人生を好きなように生きた桑島雁来、数多くのエピソードを残して逝った桑島雁来。この会展の一年後ご家族に見取られ黄泉の国へと旅立たれた。何んと三桁の齢を重ねた生きざまには頭が下がります。きっとそちらでも話題を投掛けていることでしょう。　　（八巻水鷗・記）



移老入閑中‥‥

桑島雁来先生足跡

明治35年　４月15日　岩見沢市北町に生まれる
大正10年　札幌師範学校教諭
　　菅原翠洲に日本画の指導を受ける
昭和２年　小林山翁に書の入門をする
昭和８年　芸術院会員豊道春海、日展審査員印南渓龍に漢字の指導を受ける
昭和12年　蘆州社を設立、（昭和40年あしす会と改名）
昭和25年　日展審査員金子鷗亭に漢字臨書の指導を受ける
昭和28年　日本書道美術員審査員に推挙
昭和30年　日展審査員西谷卯木にかなの指導を受ける
昭和35年　北海道書道展審査員に推挙　創玄書道会審査員に推挙
昭和40年　第１回あしす会かな書展を開催する
昭和53年　北海道書道連合展常任理事に推挙
昭和54年　札幌東急デパートにおいて個展を開催
昭和55年　第１回個展作品集発行　正筆会常任理事に推挙
昭和56年　かな入門帖を出版する
昭和57年　北海道正筆代表となる
平成２年　大丸画廊にて個展を開催する　第２回個展作品集発行
平成４年　大丸藤井セントラルスカイホールにて田上小華・鈴木竹華とともに親子三人展を開催
平成５年　長年にわたる北海道書道展審査員の労に対して感謝状を受ける
平成７年　北海道書道連盟に対する長年の尽力に対して感謝状を受ける
平成８年　あしす会創立60周年記念第24回書展を開催
平成12年　11月桑島雁来白寿記念展併設第25回あしす会展
平成13年　12月７日　逝去（享年百歳）



追悼　田中翠鶴さん

人懐こく、明るく感動を込めて話す姿に羨ましささえ覚えていたが、その田中さんが黄泉の地に逝ってしまった。

天の無情さを痛切に思い知らされながら、その数日前まで田中さんと行動を共にしていたことがらが脳裏に焼きついており、幾度となく、それを反芻する日々が続いた。

大胆、且つ繊細で独自な書境に、近年益々磨きをかけていた田中さんが、自分の人生の軌跡（書）を明解（発表）にして、ころりと潔く往生した。それで、生命を全うしたのだ。私はそう思いたい。

二日、鷗亭先生の告別式に参列するため、旭川から数人が同道した。その途上、わが書創社のあり方について熱っぽく語り合った。会の運営や組織の内容について核心を突く意見を開陳したのには驚きを持ちながら聞き入った。

午後、東京郊外の施設に入院した姉を見舞うと言って、私どもと別行動をとったことが、体調の異常に拍車をかけることになったのだろうか。迷い迷い辿り着いたらしく、ホテルに帰ってきた時は６～７時間を経ていた。

翌朝、ホテルの周りを散策したのは一時の和みであったと思いたい。斎場で参列者の列に着き、田中さんは数人の人と歓談していたが、その人達とは最後の会話となった。

焼香を終え、斎場の出口に立った田中さんの様子は、焼香前の言動からは考えられないほどの変わり様であった。

鷗亭先生の霊前に立ち、感極まってのことなのかと思ったが、先を促しても反応が緩慢で、俄かに無口になったことに戸惑ってしまった。ハイヤーの中での気怠い様子や荒い息遣いに驚いて声をかけたりもしたが、ホテルに帰っても状態が思わしくなかった。

病院へ行き、血圧の異常な高さと不整脈、前歴の脳の病気等を含めて適切な処置をしてもらった。

帰旭後の５日の午後、田中さんから電話があり上京中の謝意を受け安堵した。再び電話があったのは夕方である。先ほどの電話は舌足らずであったこと。今までいろいろ迷惑をかけた等々。まるで過去を精算するかのような話しぶりに、私は、「長い付き合いの中で何をいうのだ。」と、かなり強い調子で言葉を返した。「そう言ってもらうと嬉しい。」と、そして、最後に「明日、病院を予約したよ。」と話していたが、それを待たず、その数時間後に逝ってしまうとは。

上京前に社中の一人一人に電話をしたり、私への電話の前後に長い付き合いのあった仲間にも電話をしていたりしたのだ。今にして思えば、己の命の限りを予感していたかのように思えてならない。ご冥福を祈るのみ。

この度の上京から帰旭まで、石崎、矢野両君の心暖まるお世話は、田中さんも心から感謝しているに違いない。　合掌

（山田汎暁・記）



曼　殊　沙　華

田中翠鶴先生足跡

略歴

昭和９年　４月20日　上川郡剣淵町生まれ
昭和31年　北海道学芸大学旭川分校終了
平成13年　12月６日逝去　享年67才

受賞

平成６年　旭川市文化奨励賞

主な書歴

昭和35年・昭和53年　日展入選
昭和46年　創玄書道展大賞「平原獨悠々」
昭和48年　北海道書道展大賞「古仏坐」
昭和60年　創玄書道展文部大臣奨励賞「曼殊沙華」

代表者展

平成３年　北海道の「書」20人展の世界
（道立近代美術館）
平成６年　創玄書道展30周年記念創玄代表作家展
（上の森美術館）

役職

毎日書道展審査会員
創玄書道会１科（漢字部）審査会員
北海道書道展会員
書創社顧問



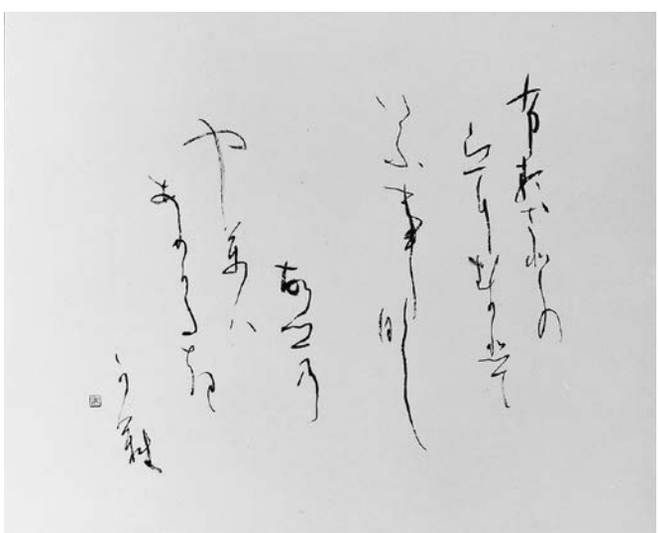
水島美枝子先生より慈愛の眼差しをいたゞいて

いつもお着物姿でにこやかに、優しいお声でお会いくださる水島美枝子先生。大好きな書を「はまなす会」のお弟子様方と、又ご近所の菊水の皆様とはコーラスを楽しまれて広いお宅はいつも和やかな笑い声で満ち溢れておりました。お側で過させていたゞきました私は今、思い出と共に慈愛の眼差しを熱く感じております。

日本の伝統美である「かな」を戦後すぐの混乱時代、この最北の地に「さわらび」という種を蒔かれた松本春子先生に師事されたのは先生41才の時と聞きます。ご主人様の次にご尊敬し敬愛申し上げた先生は、一週間が待ち遠しく、ひたすら書き続けたとのお話は、よくお伺いしたものでご座います。漲る情熱で北海道書道展に挑戦され、又創玄展、毎日展とご活躍の場を広げてゆかれました。

昭和42年には待望の「はまなす会」を創立、今日迄多くのお弟子さんをお育てになられました。

先生は常々、私達主婦は先は、ご家庭を第一になさい。それから、かな文字の美しさを心に写し、豊かな日々のために手紙は筆で書くことを勧めてこられました。そして昨年は和やかに35周年記念展を開催することができました。が、先生の御足は更にお悪くなっており、会員皆が車椅子を押し一作一作を見ていたゞきました。一人一人のお顔を見つゝ今後の課題をお教えくださるお姿に一同感涙、感動いたしましたのがつい先日の事のように蘇えります。会の皆様を「私の宝物」とご自慢なさる満面笑みの先生は、病院のベットに臥されても“どうか、皆が仲良くお稽古を続けられるように”と手を合せて念じられるお姿は尊く、たゞたゞ頭が下がり、強く手を握ることでお答えしたのでご座いました。又先生はよく手を翳し筆を運ぶ仕草をなさいました。最後まで展覧会に新作を発表したいとの意欲を持ち続けておられたので、構想を練っていらしたのでしょう。



そんなある日、ご気分もよかったのでしょうか。ベット前のテーブルでノートに字を書いてらっしゃいました。

「天下泰平」と。それは実に堂々とし、骨ある線は気魄に満ち、先生の渾身の力をこめての傑作に私は、震えが止りませんでした。新世紀への社会に、ご家族に、お弟子さん方に願われた深い深い母としての、師としての泰然とした気概が漲ってのお言葉と存じました。生涯、謙虚にいつも心の平安を願い気丈にお暮しになられた先生は今、静かに菊水のお家に戻られました。透った厳かなお顔はお見事な人生を物語っておられます。私ごときが生意気をお許し願って、あっぱれな生き様を私共にお示しくださいました。と、ありがとうご座いました。

月日は無情に過ぎ行きます。私はこれからも憧の眼差しを天に向けてまいります。ひと筋の光を求めて。

（大川壽美子・記）

水島美枝子先生足跡

明治42年　4月14日生
昭和25年　41才　松本春子先生に師事、さわらび会入門
昭和35年　第1回北海道書道展特選
昭和36年　第2回北海道書道展特選（第1席）会友推挙
昭和40年　第6回北海道書道展準大賞、審査会員推挙
昭和42年　はまなす会発足
昭和49年　現代女流展初出品（東京）札幌にて移動展を開催する
昭和63年　さわらび会退会
平成2年　書と絵、母子展（札幌㈱今井）
平成3年　同展（ニューヨーク）
平成6年　84才　酉の会展出品（札幌大丸藤井セントラル）
平成7年　第1回はまなす会展（札幌ギャラリー・ノルテ）
北海道書道連盟40周年記念功労賞
平成8年　北海道書道展審査員30年表彰
平成9年　藍綬褒章受賞
平成10年　第2回はまなす会展、米寿記念（札幌ギャラリーノルテ）
平成12年　第3回はまなす会展・35周年記念（札幌資料館）
平成13年　6月1日逝去　享年93才



松井琴舟先生を悼む

松井琴舟先生、平成14年１月12日、ご逝去。66才。約１ヶ月半に亘る入院加療中の急な出来事でありました。

まだまだ楽しいご計画もおありだったでありましょう。先生の無念さを思うと残念でなりません。

また葬儀の際の、ご家族及び門人の皆様の悲しみ嘆くご様子に、いかにかけがえのない先生であったかを改めて窺い知る思いでございました。心からお悔やみ申し上げます。

琴舟先生は、昭和44年第10回北海道書道展に於いて準大賞の栄を受けられ審査会員になられました。33才。鮮烈なデビューでした。作品「橙香寒」には、当時先生がいろいろと勉強されていたことの成果が遺憾なく発揮されていたと、私は思います。印象深い作品でした。

琴舟先生は、会員になられた後も今日に至るまで飽くなき挑戦を続けられ、数回に及ぶ個展・さまざまな書展を通して、先生独自の格調の高い世界を展開し続けてこられました。敬意を表する次第です。

北海道書道展はこのたび43回展を迎えました。琴舟先生はこの間に運営委員としてその任を果たされたこともあります。また本年、発足以来46年目の北海道書道連盟に於いても理事・常任理事の重責を担いました。誠にご苦労様でありました。

琴舟先生は、平成８年３月札幌藻岩高校を最後に退職されましたが、本道書道教育界にあっても指導的立場にありました。道高文連専門委員長、道高書研事務局長・理事長、道書道教育連盟理事、札書研副会長、道教職員美術展運営委員、道高教研運営委員長、等々であります。

琴舟先生は、私にとりましては大学時代の先輩であります。また先生とは、北海道臨池書道会（故・金丸梧舟会長）及びその後、平成８年５月に新発足した藻臨書道会（永澤楊舟代表・琴舟先生同13年８月退会）で、ご一緒させていただきました。先生は前者では理事、後者では理事長として会の運営に力を尽くされました。

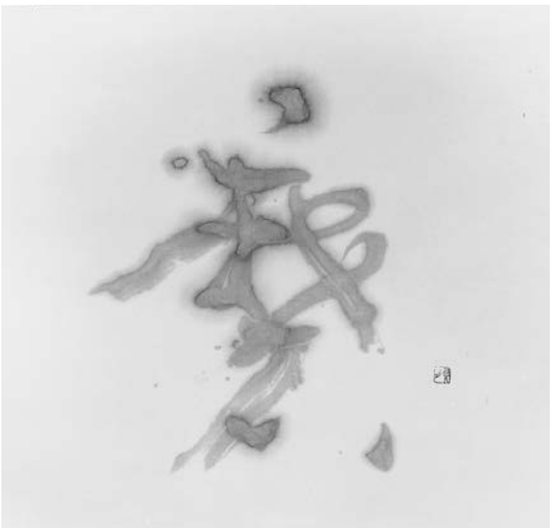
琴舟先生の作品づくりに於ける指導・助言は正に当を得たものでありました。

「一生懸命に」「勉強すべき。そのうちにわかる時が来たら、わかった通り実行を。そして更に勉強を」「何枚も何枚も書くことが自分の求めているものを一度で表現するための訓練」という、藻臨書道会報での一節は、今も先生の言葉として生きています。

松井琴舟先生、先生からご指導いただいた方々はそれぞれ北海道書道展出品作品にあっても、自分の顔を持つまでに力がつき頑張っております。

誠にありがとうございました。

ご冥福をお祈り申し上げます。　　（長谷川北邦・記）



磨

松井琴舟先生足跡

昭和10年　12月12日生
昭和40年　北海道書道展特選
昭和41年　日展入選
昭和44年　北海道書道展準大賞
昭和41年　第１回個展
昭和51年　第２回個展
昭和55年　第３回個展
昭和60年　第４回個展
平成４年　第５回個展
平成９年　第６回個展
　　北海道書道連盟常任委員
　　北海道書道連盟運営委員
　　北海道書道展会員
　　北海道臨池書道会理事
　　北心会会員
　　旭香会代表
平成14年　１月12日没



嘉瀬萬秋さんを偲んで

若い頃、俊才とも奇才ともいわれた嘉瀬萬秋がついに死んだ。不死身と思っていた萬秋が！

昭和59年10月、急性くも膜下出血に倒れ、翌々年、胃癌に攻められ、その後も常人ならそれだけで参ってしまうような病魔におそわれたが、その全てを快癒させていた。

この１月31日彼から電話があり、「今家に帰って来たんだが体調思わしくなく検査入院の結果、一昨日宣告されたよ。癌で命はあと一年だとよ」そして自分が死んだら葬儀をタノム、と！力なく。返す言葉もなく、ワカッタと言う。

２月11日夕刻、奥さんからの電話で、急ぎ出かけ対面した。ほとんど意識のないままベッドに倒れている萬秋さんの姿に暗澹たる気持ちになった。「萬秋さん、萬秋さん」と声を掛け手を握る、手に伝わる力はなく、目を開こうとする瞼がかすかに動く。現代の医学をもっても以前の萬秋さんに蘇らすことが出来ない事実に胸がずっしり重くなる。萬秋さんとのつき合いは半世紀近くと続いた一番古い友人である。そのくせ性格は水と油。まるで正反対だ。だからこれ程長く続いたのかも知れない。二人の間はつかずはなれずという空気の交流とも違う。書に関しては常にライバル意識はもった。絶えず彼はその時を切るようなことをテーマにし、そのテーマに挑戦し、また追求もした。妥協や手抜きを嫌った彼だった。

師、渡辺緑邦先生ともよく議論し闘った。きっと常に張り詰めることで充実感に限りない魅力を感じていたものと思う。充実感を求め苦しみ、困難と闘いながらテーマを追い続けた。

彼が若くして大病にやられなければ、充実した一生だったと思わずにはいられない。自分の考えのまま、自分の思う通りに生きた。自分の考えのまま、自分の思う通りに生きられる人はなかなか少ないと思う。

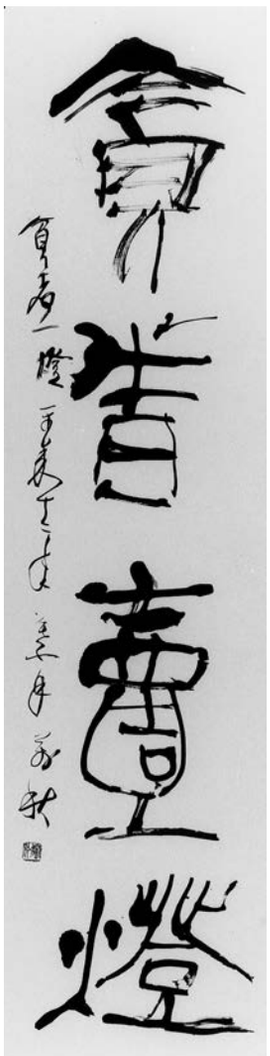
医者からあと一年と言われた「いのち」。好きなことを存分にやるからな、と言った萬秋さんはわずか二週間で生きることを終えた。彼一流の生き方を改めて考えさせられる。ダラダラ生きたって仕様がないや、人間ヤメタだ。

無響さんを交え、三人でよく酒を飲み語り合った。が、やはり二人で酒場に居る方が多かった。よく飽きずに議論をし、論争もあり、喧嘩別れもたびたびあった。それが重なり、友情は一層かたくなったと思う。

この数年、作品に力がなくなって来た。「萬秋さんダメだわ」「そうか、書き直す」と素直。以前なら「馬鹿もん、これは傑作だ」で、突張った。

無響・萬秋・緑巣、四十数年続いた三羽烏。中の一羽は天高くとんで行ったが、三羽烏はいつまでも消えないよ。

いろいろ教わった。ほんとに、どうもありがとう。合掌　　（我妻緑巣・記）



貧者一燈

嘉瀬萬秋先生足跡

昭和６年　１月７日　札幌市に生まれる
昭和27年　渡辺緑邦先生に師事。傍ら、桑島雁来先生、青木萬有先生の益を受く。
昭和34年　日本書道美術院展　第３部（近代詩文書）推薦
昭和35年　日本書道美術院展　第３部（近代詩文書）特選
教育部審査員推挙
昭和36年　第２回北海道書道展　第３部特選一席
昭和37年　第３回北海道書道展　第３部特選　委嘱に推挙
昭和40年　第１回創玄展学生部審査員
昭和43年　第９回北海道書道展準大賞　会員推挙
昭和59年　無響・萬秋・緑巣　書の三人展（札幌・大丸藤井セントラル）
平成14年　２月12日逝去　享年72歳



悼 蓮沼公仁子先生　不易のひと

「松本春子展の作品集を頂きました。行けなかったけれど大変盛会だったそうで…」蓮沼先生から珍しく電話を頂いたのは、つい先日の事の様に思われる。久々に話が弾んだのに、思いもかけぬ永のお別れになってしまった。

先生のご実家が父の開業する松本医院に近く、患家でもあったご縁で、母春子が主催するさわらび会に入会されたのが昭和16年、会員として実に半世紀を支えて下さった。翌年の泰東書道展出品を手始めに、戦後の日書展・毎日展等で受賞を重ねられ、昭和35年に発足した北海道書道展では、第１回展から審査員を務めておられる。逝去された本年も当番審査に当たられる筈であった。まさに生涯現役を貫かれ、道展の仮名を支えて来られたご功績は大きい。

平成元年、母の没後私が会を継承し、先生には顧問の立場でご協力頂いた。札幌丸井今井デパートでの「松本春子遺作展」開催後、それを節目とされてか会を去られた。慰留に努めたが辞意は固く、お送りする他なかったが、これも先生流のご配慮だったかもしれない。

先生はその後二師にまみえることなく、仮名書が大きく変化し、師春子の書も晩年は変貌を遂げたにも拘らず、また仲間たちが新境地を模索する中を、毅然として中期までの師風を、かたくななまでに遵守され続けた。流行に棹差さず、しっかりと不易を踏まえたその姿勢はむしろ潔い。先生のお作は時流におもねる卑しさがなく、平明清澄で温かい。後の世に評価されるのは、こうした衒いのない自然な作品かもしれないと最近想うところである。

先生のご功績の一つをここに留めておきたい。平成７年、北海道書道連盟が創立四十年を期して、記念行事の企画を募られた時、当時理事に名を連ねていた私は、第１号からの連盟報覆刻を提案した。40年に亘る資料が全て揃うか、不安もあったが、かねがね先生の整理と保管の能力に驚嘆していた私は、あそこにならあると確信して、打診した所、邪魔になったので、そのうち捨てようと思っていたとのこと。全部とゆかぬまでも殆どが揃い、会報担当の先生方のご努力で欠号を補って全号が纏まり、二年後百号発行記念として、めでたく刊行する事が出来た。　「取っとき魔が思わぬ所でお役に立って…」　総会の席上少し羞らいながらそう挨拶されたが、戦後の北海道書道史（書壇史）を語る貴重な資料が埋もれないで済んだのは、ひとえに先生のお陰である。

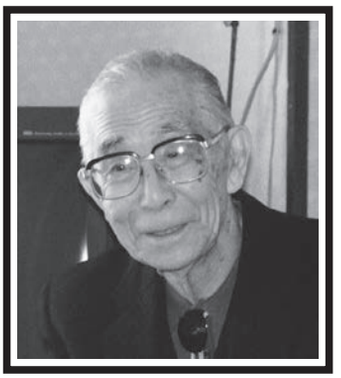
名を連ねながら審査に臨まれなかった今回展で、永い間期待し続けておられた高弟の澤田弥生様が、めでたく準大賞を射止められた。天の采配の絶妙さ、先生も泉下でさぞお喜びの事であろう。公私にわたる先生のご尽力に満腔の感謝を捧げ、今は安らかに眠りに就かれん事を心よりお祈り申し上げます。合掌　　（松本瑛子・記）



すみのえの…

蓮沼公仁子先生足跡

大正10年　４月29日札幌市に聞こえ高かった料亭千代本・谷口家の長女として誕生
昭和16年　さわらび会入門、松本春子に師事
昭和17年　泰東書道展・第１回さわらび会展に初出品、以後戦時下の休会により一時中断
昭和18年　蓮沼満雄氏とご結婚、一男一女を挙ぐ。
昭和21年　ご家族のご理解のもと書道再開、泰東展を継承した日書展・昭和23年設立の毎日展に出品、受賞を重ね中央展における地歩を築く。
昭和30年　北海道書道連盟発足、地方理事に名をつらね以後役員・事務局を歴任
昭和32年　日展入選、以後昭和40年にも入選
昭和34年　第１回北海道書道展審査員
昭和37年　札幌学芸大学（現北海道教育大学札幌校）非常勤講師、昭和39年まで出講
昭和37年　毎日展委嘱（現会員）、平成３年まで在籍
昭和40年　日本書道美術院より創玄書道会へ移籍
　　創玄展２科審査員
昭和41年　指導するグループを「ゆきざさ会」と命名、一層後進の育成にはげむ。
昭和54年　ＳＴＶ文化教室講師
昭和57年　創玄展１科審査員、平成８年まで就任
平成４年　北海道書道展30年表彰
平成13年　北海道書道連盟功労者表彰
平成14年　３月11日逝去　享年80歳



星洲先生を悼んで

星洲先生は、書の道とは、道元の解く「眼處聞聲」だと述べています。同時に眼處聞聲を識るためには、道元は、「ただまさに先聖の道を行履すべし」とも教えている。だから、私の書は、ひたすらに書の古典を求め続けるのだと常々語っていました。このような先生は、道元の深い思想を根底にひたすらに書を求め続けました。その求めかたは、言いようのないほどに厳しく自らの内面に、そして紙面にと向かわせました。したがって先生の揮毫の態度は終始端正で、少しの揺るぎもありませんでした。

先生は、鍛練に徹することで心眼が開かれ、心の自由を得られると考えていました。その結果が、終生一貫して落款した「学人星洲」となったのでしょう。書にたいする厳しい姿勢が学人という言葉にこめられているのです。

先生の書は、一見淡々として見えますが、実にドラマチックです。また、やさしさに満ちているようですが、このやさしさの中には確たる強靭さを蔵されています。先生の書美はその本体を秘することで高まったのでしょう。感動の深さを感じます。そして先生の巨大さを知らされます。

先生は心身ともに健康でした。先生の句に「雪打つをここちよく受け木刀の素振りの気合自づ高まる」があります。毎朝木刀の素振りをし、静かに墨をすり、画仙紙に向かいました。そして蒲団に入ってからも書とともにありました。

「寝ながら書作の想い湧きたれば虚空に大きく手書きしてみる」

今永遠の眠りにつかれた先生は、黄泉にあって安らかに書を楽しんでいることでしょう。

（中野層翠・記）



至人無為

藤根星洲先生足跡

略歴

明治45年　6月5日　秋田県に生まれる
大正14年　石井梧鳳先生の指導を受く
昭和2年　桑原翠邦先生と相識る
　　川谷尚亭先生の揮毫ぶりを見る機会を得る
昭和初年より昭和10年前後まで
　　比田井天来・川谷尚亭先生を受く
昭和47年～平成6年　書宗院理事長
昭和63年　第1回夕張市栄誉賞受賞
平成14年　7月13日逝去

個展

第1回　昭和36年　夕張市
第2回　昭和38年　夕張市
第3回　昭和44年　札幌市
第4回　古稀記念　昭和51年　札幌市
第5回　昭和55年　札幌市
第6回　喜寿記念　昭和58年　札幌市
第7回　傘寿記念　昭和61年　札幌市
第8回　米寿記念　平成6年　札幌市
第9回　平成9年　江別市

その他

全日本書芸文化院評議員
北海道書道展会員
朝日カルチャーセンター講師
北海道書道教育連盟顧問
北海道書人団顧問
北日本書道学会顧問
全道書道会顧問



追悼臼居和子先生・愛と慈しみのご生涯

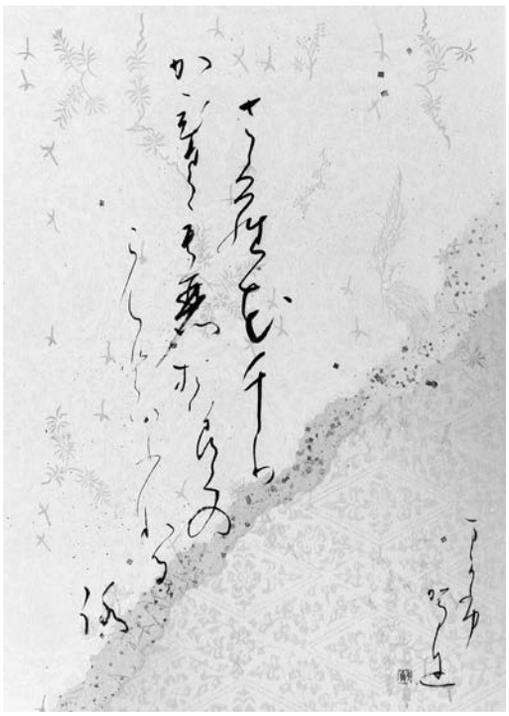
平成14年６月７日朝、先生はいつものように朝日カルチャー教室に出講されようとして、ご自宅の庭先で倒れられ、直ちにご入院、意識の戻られぬまま翌早朝逝去された。ご家族からお知らせを頂き、突然の事に茫然とする傍ら、生涯現役を貫かれ、老いや病の翳さえ見せず去られた潔さ美しさは、誠に先生らしく見事なご生涯だったと思わずにいられなかった。

通夜の祈り・葬送式は聖マーガレット教会で行われたが、先生が幼児洗礼と13歳で堅信を受けられた敬虔なクリスチャンでいらした事を、私共はそこで始めて知ったのである。およそ先生はご自身についてあまり多くを語られなかった。誇るべき学歴・才質・東大出身の夫君・恵まれたご家族等、羨ましい程多くの宝を持たれながら、それらをひけらかす事も無く、常に謙虚に暖かく人に接しておられた。夫君直道先生の札幌地裁判事就任に伴い札幌に転居されてから、東京女高師在学中、書を尾上先生に学ばれたご縁で、柴舟門の母松本春子の許を訪れ、さわらび会に入会されたのは昭和30年代と記憶する。柴舟先生仕込みの古典臨書で鍛え上げた実力はたちまち頭角を現し、道展・毎日展創玄展等で、審査員・役員としての立場を着々と築かれた。

決して高ぶらず気取らず、ユーモアを解するお人柄は会員の信望を集め、指導的立場に立ってさわらび会員を導いて下さり、晩年は顧問として終生さわらび会の良識を支えて頂いた。お人柄そのもののような気品高く典雅な書は勿論のこと、物腰の優しさ美しさ、聡明さ、仕事の確かさ、「妻を娶らば才長けてみめ麗しく情けあり」と言う歌さながらに、人としても女性としても尊敬の的であった。また、お若い頃登山に親しまれたとかで、健脚でいらした。かつて会員５・６名で八剣山にお供したことも懐かしいが、生涯現役を遂げ得たのも、そうした鍛錬の賜物かもしれない。直道先生と共に外出される麗しいお姿を時々お見かけし、お子様方には愛と慈しみの心を大切にと導かれ、理想的な家庭を築いておられた。すべてに恵まれた先生の唯一の痛恨事は、東京に嫁がれ同じ書の道で期待されていた長女の恭子様に先立たれた事であろうか。「主が与え、主がとられたのだ。主のみ名はほむべきかな」と旧約聖書のヨブ記を引用されながら、慟哭の声を聞いたのはこの時だけだったと、葬送式の折喪主直道様のご挨拶で伺った。

その恭子様、直道様、また書や短歌の親友で昨年先立たれた道展会員松田幸子様と共に今は天国で永遠の憩いに入られた。憩いの安らかならん事を祈り、生前賜った数知れないご恩恵に感謝しつつ追悼の言葉とさせて頂きます。

（松本暎子・記）



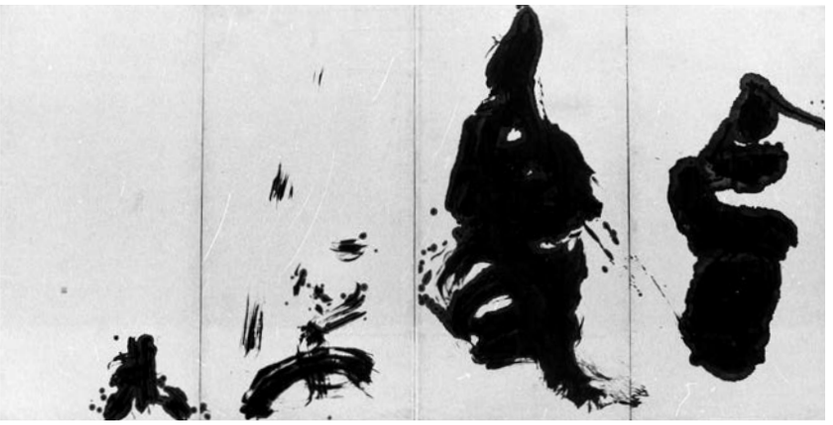
さくらばな…

臼居和子先生足跡

1914年10月18日　樺太にて誕生
1936年　東京女子高等師範学校卒　国文学専攻
　在学中尾上柴舟先生に書道を学ぶ
　卒業後彦根高等女学校・東京府立第六高等女学校を歴任
1941年　臼居直道氏と結婚・二男二女に恵まれる
1951年　裁判官だった直道氏の赴任に伴い札幌に転居
1960年頃　さわらび会入会・松本春子に師事
1967年　第８回北海道書道展会友
1970年　毎日展において毎日賞受賞　委嘱（現会員）
　1989年まで在籍
1974年　第15回北海道書道展準大賞　同展会員
　第40回展（1999年）まで審査にあたる
1980年　朝日カルチャーセンターかな書道講師
1985年　創玄書道展一科審査員、平成３年まで在籍
1990年　さわらび会顧問　終生会の運営を支える
2000年　北海道書道展招待作家

　大学婦人教会札幌支部会員
　東京女高師同窓会「桜陰会」札幌支部長
　「原始林」（短歌）同人
2002年６月８日帰天　87歳８ヶ月の生涯を終える





盲亀浮木

追悼　塩田慥洲先生

北海道書道展招待作家塩田慥洲先生が、本年３月19日満95歳を一期として、その生涯を閉じられました。

先生は、教育と書芸術に一生を捧げられました。愛別町で多感な少年・青年時代を過ごし、15歳で同町で教員となり、一生涯を掛ける教育と書への営みがスタートされました。その後、昭和９年文部省中等学校教員習字科検定合格後、数年を経て旭川市立高等女学校（Ｓ14～25）旭川東高等学校（Ｓ25～43）北海道教育大学旭川校講師（Ｓ37～53）と書教育一筋に、書教育の大道を示された実践は貴重な足跡であります。

終始一貫した純粋・清高な生き方や目立たないが、しかし、輝きに満ちた豊沃な原野のように多くの人材がその懐から育っていきました。まさに、人間教育実践者でありました。「事成って功を誇らず、淡々として水の如く常に低きに就いて人に隔てなく、変転自在の動きに生きて……」とは加納守拙師の慥洲先生への人物評であります。的を得て妙であります。

また、書芸術活動においても、旭川の地にあって、戦後書の民主化並びに革新運動の先鞭を切り、上田桑鳩・桑原翠邦・金子鷗亭・森田子龍等と交わり、墨人会活動・北海道書道展創立審査員・墨原社創立・北海道墨象会創立等、次々と運動を展開していきました。中でも、「墨原社」結成に力を入れ、「墨原社道場」を拠点として先生の理想とされる活動（「童書」の展開とサークル活動）が繰り広げられ、多数の人材が巣立っていきました。

様々な活動とともに、数多くの優れた作品が誕生しました。「喬樹」（Ｓ43）「五風十雨」（Ｓ46道立旭川美術館所蔵）「盲亀浮木」（Ｓ46）「飄々獨歩」は心に残る快作です。なかでも「盲亀浮木」について「この作品が持つ豊饒さは、蛇足を承知で補えば、静と動、緩と急恐らく押せばどんな音でも発する自在さをもち、しかも余白を暖かく抱えて揺れるがぬものになっている。精神の自由さが濶けるところであろう……。」（佐藤庫之介氏評）とあるように、強烈な鮮光となって深く息づいています。

高潔で温情溢れる人柄と多彩に純化した書表現が遺産として残り、今、大勢の教え子等に数々のことが引き継がれて新たな展開を示していくことが、先生のご遺志に応えていくことであると肝に銘じているところであります。合掌

（渋谷北象・記）

塩田慥洲先生足跡

明治40年	９月11日長万部国縫生まれ。５歳時愛別町へ
	名「慥」　号「慥洲」「慥々齋」「無象」
大正11年	愛別町の小学校教員となる
昭和９年	文部省中等学校習字科検定合格
昭和35年	北海道書道展創立審査員
昭和37年	墨原社創立
昭和43年	旭川東高等学校定年退職
〃	北海道学生書道展第20回記念展において特別指導者賞受賞
昭和45年	墨人会客員
昭和50年	こてん（書）こてん（陶芸）＜夫婦展＞
〃	塩田慥洲札幌書個展
昭和53年	旭川市文化賞受賞
昭和59年	「塩田慥洲－人と書－」作品集刊行
〃	北海道書道展招待作家
平成元年	函館美術館オープン展出品　「黙」同館所蔵
平成４年	道立帯広百年記念ホールオープン記念展出品
平成６年	塩田慥洲の書米寿記念書展及び作品集刊行
平成15年	３月19日逝去　享年95歳



松田幸子先生を偲んで

一昨年暮れから体調をくずされていた松田幸子先生は、治療の甲斐なく、昨年５月19日に亡くなられました。松田先生は昭和35年にさわらび会主宰松本春子先生に師事されました。以来毎日展、創玄展、道展に出品され今日まで活躍されてまいりました。同じ時代に春子先生に師事したことで随分お世話になり、お教えをいただいた者として本当に淋しく存じます。先生は春子先生のお稽古場で長い間臼居先生とご一緒に事務のお仕事をして下さっておりました。その臼居先生も松田先生の後を追うように亡くなられ、私共は二重の哀しみを覚えさせられております。

松田先生は昭和41年に「にいはり会」を設立され、仮名書道の普及に努めてこられました。お忙しくも楽しいお弟子さん達との交流を、折にふれ私共に話して下さいました。

先生は幾年にわたり万葉集の勉強を続けられており、書道展にはいつも万葉歌を書いておられました。また、お仲間と万葉ゆかりの地を旅行されることをとても楽しみにしておられました。以前私が由布院に旅行した折に万葉歌碑に出会ったことを話しましたところ、早速に歌の意味を詳しく調べて教えて下さったことも思い出されます。

先生はとてもお花が好きで、お庭には多くの草花を植えて楽しんでおられました。万葉歌に惹かれた先生らしく、とりわけ野の花を好んでおられました。シラネアオイ、すみれ、水引草などがお庭のあちこちに広がり、四季折々の花に愛情を注いでおられることが窺えました。同じように花の好きな先生と私は、書作品を仕上げた後のほっとした気分で、お電話でよくお花の話を交わしたものでした。

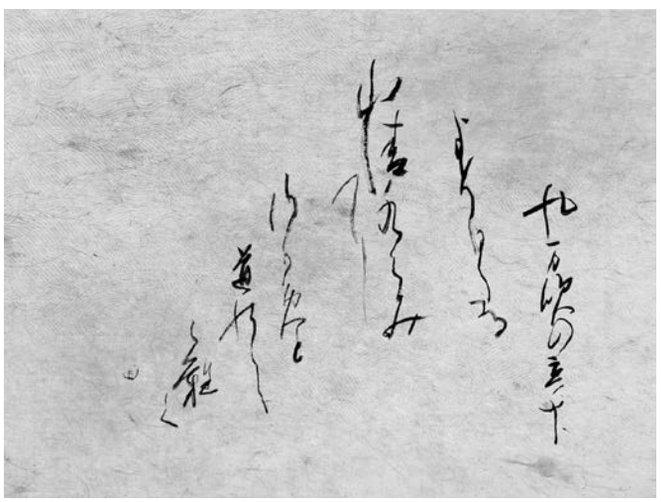
昨年４月、これから花の咲く一番よい季節を病院で過ごされている先生に、私が近くの公園で写したカタクリの花などの写真を持ってお見舞しますと、とても喜んでくださいました。「外の様子が分かるから、また、見せてね」と言われた先生に、私は、連翹や桜、雪柳など次々カメラに収めた花便りを病室に送らせていただきました。先生はそれをとても楽しみにして下さっていたと、あとでご遺族やお弟子さんが私に話して下さいました。

先生は体調のすぐれない中、昨年の道展にも立派な作品を出品され、大きな感動を与えられました。

今年も花の季節がやってまいりました。

松田先生を偲び心よりご冥福をお祈りいたします。

（高畑美智子・記）



山吹の立ち…

松田幸子先生足跡

大正８年　12月20日　鹿児島県生まれ
昭和35年　さわらび会入門、松本春子先生に師事
昭和41年　にいはり会設立
昭和47年　第13回北海道書道展委嘱推挙
昭和53年　毎日展会員
昭和61年　第22回創玄展準大賞
昭和62年　第23回展より二科審査員
平成３年　第32回北海道書道展準大賞　会員推挙
平成13年　創玄書道会退会
　　道展会員
　　毎日展会員
　　さわらび会常任理事
　　にいはり会主宰
平成14年　５月19日逝去　享年83歳





菜根譚

田山芝洞先生足跡

明治44年２月20日　札幌生まれ
大正14年　現在の北海道新聞社の前身である北海タイムス社に入社
戦後　北海道新聞社に復職。主に労務畑を歩む
昭和34年　第１回北海道書道展会友推挙
昭和36年　第２回北海道書道展会員推挙
第４回日展入選
昭和37年　北海道書道連盟事務局長を務める
昭和41年　北海道新聞社定年退職
平成12年　第41回北海道書道展から招待作家として出品する
退職後も書の道に励み、80歳を超えても「北海道新聞文化賞」並びに「北海道新聞文学賞」などの賞状揮毫に腕を振るうなど、晩年まで“書の探究”の情熱は衰えることがなかった。
平成15年９月27日　逝去。享年92歳

（藤原大眼・記）





遠い世界に…

生きた！書いた！闘った！

平成15年７月９日朝、急性呼吸不全により、小比賀秋嶺さんは逝った。

死を見据えながらの、病いと闘う壮烈なドラマは終わった。肉を削ぎとられ、魂だけに凝縮された小さな体となって、死の床に眠っていた。

昭和33年肺結核を患い、右肋骨７本切除。以来45年の闘病生活が続く。肺結核後遺症・気管支拡張症・三半規管後庭破壊・前立腺肥大・慢性呼吸不全などと打ち続く大病で入院通院を繰り返す。平成13年からは酸素ボンベを携帯し、その量も増えていった。そういう状況の中でも、小比賀さんはひたすら書に専念した。書き、企画し、役職を果たし、弟子を育てた。

大井先生との出会い、先生の勧めによる中野先生との出会いが、小比賀さんの書道人生の根幹をなしたといっていい。

天彗社に入会し、後に事務局長となった小比賀さんは、懇親の席で弁士そこのけの映画説明をすることがあった。その朗々たる音吐は、四国より渡道、仏門に身を置き、副住職となる経歴のもたらすものでもあった。

小比賀さんの郷里への、そして母への思慕は深かった。そこから湧き起こる祈りが小比賀さんの書を貫く。特に北海道書道展３年連続特選、うち２回の一席は快挙だった。

自らの書のみならず、ユニークな書展を企画し実行し社会への貢献を果たした。書道に関わる重要な役職も全うした。病いと闘いながら万事疎かにしない誠実な姿は痛々しかった。最後となった北海道書道展審査のときは、休憩ごとに横になり、昼食時は別室で休眠をとるという有様であった。

しかし何といっても、小比賀さんの心を領していたのは家族への愛情、弟子の育成ではなかったろうか。酸素ボンベを携えながら命の灯をかきたてる小比賀さんの脳裡によぎったものは何であったろう。彼岸此岸に立ったその心を忖度して私は粛然となる。

密葬の後、500名近い参列者を得て「送る会」が開かれ、生前から葬儀委員長を頼まれていた中野北溟先生は世話人会を代表して挨拶、「終始笑みを絶やすことのない一意専心の人であった」と称えた。氏よ、泉下に瞑すべし。

（高橋　陌遥・記）

小比賀秋嶺先生足跡

昭和２年　誕生。香川県高松市
昭和29年　六華書道会大井秋聲に入門
昭和40年　大井秋聲上京、教室経営を託される一方、中野北溟に師事
昭和43年　天彗社入会。北海道書道展特選１席。以降３年連続特選受賞。45年は特選１席
昭和46年　北海道書道展会友昇格
昭和47年　同展準大賞受賞。会員昇格
昭和52年　大井秋聲帰札により光華書道会設立
昭和56年　北海道書道連盟常任委員４期。その後規約改正、理事２期
第１回個展（札幌・大丸藤井セントラル）。以後種々の個展開催
昭和57年　日中友好書展瀋陽市少年宮との民間交流（20年間）
昭和58年　毎日書道展毎日賞受賞。60年同展会員昇格
昭和59年　カムバックサーモン展開催（豊平川に清流を戻す行事の一環）
昭和62年　サンプラザ・実用書道講師。UHB大学書道講師
昭和63年　道新文化センター講師
平成３年　創玄展二科審査員昇格
平成12年　大井秋聲の死去に伴い、六華書道会副代表を兼ねる
平成15年　死去。享年76歳



金津墨岱先生を偲ぶ

「最近、ようやくいい漢字作品が書けるんだよ、自分で言うのもおかしいけどね。」一昨年の秋頃にポツリと言われたその言葉に飛び上がるほど驚いた。多年に渡って凄まじいまでのエネルギーを含んだ筆法で、密なる世界観を、墨という表現媒体を通じ墨象をはじめあらゆる書体－かたちあるもの－を創り上げてきた作家の心の中に更なる研鑽と模索の魂があろうとは。

確かに近年の漢字条幅作品には行草体と共に、木簡隷の手法をちりばめ、多様性を内在しつつ美しささえ放っていたように思われる。まさにその非凡な感性と技巧をもって書に生きてきた師の最も精神の豊饒に満ちた瞬間ではなかったろうか。その精神に光と闇が宿っていたとしてもどちらも体躯を蝕むものではなく、心を精錬し強靭さを与えてくれるものにちがいなかったはずなのに。

一貫して自ら信ずる書を追求する一方、基盤となる古典臨書による学書法を熱心に説き、何にも増して品格が備わることの大切さも常々口にしておられたことは創人会会員の中で脈々と生き続けている。純一で潔癖なまでの資性からほとばしる言行は誰をも納得しえる価値あるものだったし、断罪に近い厳しかった叱責も今となっては懐しい。

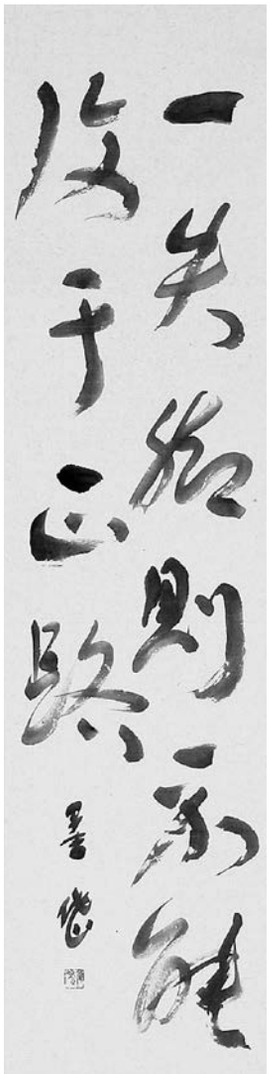
幼少から中林梧竹の掛軸を眺めながら育ったという師は、昭和26年23歳の若さで第３回毎日書道展毎日賞を受賞、その後の活躍を経て、多感に揺れながらも一途に生の境涯を映しつつ書の世界を駆け抜けてきた。時折、前衛書のパイオニアであった上田桑鳩氏との交流や、当時の書壇の形成に到る歴史など、温和な表情で話して下さった。うすぼんやりしていないでもっと色々な事を聴いておけば良かったと今更ながら悔やまれる。

後年、北海道の厳しい寒さとは無縁の伊豆にて一年の半分近くを過ごされ、穏やかな気候と紺碧の海に囲まれた日々は制作への意欲をますます高めてくれたにちがいない。

「自然がいい。自然のままが一番いいんだよ。」そう言っておられた先生は颯爽と自然の大地の中に帰っていかれた。全霊をもってあくことなく創り上げた数々の書に、先生の純然たる想念を表出したままで。

誰も足を踏み入れることができない一代巨星が逝ってしまった。　　合掌

（中鉢恵子・記）



一失脚則不…

金津墨岱先生足跡

昭和３年　金津雄太郎、チヨの長男として北海道歌志内市にて誕生
昭和14年　小学５年当時から組頭洋風先生に師事
昭和20年　昭和20年以降は金子鷗亭、石田栖湖、桑原翠邦、加納守拙各先生に師事、通教として村田龍岱先生（墨岱の雅号戴く）
昭和23年　学校卒業。浦河高校に赴任
昭和25年　（於　東京）桑原翠邦先生のもとで代稽古をする
神奈川県立相模原農業高校、書道講師
札幌に戻り、札幌南、札幌女子、江別、野幌高校で教鞭を執る
昭和26年　毎日展毎日賞受賞（当時23才）
昭和29年　毎日展委嘱
昭和31年　毎日展前衛書展会員
昭和34年　第１回北海道書道展新会友（委嘱に推挙）
昭和36年　“書群会”開塾。北海道墨象会会員
昭和41年　中野北溟、小川東洲氏と３人で自ら蒐集の作品を中心に西村直幸、川端康通氏らの所蔵作品を加え、加納守拙先生の解説により〈中林梧竹作品集〉を編集発行
昭和41年　第１回個展（６月）豊喫茶店
昭和42年　書群会を“創人会”に改名。「創人」誌発行（39才）道新教室開設
昭和44年　第11回北海道書道展　新会員推挙される
昭和45年　札幌選抜作家美術展に出品
第２回個展　大丸ギャラリー（12月）
昭和47年　「近接と離間の発想」と題して、小川東洲、金津墨岱、中野層翠、東志青邨、藤根凱風の５人展　大丸ギャラリー（３月）
昭和56年　道新文化センター講師
昭和61年　北海道書作家展を創設
書道21世紀会議会員、布殻会会員
平成12年　中国北京長城八達嶺に碑林。自作の草書五言二句が刻された
平成16年２月９日逝去　享年77才



愛惜　二階堂北翠先生

北翠先生が個展を開かれた折に、先生の師宇野静山先生が寄せられたお言葉に

「『ワッハッハッハ、ウン、ウン、そうだッ、そうだ』明けっぱなしの大きな声で首をコックリ、コックリ、肩まで折って、六尺豊かな体全体で肯く。君だからこれが見事にきまる。明朗闊達、竹を割ったようなこの明快さがパッとあたりを明るくしてみんながニコニコになる。みんなから親しまれる所以である。」入門された当初から「将来有望の仁」と評され「果して、5年足らずではやばやと、臥龍社同人に推されていた。大変な駿足である。」「君の書は、人柄そのままに誠に、豪快である。素朴である。男性的である。体あたり的に堂々と正面切って、偽りなく自分の体臭を発散させていわゆる人書一体感の強いところに、親しみと感銘を人に与える。」と、あります。

また、先生が兄弟同様に親しく接しておられた故奈良一玄先生も「……既に作家として一家をなしているにも拘わらず、尚今日迄ひたすら自己発掘と子弟の指導に専念されて来たことは如何にも兄らしい『ハッタリ』の無い生真面目な教育者の一面を覗かせている。」「長々鋒を駆使して振幅の大きい豪快な筆の捌きの中に古典の息吹をたたえ、凛冽と情感の交差する格調高い書風はやはり兄でなければ展開し得ない独自の世界である。」と述べておられます。

正にお二人のお言葉に勝る言葉はありません。

先生は探究心旺盛で勉強家でした。中国や台湾の故宮博物院を訪れ本物を確かめたり、ルーブル、オルセ美術館でミロ、ダビンチ、ミレー、ロダン等の作品に感嘆されるなど、東洋の思想・芸術は勿論のこと、西欧の芸術からも新鮮な生の息吹を吸収されておられました。「本物を観れ」「いいものに感動すれ」「枚数で勝負すれ」が持論で、自ら範を示されました。晩年になられても、「柔軟な頭脳と豊かな心情を持った人間として日々成長したい。」「今の願いは、一日中法帖に向って黙々と研究を続けられたらなー。法帖一途に生きられるのはいつの日か？」と、なお崇高な目標を掲げられ、本当に生きたお手本でした。

ご指導頂き有難うございました。

慎んでご冥福をお祈り申し上げます。

（種田勁竹・記）

二階堂北翠先生足跡

略歴

大正14年5月1日　茨城県で出生
昭和17年　樺太公立知取工業学校卒業
昭和18年　国民学校訓導試験合格
昭和32年　玉川大学卒業（通信教育）
昭和17年　樺太樫保第一国民学校勤務
～62年　以後樺太知取、北海道上砂川、苫小牧市内の小中高校に奉職
平成15年8月21日　没　78歳

書歴

昭和34年　臥龍社宇野静山先生に師事
昭和35年　第14回日書展二科優作に入賞
以後　日書展、北海道書道展、毎日書道展入選・入賞、日展入選
昭和45年　第6回創玄展準大賞
第11回北海道書道展準大賞
昭和50年　個展開催
昭和63年　苫小牧市文化賞受賞
（苫小牧市民憲章碑文、苫小牧市史等揮毫）

・臥龍社同人
・北海道書道展会員
・創玄書道会二科審査員
・苫小牧書道連盟常任理事長
・鵬鴎会主宰



澄懐





同悲萬古塵

越坂柳徳先生を偲んで

先生は幼少の頃、学校の先生に才能を認められ、美術の方へ進むように奨められたが、戦争により断念。多くの若者と同様、国難を救うべく海軍に志願し、航空母艦に乗務して作戦に従事。戦争末期には特攻隊（特殊潜航艇「回天」）に志願、九州で訓練中に終戦を迎えたと伺っています。

戦後間もなく、郷土愛から故郷の農協の理事を勤め、地元農業近代化の条件整備のため区画整理に着手、現在の農業機械の大型化を見越した水準で農地の整備をされた。当時の社会状況からみると、先生の優れた先見性がうかがわれ、明確に農業の将来像を描いておられたことが理解できます。

やがて篆刻に専念する篆刻家になられましたが、幼少の頃からの志望を実現したことになります。

教室では篆刻の指導ばかりではなく、木訥とした山形弁で人間いかに生きるべきかや、生活の知恵、健康管理などについても教えて下さった。これらは論理的で明快なご指導と相俟って先生の魅力となり、札幌市内の各教室はもとより、道内各地に先生のもとに教えを受ける人が増えたのでした。

先生は、書を宮城野書人会の加藤翠柳先生に師事していたが、そこで篆刻に出会い、この道へ進まれました。道内の研究団体の水準に限界を感じ、中央の先生方の門をたたき篆刻の世界に目を開き、なかでも關先生の作風に憧れ、以来先生から教えを受けておられました。

先生を慕って道内篆刻愛好者は増え、北海道書道展をはじめ道内各展覧会や中央展の出品者数も纏まった規模に成長し、水準の向上と共に各展に審査会員を輩出させたのは先生のご功績であり、先生はまさに質量ともに北海道篆刻の歴史に残る一時代を築き上げたのであります。

また先生はお話が大好きで、お宅へ伺うといろいろなことについてお話がありました。今も事があるたびに先生のお話が聞えてくるような気がします。このように先生はいつまでも私達教え子の心の中に生きておられるものと信じております。

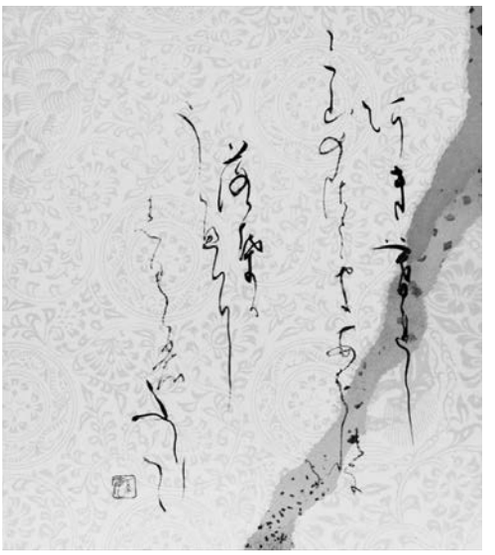
先生の御遺徳を偲び、ご冥福を心からお祈り申し上げます。

（山本　芳道・記）

越坂柳徳先生の書歴

昭和２年２月25日　山形県鶴岡市に誕生（本名　多美治）
昭和41年　加藤翠柳先生に師事
昭和46年　宮城野書人会師範、最高点合格
昭和50年　長揚石先生に刻字を師事
昭和53年　小林斗盦先生に篆刻の指導を受ける
昭和55年　關正人先生に指導を受ける
昭和57年　中央区民センター等で教室開始
昭和58年　第24回道展で大賞受賞、25回展より審査会員に就任
昭和59年　北海道篆刻協会を設立、代表となる
昭和61年　北海道書人展審査会員に就任
　　全道書道展審査会員に就任
　　第18、19回日展に入選
　　門下生作品集「印観」第１号発刊、以来毎号
　　道立図書館に寄贈
昭和62年　第１回社中展開催、以後毎年
　　第３回日展篆刻作家展に出品
昭和63年　西冷印社、全日本篆刻連盟共催千龍展に出品
　　毎日書道展ヨーロッパ展に出品
平成３年　朝日カルチャー講師（平成８年まで）
　　「印観」古璽特集号　自費出版
平成５年　毎日書道展審査会員に昇格
　　「印観」柳徳作品特集号自費出版
平成６年　ＮＨＫ文化センター札幌教室講師
　　日中友好篆刻上海展出品，隔年３回
平成７年　第27回全道書道展で文部大臣奨励賞を受賞
　　「篆刻、刻字」柳徳個展を開催
平成８年　道新文化教室　講師
平成９年　「印観」柳徳遊印特集号自費出版
平成11年　第30回全道書道展運営委員長
平成12年　第１回扶桑印社展　同人出品
平成14年　「喜多楼印存」自費出版
平成15年　「北海道の書」展　出品
平成16年５月25日没　享年77歳





あき暮れし…

ああ　永澤楊舟先生

先生は、端正な身のこなしで、且つ、責任感強く、威張らず、気取らず、優しく穏やかで繊細な心配りをなさるお人柄でありました。

かな作家として、古筆を重んじ、凛とした中に和らぎのある書風で、女子高校や教員養成大学の教育者としても誠に適任な方でありました。

２歳の折り父君を亡くし、苦労されて勉学に努め、昭和18年日本国有鉄道札幌支社に入社。満55歳の定年まで勤められたということです。

書道は19歳から金丸梧舟先生を師事され、36歳の折り仲田幹一先生を師事「かな」を専門に勉強、教員免許も取得されました。

金丸先生からの信望は特に厚く、北海道書道連盟草創期の会計や臨池書道会会計を担当。道教育大学札幌分校の「かな」の非常勤講師。後年は入院中の梧舟先生の右腕として臨池書道会副会長を務められました。

金丸先生亡き後、一周忌を待って平成７年藻臨書道会を結成、代表に就任されました。

永澤先生の語録は、芭蕉の俳論「不易流行」を引用され「年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからずだが、古典を踏まえ現代性を考えよ」。

また、論語「学んで思はざれば即ち罔（くら）し、思うて学ばざれば即ち殆（あや）し」を引用し、「書を学ぶということは、面倒なものを習って敢えて苦しむことなのだ。そこには思索と錬磨があり、好きが年季を生むというものだ。道風の柳に飛びつく蛙であれ。蓑のない道灌にならないように」など、博識のある持論を吐露されておられました。

平成14年10月、第７回藻臨会書道展の後、転ばれて骨折し入院。その後、自宅療養に努められましたが、平成16年４月食べ物が喉を通らなくなり再入院。一時は回復しつつありましたが病には勝てず、６月30日午後５時30分、急性肺炎で帰らぬ人となりました。奥様やお子様方の悲しみは、いかばかりかと察するに余りあります。

ここに永澤楊舟先生への感謝の意を表し、衷心より先生のご冥福をお祈り申し上げます。

（本間　孤峯・記）

永澤楊舟（繁）先生　書歴

大正７年２月25日　札幌市にて誕生
昭和12年　金丸梧舟氏に師事
昭和18年　日本国有鉄道入社
昭和29年　かなを仲田幹一氏に師事
　日本書道教育学会展にて特選受賞、以後２回特選
昭和35年　学習院大学にて教員免許取得
　第１回道展「かな部」特選受賞。３・４回にも特選受賞
昭和38年　第４回道展にて新委嘱推挙。
　北海道書道連盟事務局会計担当
昭和39年　北海道教育大学札幌校非常勤講師（～53年）
昭和40年　文部省認定書写技能検定北海道試験審査員
昭和44年　第10回道展にて新会員推挙、審査会員
昭和48年　日本国有鉄道退社
昭和54年　三愛女子高校（現とわの森三愛高校）嘱託（～63年）
昭和59年　第16回全道書道展審査会員
平成２年　北海道臨池書道会副会長
平成７年　藻臨書道会結成、代表就任
平成10年　第29回全道書道展運営委員長
平成16年６月30日逝去　享年87歳





清風萬里

福村雪華先生を偲んで

芦別書道連盟設立発人会で　出席者全員に懇望され、福村雪華先生は初代理事長になられました。早々に桑原翠邦先生をお招きして揮毫会も開かれ、先になって万端の準備をなさり、用意した大硯に水を満たし、終始寡黙で淡々と墨をすって居られました。翠邦先生は次々と揮毫、参会者の心の高揚と淳化が生れ気韻が大広間に満ちみちていました。

ある時、宇野静山先生に師事された時のことをお聞きしました。福村先生はひと時、美唄に居られたことがあり、美唄で建碑の宇野静山先生の書に接し、深い感銘を受け、当時美唄におすまいの宇野先生宅を訪ね入門されたとのお話でした。宇野先生臥龍社創設の前年のことです。ある秋、福村先生は、臥龍庵縁側（小樽静山先生宅）の踏段石に腰をおろし、シヤツを腕まくりして、鋒鋩（ほうぼう）を密にするため硯に水をはって無心に研磨しておられました。庵主静山先生を訪ねて玄関前に立った私に気づかれ、手を止め顔をあげて、何度もうなずかれるようにしてほほえまれました。残照に映えた緊張と静謐（せいひつ）の一瞬でした。

福村先生は芦別に居を定めて自ら学ぶことに厳しく、時を惜しまず後進の指導にあたられ、書のみならず、文化振興に多大な貢献をなさって居りました。米寿を迎えた折り、芦別書道連盟会員の強い希望により、米寿記念個展が開かれました。芦別市の内外をとわず多くの人々に深い感銘を与えて居ります。

先生はいろいろな集りの中で、目だたないご様子がごく自然でした。それなのに周りは豊穣の空間になり、穏やかな雰囲気を醸していたように思います。山や川、草や木に心身共に浸ることにひかれて居りましたし、盆栽の宇宙に遊び、手に土をそめて陶芸を楽しみ、石と向かい石の言葉を聞く心をお持ちだったと思って居ります。

書はいろいろな土壌の上に生れた生命のように温く、強く、豊かで慈愛深い感がいたします。

篆刻においては布置構成に心を砕き、印刀と印材からの響きは気韻静動独自な方寸の世界を開かれました。

恬淡無為（てんたんむい）の生涯を通され、ただただ畏敬の念を深くしております。　　（野村　墨水・記）

福村雪華（秀行）先生の書歴

明治42年１月25日　北海道幌延町問寒別にて誕生
大正15年　この頃から書を習う
昭和14年　宇野静山先生に師事する
昭和16年　満州へ　戦時中は満州在住
昭和22年　満州より帰国　再び宇野静山先生に師事
昭和25年　雪華書道教室開設　主宰
昭和26年　臥龍社　第３回展　最高賞を受章
昭和27年　臥龍社　第４回展　最高賞を受章
昭和29年　芦別市書道連盟設立発起人
　　芦別市書道連盟理事長
　　毎日展入賞
昭和30年　毎日展篆刻の部入賞
昭和32年　臥龍社同人に推挙さる
昭和35年　日展篆刻の部入選
　　第１回北海道書道展　特選
昭和36年　第２回北海道書道展　特選１席
昭和37年　日展近代詩の部　入選
昭和40年　北海道書道展　大賞
　　北海道書道展　審査会員となる
昭和45年　全道書道展　第１回展より審査委員となる
昭和54年　芦別市文化功労賞受賞
昭和59年　芦別市文化賞受賞
平成元年　芦別市書道連盟副会長就任
平成18年　３月８日逝去　享年96才

・北海道書道展招待作家
・北海道書道協会顧問
・北日本書道学会客員
・芦別市教育委員会主催毛筆講座講師
・芦別市書道連盟副会長





地に轉ぶひぐらし蟇が覗きいし

前田錦象先生を偲んで

いつもと変らぬ張りのあるお声で電話に出られた翌朝の衝撃的な悲報に思わず絶句して言葉を失いました。

先生が私の勤務する札幌東高校の講師として見えられて以来、今日まで弟子として厳しい中にも懇切丁寧なご指導をいただきました。古典は勿論のこと現代書に至るまで幅広く、高潔なお人柄通りの格調高い指導内容でした。

書は単に文字造形や美的表現の追究のみならず、その学習過程において心豊かに情操を醇化し、人格徳性を錬磨陶冶し、人間の完成を期する人間修養の一方法であるなどと、折々に懇々と話され、書の道のみならず人としての道・生き方そのものについても学ばせていただきました。

このような先生のお考えは苫小牧西高校在職中、地元の苫小牧民報にもたびたび掲載されています。

「書は心画なりといわれるが、書は書者の生命力とか人間性が端的に表現されるものであるから、書者の高く深く美しい心が一つのまとまった感銘となって見る者の心にしみ入るなら、そこに書の高い芸術性が求められるのである。中国では古来書は六芸の一つに加えられ、一部特権階級の修養の道として、幾多の偉人がその全生涯を没入して相承発展させてきたものであり、それは正しく人間の永遠に追求してゆくべき道として、哲学的に宗教的に熱求され、それはまた禅にも通ずる悟道のひとつにもされたのである」

（苫小牧民報より抜粋）

先生の教育界におけるご功績を網羅することはできませんが、昭和38年８月、書道理論の権威真田但馬教授を始め、松井如流氏、金田心象氏、宇野雪村氏、熊谷恒子氏、上條信山氏など日本書道界最高峰ともいうべき錚錚たる大先生を招聘し、全道各地の書道担当教員等約150名を苫小牧西高校に集めた「大東文化大学北海道講習会」を開催したことは特筆すべきことだと思います。先生はこの企画運営全般に八面六臂のご活躍をされ、各方面から高い評価を得られました。また、伊達高校教頭時代には、定時制生徒と地域の書道愛好者たちを一堂に集めて創作活動の指導を実践し、地域社会の斯道奨励にも寄与されました。これらのことはそれぞれ苫小牧民報や北海道新聞に大きく報道されました。

先生は日頃、自分は個展の計画はないといわれていました。また、臨済宗碧巌録の垂示の一つ「啐啄同時」のいわれについても良く語られていました。飾らぬお人柄で書一筋の人生を貫き通された先生のことですから「いつの日か己れの集大成を弟子達と共に」と胸中ひそかに抱かれていたのではなかろうかと推察するものです。先生にはまだまだ教示していただかねばならぬことが無尽蔵だっただけに本当に残念でなりませんが、珠玉の一言一言を忘れることなく切磋琢磨せねばと思っております。

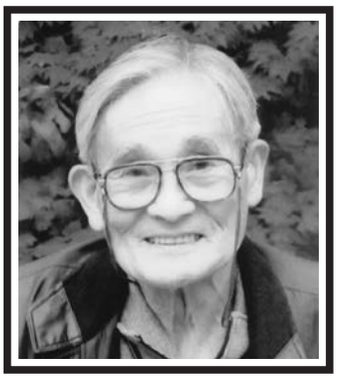
心からご冥福をお祈り申し上げます。

（菊地　祥亭・記）

前田錦象（喜久雄）先生足跡

昭和３年10月16日　札幌市にて出生
昭和20年　札幌第一中学校（現札幌南高校）卒業
昭和23年　北海道大学卒業
昭和23年　公立高校教諭として、北海道由仁高校、苫小牧西高校に勤務
教頭として清水高校、伊達高校、江別高校、滝川高校、小樽潮陵高校を歴任
平成元年３月　公立高校定年退職
平成３～12年　札幌東高校、札幌明清高校非常勤講師
平成17年12月13日　77歳にて永眠

- 北海道大学在学中より渡邊錦舟（緑邦）先生に師事
- 北海道書道展審査員
- 北海道書道連盟理事・監事・参与
- 創玄書道会審査員
- 日本書道研究会審査員
- 書道教育連盟顧問
- 日展入選（昭和38年）
- 大東文化大学評議員・参与
- 隆玄書道会参与
- 全道書道展審査員
- 洗心会書道院主宰





往生安楽

橋本宇外先生を偲んで

橋本宇外先生その人を語るにふさわしい、たとえば、ぼくに先生をご紹介して下さった長谷川白羊さんなど、深い親交をもたれた方々は多くおられます。しかし、編集部長からのご指名ですので、ご生前の温かいご交誼に感謝しつつ、ごく私的に記してみます。

宇外先生の知遇を得るようになったのは、ぼくが大学生の頃で、今からおよそ40年前のことです。そのころ、桑原翠邦・石田栖湖・山口子羊といった、秀れた先達に傾倒する若い仲間と活動した《潤硯会》というグループの、会誌を送呈するなかで、先生との係わりが深まっていったのです。ぼくが編集していたその会報に、「書を学ぶ人は、芸術的な書と同時に、『実用文字』も軽視するな、比田井天来や川谷尚亭も『実用文字』を重視していた――」という趣旨の、宇外先生の原稿を掲載させていただいたことを今、懐かしく思い出します。

その後、これは20数年前からのことですが、ぼくが発行し始めたささやかな個人誌『独往』（現在40号）をお送りするたびに、過褒ともいえる激励のお言葉が寄せられたものでした。ときに、たくさんあるそのお便りを取り出して見ては、〈独往〉の気概を再確認することがありました。

現・東京教育大学卒業の由で、宇外先生の知性が醸し出す《屹立した精神》、あるいは《透徹した批判精神》といったものに、僕はひそかに共鳴し、深く畏敬の念を覚えていたのでした。

植物学の世界的権威で、北大附属植物園の創設に係わった宮部金吾先生81歳の色紙《仁壽》を、「君が永く保管してくれ」と言われて渡されたこと、札幌市医師会書道クラブの書展開催にともに関与したこと、近時とみに誘われる機会の多かった居酒屋での、談論風発の二人きりの酒宴のこと……等々、在りし日のご厚意、その温容が、走馬灯のように思いおこされます。

宇外先生は、北海書人誌の客員でした。昨年のご葬儀のあと、その６月号に追悼文を記しました。

「４年前の夏、（略）６人で、橋本先生のご自宅を訪問し、缶ビール片手に盛り上がった日のことが彷彿とする。先生は歓待して下さり、楽しそうに語られ、我々もまた楽しかった。もう一度、そうしたひとときが欲しかった――」と。ご冥福を心からお祈り申し上げます。

（岡田　大岬・記）

橋本宇外（幸雄）先生略年譜

大正３年10月１日　釧路生まれ
昭和４年　釧路旭小学校高等科卒
昭和11年　独学で商業専科正教員合格
昭和12年　書を桑原翠邦先生に就く
昭和14年　立正大学専門部高等師範科卒
昭和15年　第４回大日本書道院展受賞
昭和17年　東京高等師範学校（現東京教育大学）漢文研究科卒
昭和20年　東京文理科大学西哲中退
昭和21年　星製薬北海道支社勤務
昭和35年　北海道書道展創立・委嘱
　この頃より、旭丘・東海・札商・光星の各高校講師、
　聖心女子学院専攻科・北海道簿記専門学校講師
昭和45年　北海道臨書会展・創立会員
昭和58年　第30回個展記念「橋本宇外作品集」発行
平成２年　東京・鳩居堂で、第37回個展
平成７年　「書圏歴程」発行
平成11年　「続書圏歴程」発行
平成18年４月19日　逝去（91歳）

・北海道書道展審査員
・全道書道展顧問
・北海道書人展／月刊「北海書人」各客員
・書究院展審査員
・40代最後の年の初開催から平成15年まで、個展47回
・素心会主宰





独自の書境

平成18年１月27日、旭川書道連盟の新年交礼会（研究会)、今年は中嶋一光先生が講師として「硯を語る」という演題で講演されるということで、楽しみに出席しました。少し疲れた感じはありましたが、自分の蒐集した硯を中心に楽しそうに話す姿が、まさか、最期の別れになるとは、誰が想像したでしょう。

イッコウ先生は道内高校教員の間で名物教師の一人でした。「俺は名前の通り、どこにも転勤しないで旭川北高一校だけで終る」と笑いながら語る姿に、周囲の人の妬みや嫉妬はありませんでした。先生の語りと全身からあふれる人柄がそうさせたのだと思います。

学生時代、書いて、書いて、書きまくり、紙代がなくなると半紙の上にガラスを敷き、そのガラスの上に書いては拭きとり、書いては拭きとり稽古したとのこと。全国の競書雑誌の常連で、旭川に中嶋一光ありとその名を全国に知らしめました。昭和34年、毎日書道展・毎日賞を大平山濤（文化功労者）先生と同時に受賞されるなど、多くの書人の羨望の的でした。

昭和38年、赤石蘭邦先生のもと、仲間と共に書創社を結成し、今日の旭川書壇の隆盛に尽くされた先生の力は甚大でした。その中にあって近代詩文書を中心とした現代書を模索し、独自の書風を確立、最後までその書風を崩すことはありませんでした。自分の書風に拘(こだわ)るその姿勢は、書を学ぶものへの一つの警鐘になると思います。

又、先生は永く旭川書道連盟理事長を勤め、より広い視野に立って書道の普及・発展にも尽くされました。

退職後は幾度となく奥様と旅行を楽しまれ、特にエジプトの旅は強烈であったようで、中国だけでは世界はわからない、四大文明をすべて肌で感じるべきだと熱く語っていたことが懐かしく思い出されます。

家族を愛し、旅を愛し、書を愛し、そして、カラオケに興じた一光先生。又、他の追随を許さない独自な書境を開拓され、それを貫き通した一光先生のあまりに突然の死に、茫然自失、ただ、ただ、先生のご冥福をお祈り致します。

（瀧野　喜星・記）

中嶋一光先生足跡

昭和６年７月31日　旭川市生
昭和29年　北海道学芸大学旭川分校卒
　〃　　北海道旭川北高等学校勤務
昭和34年　第11回毎日書道展　毎日賞
昭和35年　第１回北海道書道展　特選
昭和37年　第14回毎日書道展　委託（現会員）推挙
昭和41年　第７回北海道書道展　会友推挙
昭和48年　第14回　〃　準大賞受賞　会員推挙
昭和53年　旭川書道連盟理事長（昭和58年３月まで）
平成14年　創玄書道展１科審査員
平成15年　北海道書道展30年表彰
平成19年　３月４日逝去　享年77才

・社団法人創玄書道会１科審査会員
・財団法人毎日書道会会員
・北海道書道展会員
・旭川書道連盟顧問
・書創社顧問





臥龍社と小夜夫人

昭和44年８月臥龍の会報　第273号、毎月の条幅課題出品者の評に、宇野小夜　新人　初出品　初めての創作としては、まとまりに難点あるが生氣あり　とありました。

静山先生手書による会報550号　平成５年８月まで「宇野小夜」の条幅は毎月休むことなく批評がありました。24年間休まず倦まず弛まず続けた書業は並々の事ではなく、深く畏敬の念を抱くものです。昭和43年～56年までの書歴にあるように、集中的に中央展・道展・市展と各書展で受賞し、初出品から10年余で登りつめたことは、不断の研鑽の賜物でありましょう。その頃使用された羊毛長峰を見せていただいた時「エッ…えりまきとかげ！」と思わず声を出した程すり切れていたものです。

宇野静山は「小夜にはテストケースとして一切指導しない。自分にはない才能がある」と。その才能に驚嘆の意を抱き絶讃尊敬されておられました。小夜夫人の筆致は、筆勢運筆の呼吸大きく、高く低く、遠く鋭く、峰杪の起伏は絶妙の線条となり他の追随は難しい。説得ある線条は、独創的書風を開拓、堂々書人としての道を極めたのでございます。

小夜夫人は、臥龍社創立以来、臥龍社の門をくぐった沢山の方々一人一人を大切に、いつもお美しい声、おやさしい言葉、こまやかなお気づかいは、終年変わることなく送り迎えをしてくださいました。

昭和30年代、臥龍社のベテランが奮起するなら必ず美術院を捲席することは、決して難しいことではない。と……先生のその予言された通り、中央展では、日展、毎日展、美術院展、そして北海道書道展と、大いにゆさぶり続け、その捲席ぶりは記録に残されております。

その頃の先生のお宅での指導は、地元は勿論、地方から作品を抱えて集まった先達の方々の熱気は、いつも夜明けまで続きました。翌朝、勤務にむかう方々のために食事のお支度、ふかふかのおふとんを用意され、暖かい笑顔でお世話をなさっておられ、しっかりと静山先生を支えておられたお姿は忘れるものではございません。

平成８年10月静山先生90才を期に、臥龍社は以後運営企画を、宇野渓雪に一任すると宣言されて第一線を退かれました。その後のご夫妻の日常は、毎日を大事にされたお暮しぶりで、ご家族との会食を楽しまれ、興にのると静山先生は、筆・硯を催促し、「小夜も書きなさい」とみんなで席書を楽しみ、書の話も盛りあがったご様子。

夫人のお料理のお手なみは大変なもので、渓雪夫人や末娘由紀子様にしっかりと受けつがれ、宇野家の食卓を賑やかになさっておられました。先生ご夫妻の長寿の原点は日々の食生活にあったのではないでしょうか。

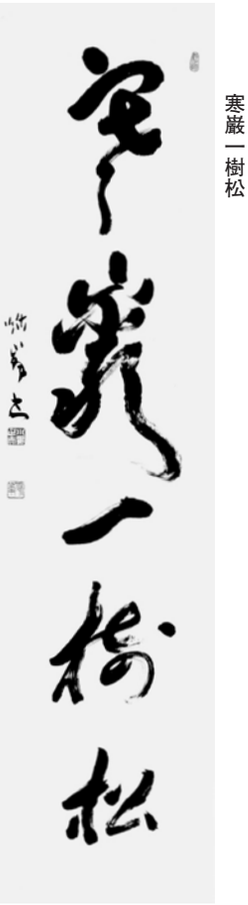
平成19年９月16日、小夜夫人昼食時にたおれ救急車で緊急入院。脳梗塞と診断。厳しい容態であることを告げられ悲痛の毎日が続きました。第23回臥龍社書展は静山先生ご夫妻ご健筆と共に無事終了。静山先生103才小夜夫人93才。ご一家お揃いでの家族展を希っておりましたが書展終了を見届けたかの様に、11月26日午後７時12分亡くなられました。お久しぶりにお会いしました。おやつれの様子もなく、お美しいお顔で静かに目を閉じられ安らかに休まれておいででした。すべての煩悩をなくし、苦もなく、楽もなく、欲も喜び悲しみもたち切り涅槃。無の世界へと旅立たれました。行年93才。

どうぞ安らかにおねむり下さい。合掌　（本間桂龍・記）

●宇野小夜先生年譜

大正４年　積丹町野塚にて誕生
昭和７年　庁立小樽高等女学校卒
昭和10年　宇野静山と結婚
昭和43～48年　北海道書道展　特選３回秀作３回
昭和43～48年　毎日書道展　入選秀作、以後不出品
昭和49～50年　小樽書道市展　市長賞　市展賞
　　小樽書道市展委員となる
昭和52～55年　創玄展　秀作４回　以後不出品
昭和55年４月　臥龍社同人に推挙さる
昭和56年　北海道書道展　準大賞
　　北海道書道展　審査会員となる
平成14年　北海道書道展　招待作家
平成19年　12月26日逝去　行年93才





千の風になって

平成20年２月13日、秋峯　小黒正夫先生が満73歳を一期として幽明境を異にされたとの訃報に接し、心から御冥福を祈った。今、請われて思い出を記す。

北　樹　会

昭和36年。石田栖湖先生、山口子羊先生が中心となって、「作家の研修の場」として、「北樹会」を結成した。その時、石田栖湖先生の推薦で創立会員として参加した小黒秋峯先生と親しくなった。

小黒先生は、毎月の例会に多くの臨書を抱えて出席して批評を受け、席書では何時も長時間筆を持ち、石田先生始め会員の指導を受け、助言を熱心に聞いて臨書の技法を勉強していた。

時が経ち、会員の中で、「ウマイ三筆」、「ヘタな三筆」の言葉が使われるようになった。「ウマイ三筆」は小川東洲先生、小黒秋峯先生、和田丁幽先生、「ヘタな三筆」は私、梅園流石先生等。小黒先生の才筆は、北樹会という場で磨きがかかり、次第に頭角を現した。

北海道書道展等

昭和30年９月、北海道書道連盟が結成され、運営が軌道に乗って昭和35年、「第１回北海道書道展」が開催された。石田先生、山口先生は開催時から審査員であったが、その後、小川東洲先生、藤根凱風先生、中野層翠先生等が審査員となり、北樹会々員は、北樹会展と共に北海道書道展が活躍の場となった。小黒先生は実力が認められて受賞を重ね、昭和41年に、「委嘱作家」となり、昭和49年には、「第15回北海道書道展大賞」を受賞して待望の、「北海道書道展審査員」となったのである。

書家として、作家として北海道書道連盟での活動の場が広くなり、北海道書道展での後輩の指導にも力を発揮してその功績が認められ、平成16年には、「北海道書道展会員歴30年功労賞」を受賞していた事を葬儀の式場で初めて知った。慚愧に堪えない。

平成18年10月、病気加療中の小黒先生から、「北海道書道連盟創立50周年記念展」の招待券が届いた。御厚情に感謝して早速北海道立近代美術館に行く。

会場には北海道書道界を誇示する作品が並ぶ中、小黒先生の作品は往時を思い出す才筆では無く、現代の自己主張でも無く、若き日、北樹会例会で筆を持ち、真摯に古典に対していた当時に思いを致す作品であり、暫し作品の前に立ち時を過した。

千の風になって

佛教の法名、「浄慶院　釋　秋峯」は生前に菩提寺の住職が授けたものであることを知った。小黒先生は、法名に、「秋峯」の雅号を持って浄土に行き、畏敬する先生方と楽しく語り合う事でしょう。しかし、私は、「千の風になって」の曲を手向けたいと思う。この曲を口ずさみながら、愛した家族、そうして、共に研鑽した北海道書道展関係書友の傍を何時も吹きわたってくれるように祈りながら。　　合　掌

（聴雪庵主　池田迂洞・記）

小黒秋峯先生年譜

昭和10年１月30日　小樽市に生まれ、５歳で室蘭市に転住
昭和28年　札幌市　大丸藤井㈱本社入社
昭和30年　大井秋聲に師事　六華書道会入会
昭和33年　北海道書道会々員　六華書道会脱会
昭和36年　石田栖湖、山口子羊主宰「北樹会」に創立会員として参加
昭和37年　中川清風、和田丁幽、小黒秋峯「書の３人展」開催
昭和41年　第７回北海道書道展特選受賞　会友推挙
昭和49年　第15回北海道書道展大賞受賞　審査会員推挙
　　長谷川白羊、小黒秋峯「書の２人展」開催
昭和51年　淳峯会発足　以後、会展５回開催
　　大丸藤井㈱本社退職
昭和56年　淳峯会主宰「小黒秋峯とそのグループ展」開催
平成16年　北海道書道展会員30年功労表彰
平成20年２月12日　逝去（73歳）





千里鶯啼緑映紅…

真気磅礴の書

当会主宰廣田岳洋先生が去る平成20年８月25日急性肺炎・心不全の為98歳を一期として幽明境を異にされた。

「岳洋先生は、一貫して『まこと』の人である。

その『まこと』が発して剣道となり、弓道となり、また書道となる。その書が手先だけのものでないことがうなずけよう。

一方先生は教育者として幾多有能な後進を育てて来られた。これも単なる教育技術の問題ではなくして、先生が終始全霊を傾けて、その事に当られた結果に外なるまい。

わたしは先生の書に接する毎に、『真気磅礴』ということばが、口を衝いて出るのである。」

これはかつて故桑原翠邦先生が岳洋先生還暦記念書展作品集冒頭に寄せた文章であるが、正に言い得て妙。蓋し名文である。

書家であるよりも書教育者であることを念願された先生は「どの子供にも真に字を書くことを愛し喜びとしてもらえる、その元気付けである」事を実践され、私達に対しても個々に応じた適切な指導と長所を賞揚し、刻一刻を全身全霊をもって打ち込む事の大切さを教えて下さり、或る時は熱く、或る時は厳しく、また或る時は慈父の如く優しく見守り導き育くんで下さった。

何よりも有難かった事は真の書の在り方・書とはどんなものであるかを身をもって我々に示して下さった事である。盃を重ね乍ら書を論じての蘊蓄、近年の鬱積した膿だらけの書壇を痛烈に斬り本来の書の姿を説く熱さに先生の書が持つ純粋性を窺うことが出来た。加えて蕙心会道場は膨大な数に及ぶ先人先達の書跡の宝庫、鳴鶴・天来・尚亭・梧竹・菘翁・一六等々垂涎ものの幅物、屏風等を惜しげも無く開いては披露し物の真偽・書品の高さを見極める為の眼耕の資として提供して下さった。

岳洋先生の書は一かけらの邪心や世に阿ねる衒気を払拭したまさに清澄そのもので古典臨書を深め世の流行に無縁、名利に恬淡として只管その道に徹し心技を磨かれたものであり、けっしてその主軸はぶれる事が無かった。また先生は書道はもとより、剣道・弓道に於ても達人であり、その根底に結びつくのは「まこと」であり、終始一貫「まこと」をもって書と人に接し、謙虚で純粋な書人としての生涯を貫かれた。正に「真気磅礴」たる所以である。

私共は長きに亘り先生から書の道は無論、人としての道も教え育くまれて今日迄至ったのであるが、これから後も岳洋先生の御心を心として、謙虚に蕙蘭の心を筆に託し精進を重ねて参る所存である。

誠に大きなご恩を受け今日在る事を会員一同心から感謝と御礼を申し上げご冥福をお祈りする次第である。

合掌

（蕙心書道会事務局　大澤尚洋・記）

廣田岳洋先生年譜

明治44年２月16日　岩見沢に誕生
昭和７年　旭川師範卒業
昭和９年　書教育誌「童書」同人、師加納守拙と尽力
昭和40年　北海道書道展会員推挙
昭和42年　蕙心書道会発足・主宰、第１回個展
昭和46年　還暦記念書展
昭和47年　札幌大丸藤井に於て個展
昭和55年　苫小牧市社会教育功労賞
平成２年　傘寿記念書展
平成３年　第22回全道書道展文部大臣賞
平成11年　北海道書道展招待作家
平成19年　第30回記念蕙心書道会展併催廣田岳洋書展
平成20年８月25日　逝去・法名　常道院釋孝洋（98歳）





清濁

悠久　不退轉の姿勢…土田静峯を偲ぶ

今夜は中秋の名月…皎々。今頃はどこまで旅していますか。あと三つの難関を通過するとお浄土ですね。明日は初命日。茫然と月を眺めています。月下独酌とはいかない心境。（平成20年９月14日夜…桂龍のひとりごと。）

敗戦戦後の混乱。疲弊の中から書道復興への生き様のきびしい中で、初心を貫き不退轉の生涯に深く畏敬の念を抱く。「土田静峯の書展」に寄せられた　師　宇野静山の言葉は土田静峯のすべてが語り盡されている。

小樽商業の職員室に新卒の君が入門を申込んだ。その時の模様をいつか聞かされた。「先生は全然相手にしないで授業に行ってしまった。終って来たらまだ僕が頑張っていたので、根負けしてか『お前永続きするか』と言われた。この言葉で意地でも続けて見せると決心した」と。

僕が当時を思い出せないのは期待を持たなかったせいかも知れない。

その君がメキメキと伸びた。日書美で美術院賞や、準大賞を受けた時、同僚は僕の肩をたたき君の受賞を我事の様に祝福して呉れたあの場面が、今に思い出される。毎日賞の時、桑原翠邦先生が「こういう正統な重厚な書は今の毎日展で貴重である」という意味のことを言われた。こうして関係の公募展はそれぞれ卒業した。君は正しく意地を通し切った。誠に温厚だが、シンが強い。しかも社中の最古参的立場でありながら少しも偉ぶらない。これは自分の書に対して常に反省を加えている証左で、進歩発展の可能性を多く秘めた人の在り方である。君が社中の信望を集めている所以もここにあると思う。

永年の練り上げた君の筆は、一頃の豪快重厚なものから、近年は枯淡なそして楚々とした抒情性豊かな作風に変って来ており気負いのない、衒のない清浄な境地に遊ぶ感がある。

今回学書三十余年にして初めて個展を開くという。おそらく清冽な小川のせせらぎを聞くような爽やかな、そして静かな清さと安らぎを与えて呉れるものと思うが、或は更に多面的な振幅の広い芸境を示して呉れることも充分に予測される。ともあれ今から楽しみである。心からこの快挙を喜び、祝福したい。と。

一日平均五百名以上の観客で大盛会の書展であった。

几帳面、繊細、綿密、端正、清潔感、それでいてドジ…なところもあって人間的。永原さんが準大賞と決まったあの日が最期の飲み会となった。ご機嫌よく、二日間の審査の疲れも見せず、話して笑って飲んで「又ネー」と約束したのに。病魔が身体をむしばみ、遂に勝つことは出来なかった。

「万年青年」と言われた静峯さん。みんな　みんな　寂しさと　涙をこらえての　お別れとなりました。

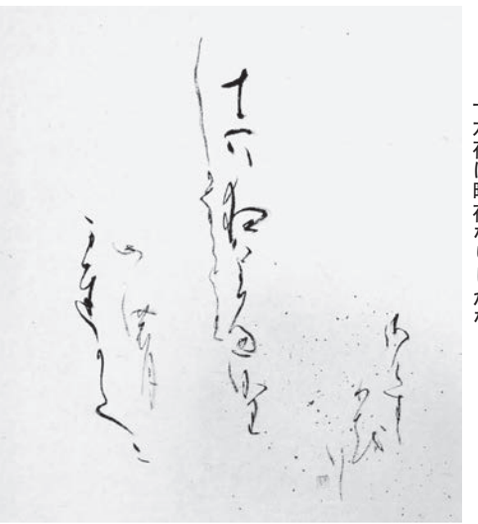
「巨星落つ」　言葉すべて空し。　只々有難う。　合掌

（本間桂龍・記）

土田静峯先生年譜

昭和４年４月９日　小樽市にて誕生
昭和22年　臥龍社入門　宇野静山に師事
昭和25年　臥龍社主催第３回全道書道展市長賞
昭和29・30年　第８・９回日本書道美術院展特選
昭和34年　第13回日本書道美術院展美術院賞第一席
昭和36年　第４回日展入選
昭和38・39年　第15・16回毎日書道展秀作賞
昭和39年　第18回日本書道美術院準大賞
昭和40年　第８回日展第５科入選
昭和42年　第８回北海道書道展準大賞
昭和42年　第19回毎日書道展秀作賞（第一位）
昭和43年　第20回毎日書道展毎日賞
昭和54年　土田静峯書展　長崎屋２Ｆプラザ
平成２年　土田静峯・北川稲谷二人展　小樽運河プラザ
平成３年　電気通信産業功労賞
平成７年　小樽市文化貢献賞
・臥龍社同人
・北海道書道展審査会員
・全道書道展審査会員
・小樽市書道市展委員長
・創研社主宰
平成20年８月15日　逝去　79歳





十六夜は昨夜なりしかな…

安らかに　濱 美奈子先生

或る日の「暫らく教室を休みます」との電話を最後に先生と永遠のお別れとなりました。

かなの書にひかれて先生と私は昭和47年に山本美智子先生に師事いたしました。いろはの習作から、古筆の臨書へと、やがて創玄展、道展、毎日展の出品をすすめられる頃には、創作の難しさに戸惑い悩み互いに励まし合う良い書の友となりました。

先生は、常に冷静で沈着にして細やかな気配りもなさいました。優しく、時には鋭い感性での適切なアドバイスにも助けられました。

平成十六年には道展において見事に準大賞を受賞。日頃のたゆまぬ努力と熱意が輝かしく花開いたのでしょう。その快挙に仲間は大きな刺激をうけ、更なる意欲をかきたてられました。晴れの日に、うす黄色の和服に喜びをつつみ温和な笑みをたたえられた先生のお姿が眼に浮かんできます。

早くには、山口淑子さん（千葉県在住）と先生と私で「昭和六年生まれの三人展」を夢みた事もありました。熱く語り合った当時も懐かしく思います。

また水泳をしている時期もありました。偶然にも同じプールで泳いでいましたのに何故かいつもすれ違いの様でした。水の中で、二人顔が合った時は本当に驚きました。ひそかに楽しみ鍛えていられたのです。

先生は、若くして最愛のご主人と他界されました。後は、残されました義父母様を温かく見守りながら終生お世話されました事も頭がさがります。

日々健康に気をつけられていましたが昨年夏近くより体調すぐれず養生されていました。心配しておりましたが八月三十一日、急なご逝去でした。

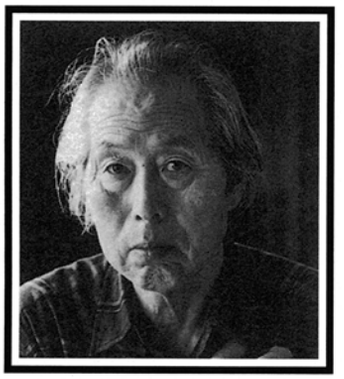
お好きな円山あたりも間もなく新緑に覆われるでしょう。

慎んでご冥福をお祈り申し上げます。

（伴恵美子・記）

濱美奈子先生年譜

昭和６年　４月23日　室蘭市に生まれる
昭和47年　山本美智子先生に師事
昭和58年　第24回北海道書道展　特選
平成３年　第32回北海道書道展　特選
平成４年　第33回北海道書道展　特選　新会友推挙
平成16年　第45回北海道書道展　準大賞　会員推挙
平成20年　８月31日逝去　享年78歳



恩師赤石蘭邦先生を偲ぶ

恩師赤石蘭邦先生が逝去されてから二ヶ月が過ぎました。先生は昨年11月21日朝、静かに瞑目されました。奥様のお話によりますと、亡くなる前日から、お世話になった愛善園の職員の方や、奥様、お子様の手を握り「永い間、お世話になりました」と別離のあいさつをされ、翌朝旅立たれたということであります。自分の死期を悟り、辞世のことばを述べて逝かれたわけで、正に高僧の末期のような超然たる92歳の大往生であったのであります。

先生の生前の遺言に従い、親族により葬儀を終えられました。私共教え子が相図り、奥様の許しを得て、１ヶ月後の12月19日に“赤石蘭邦先生を偲ぶ会”をとり行わさせて頂きました。年末で多忙な中ではありましたが、三百数十名の方の参列によりまして、生前の先生の業績を偲び、お別れの会を終えることが出来ました。教え子の１人として、恩師に感謝の誠の一端を捧げ得て、一安堵しているところであります。

申すまでもなく、赤石先生は教育大学旭川校の書道科の教官として私共の指導に当たられると共に、旭川を中心とした道北地区の書道文化の興隆発展に尽力されました。その真摯な人柄と深い斯道の探求姿勢は全道的には勿論、中央書壇でも、その存在の大きさを謳われていたのであります。別掲の書歴によってもお分かりの通り、その業績は筆舌に尽くせないものがあります。

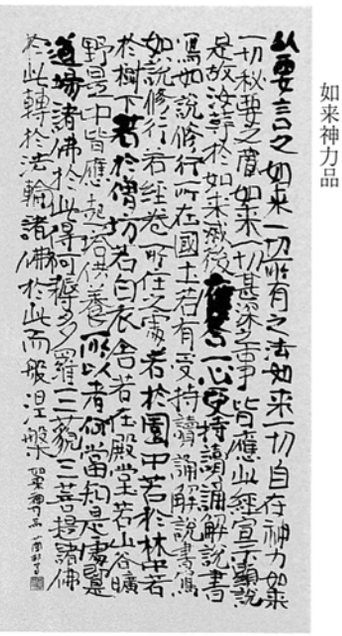
特に私共直接側にあってご指導を頂いた者にとってはその高邁な識見と“知行不離”を一貫して貫かれた先生の生きざまには感服の外はありませんでした。

昭和25年、先生の恩師加納守拙先生の離旭を期に創立された旭川書道連盟では33歳で、副会長として旭川書壇の戦後の活動の場を創られました。その10年後、改組された書道連盟の初代理事長として、私共当時の若者に活動の場を与えて下さり、今日の隆盛の基盤をうち立てて頂きました。

その頃北海道書道展が創立されるに伴い、初回から審査員として、道北地区の出品者の啓発に尽力され、その指導に当たられました。昭和39年には書創社を創立され、道書道展、毎日展、創玄展、日展等に出品する若者の指導に全力を傾倒されました。

また、戦後の占領政策により消滅の憂き日にあった書教育について深く憂慮され、北海道書道教育研究会の旭川支部を創立され、先生のかねてよりの書教育の理念である“童書教育”の普及発展に尽くされました。数年後、支部を独立させ、“北　北海道書写書道教育研究会”とし、その初代会長として陣頭に立ち、道北地区の書教育の発展に尽力され、今日の本地区の書の甲子園での活躍の基礎を築くと共に、北海道学生書道展における永年の本地区の活躍の人材を育成された功績は誠に大なるものがあります。

先生は常に「流行を追うことなく、古典の臨書を通して自己を確立してほしい」がその指導理念であり、自ら厳しい古典臨書に終始されました。私共は常にその姿に畏敬を感じつつ反省させられておりました。



如来神力品

また先生は、創作に当たって素材の選択に深い意を用い、決して安易な選択をせず、選んだ詩・文に深刻に取り組まれ、自家薬籠中のものとして消化した上で表現に当たられました。そのため即興的な表現を排し、じっくりと１つの素材に取り組み、表現をくり返されるのでありました。従って他人の作品もその立場に立ち、じっくりと観た後、時間をかけて観た後に感想を述べられるため、その発言は誠に重く深いものでありました。そのような姿勢は一貫しており、公募展などの瞬時に価値を決める審査には常に不満を抱いておられました。

先生の作品はその人格の表現そのもので、質朴雄渾、脱俗超凡な作風で、巧技を排し、一見稚拙無雑作で理解困難な雰囲気のものが多くありましたが、数年後、図録などで再見した時、漸く先生の心境の一端に触れさせて頂くような深遠なものでありました。

偲ぶ会で、先生が主宰されていた蘭言社の代表、小川紫洋さんのことばの中で、赤石先生の信条が述べられておりました。

「謙虚さのない自信は自信ではなく傲慢（ゴウ）です。自信のない謙虚さは卑屈です。」

正に赤石蘭邦師92年の生涯の生きざまの象徴的な言葉であると拝聴した次第であります。

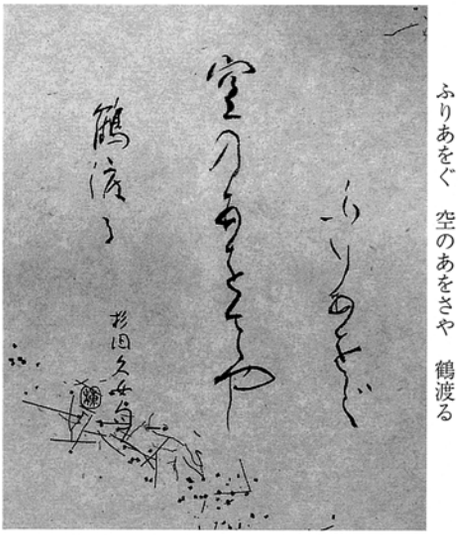
永年の先生のご愛顧に感謝し、冥福を祈りつつ筆を擱きます。

（2010．1．8　平田鳥閑・記）

赤石蘭邦先生年譜

大正６年		旭川市東旭川に出生
昭和９年	17歳	加納守拙に師事
昭和12年	20歳	北海道旭川師範学校卒業
昭和18年	26歳	附属小勤務、魚住明子と結婚
昭和21年	29歳	北海道第三師範学校教官
昭和26年	34歳	北海道学芸大学助教授
		日本書道美術院展・文部大臣賞
昭和37年	45歳	旭川書道連盟理事長（～38年）
昭和38年	46歳	北海道学芸大学教授
昭和39年	47歳	書創社創立・代表
昭和41年	49歳	創玄書道会理事
昭和45年	53歳	旭川市文化奨励賞受賞
昭和52年	60歳	北海道文化団体協議会賞受賞
		還暦・丁巳書展開催
昭和54年	62歳	蘭邦臨書集刊行
昭和56年	64歳	北海道教育大学定年退官・名誉教授
昭和59年	67歳	旭川市文化賞受賞
平成２年	73歳	開基100年旭川市功労者賞受賞
平成３年	74歳	勲三等旭日中綬章受章
平成６年	77歳	蘭邦喜寿小品展開催
平成９年	80歳	蘭邦傘寿書展開催・作品集刊行
平成16年	87歳	蘭邦米寿書展開催・作品集刊行
平成21年	92歳	11月21日逝去





ふりあをぐ　空のあをさや　鶴渡る

沖中棟舟先生の書業を讃える

北海道の書道界、教育界に多大なるご功績を残され、沖中先生は、平成21年５月８日、89歳をもってご逝去されました。先生は、常日頃、物腰極めて柔らかく、温顔を湛えておられました。北海道書壇随一の良識人として知られ、書作と書道教育そしてその学識の深さで、幅広い分野でご活躍されました。

先生の書作のスタートは、札幌師範学校で金丸梧舟先生の指導を受けられたことに始まります。その後、東京の田代秋鶴、仲田幹一先生に十余年師事されましたが、関西かなに魅せられて西谷卯木先生の門を叩かれたとのこと。「かな書美の研究者」として北海道書壇に当初から異彩を放つ足跡を残されました。

書道教育に関しては、青沼秀鳳先生と共に、北海道の学校教育における書写書道の振興発展のために、小中高大学一貫した研究会を興し高い見識と実行力をもって、北海道書道教育連盟事務局長、そして会長として書写書道推進の先頭に立たれました。この運動は全国に先がけてのことでありました。書写書道の学校教育における画期的な必修科目実現のために、文部省へ働きかけたその功労は大なるものがありました。

先生は、義務教育の教員ではありましたが、異色の人材ということで、請われて永く教育大学の非常勤講師として、札幌、岩見沢、釧路の各大学で「かな書道の指導法」と「古筆研究」の講座を担当されました。一方、先生は月刊書道誌「書道文化」「書の研究」誌上で「かな書道学習」の講座を半世紀に亘り執筆されました。幅広い層に古筆の学習を系統的に、しかも理論化して、解り易く指導された類まれな書人として定評がありました。

先生は、書作家として北海道書道展、北海道書人展、全道書道展（現・国際現代書道展）等に玉作を発表され、また、10回にも及ぶ個展を通じて、優美でしなやか、格調の高い棟舟書芸を求めて、個展の度にテーマを設定し淳雅高潔な書線で華麗なハーモニーを奏でて下さいました。先生の偉業をまとめ上げるに当たり、受賞、表彰状、感謝状の全てを網羅するには紙幅が足りません。改めて先生の存在の大きさを痛感する次第です。心から哀悼のまことを捧げます。

（小原道城・記）

沖中棟舟先生年譜

大正10年５月24日	当別町で生れる。（本名）義男
（職歴等）	
昭和17年４月１日	石狩郡中小屋国民学校・訓導 その後、札幌市内小・中学校教諭、教頭、校長を歴任、昭和57年札幌市立中島中学校長をもって教職を退く。
昭和47年４月～52年	北海道書道教育連盟会長
昭和57年４月～平成７年	北海道教育大学非常勤講師（札幌・岩見沢・釧路の各校）

（受賞）

昭和41年	北海道書道展準大賞、以後会員に
昭和60年	書道芸術・芸術ミレニアム大賞
平成５年	全道書道展文部大臣賞
平成10年	札幌市民芸術賞
平成21年	全道書道展青沼秀鳳記念賞

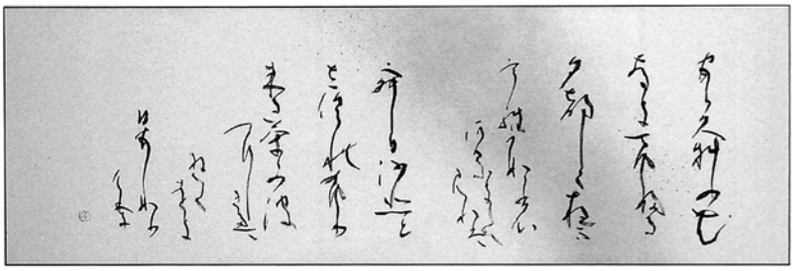
（表彰状・感謝状）

昭和54年	全国書写書道教育研究会理事長表彰
昭和56年	北海道教育委員会教育長表彰
昭和56年	文部大臣教育功績表彰
平成13年	北海道書道連盟会長、感謝状

（叙勲）

平成４年	勲五等雙光旭日章





雑草の花咲き煙る夕月夜…

村井藻々子先生を偲んで

北海道書道展50回記念展の年に、会員30年表彰された村井藻々子先生は、体調をくずされ当日出席することが出来ませんでした。残念でなりません。その後、治療に専念され、一時元気になられたとのお手紙をいただき、安心しておりましたが、治療の甲斐なく、昨年７月９日に亡くなられました。

村井先生は、旧姓〔鮫島〕女学生時代に、さわらび会松本春子先生に師事されたのちご結婚なされ、ご主人様の転勤で一時、お稽古を休んでおりましたが、札幌に戻られてから再び、春子先生のお稽古場に見えられまして、私共と一緒に毎日展、道展に出品されるようになり共に苦しみながら、楽しく勉強したことが懐かしい想い出となりました。

昭和41年に〔あかね会〕を設立され、ご自宅でお弟子さん方をお教えになり、先生は大変静かで謙虚な方でした。のちハリスト正教会の婦人部の方にも〔かな〕の美しさを教えていらしたと伺いました。

藻々子先生のお父様はお医者様で、〔鮫島交魚子〕という名の有名な俳人でいらっしゃいました。

北海道ホトトギスの会長をされていた方で、そのお父様の俳句を思い出にと作品になさいまして、いつも道展に出品されていました。

先生のお元気な頃には、山のグループの方と毎週のように、藻岩山の山草を眺めながら登っていらっしゃいました。私も一度だけお供したことがございます。

ある時、山のグループの方々と待望の大雪山に登ることが出来〔あの一面のお花畑を見ていたら疲れていたのもすっかり忘れるほど感動した〕とお話していましたのを思い出しております。

村井藻々子先生は、体調のすぐれない中、昨年の道展に出品されましたのが最後の作品となりましたのは、哀しく淋しい思いがいたします。

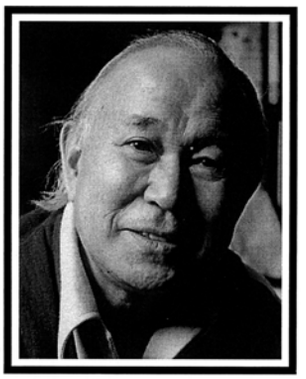
いつも〔かな書道〕について、お互いに語り合ったことが今私の心に残っています。

村井藻々子先生を偲び心よりご冥福をお祈りいたます。

（長内敬子・記）

村井藻々子先生年譜

昭和４年	２月10日　札幌生まれ
昭和23年	さわらび会入門、松本春子先生に師事
昭和41年	あかね会設立
昭和49年	第15回北海道書道展会友推挙
昭和49年	毎日展において毎日賞受賞　会員推挙のち退会
昭和54年	第20回北海道書道展準大賞　会員推挙
平成元年	さわらび会退会
平成21年	北海道書道展　審査員30年表彰 ７月９日逝去　享年80歳



「水流不争先」　静山先生座右銘

「楽天知命」　平成22年７月８日103才の天寿を全う。
幽冥境を異にされました。
謹んで哀悼の意を表します。
「人生百年」静山先生80才の時、高らかに謳いました。静山先生は堅い心で100才を目指しておいででした。
ご自宅に戻られた静山先生は静かに冥黙されておいでした。お好きなお酒を所望され、食事も一口、「あぁ美味しかった有難う」ご自分の命を悟ったかのように、その後食事も絶って眠られ彼岸へと旅立たれたご様子でした。
合掌

人は或時の出会いが、その人の一生を支配するということがあります。大正11年静山先生札師１年生のある時の清書に「此奴後に文検に登第すること万々疑うべからざるものなり。自重せよ自愛せよ」と朱書きしてこれをクラスに読みあげ賞状のように渡されたのが、時の師石川悟堂先生でした。静山先生はまさに青天の霹靂。この言葉はあだやおろそかに書いたものではあるまい。何度何十べんと頭の中で繰り返したことか。これが結局自分の一生を支配してしまった、と。この後の静山先生の書に対する猛然とした挑戦の始まり。昭和８年、この頃文検以上の難関とされていた天来門入門試験に合格。北海道では直弟子は静山先生ただ１人。臥龍社を興したのも昭和15年とかなり遅い。ただ古典をしっかり勉強したい。古典の臨書では自負出来る所まで行きたい。これが最大最高の目標でありました。この気持は終生変わることなく精進されました。

臥龍社の門を叩いた門人には、毎月半紙４枚の先生肉筆臨書の手本が与えられます。百数十名を越える門人に進度や法帖が異なるにもかかわらず、カリキュラムに従って滞ることなくいただきました。毎月800枚以上。端正に正座し古典と向き合ってお書きになる。それがご自身の古典との闘い。又毎月の臥龍の会報は先生直筆ガリ板の印刷が休むことなく送られました。１号１号貴重な歴史が刻まれています。鷗亭先生がこのことを知り「君　今時日本国中探しても誰もいないよ…」と感嘆されておられたことが今でも鮮明な会話として耳に残っています。

学書が師風相伝の手本主義でなく、古典臨書によるべきを確固と主張した比田井天来先生の意志を受け静山先生の広い古典に立脚した書業研鑽を求め、門を叩き、書と語り合い、古典と語り合い　師を囲んで仲間と語り合って育てられた私共は静山先生の門弟であること、天来先生、桑鳩先生の孫弟子であることに誇りと幸を感じます。

静山先生の随筆「辿り歩き半生」をご紹介したい思いですが、残念乍ら割愛いたしました。

限りなく透徹した境地、書を求める厳しい精神、書が固定してしまうのを嫌い常に破壊と構築を繰り返すという模索、試行錯誤の強烈さ。気品と情懐を内に秘め、艶あり、響きあり、古意豊かで静か。枯淡な味は静山先生そのものなのです。

絵が好き、音楽が好き、囲碁４段尺八は琴古流皆伝。

天狗山の下で天狗にならず、各分野に於ての目覚しい活躍ぶりは、名声が高く、北海道文化の旗手として生涯ご活躍されました。

「水流不争先」静山先生座右銘です。

日展入選、以後不出品。天来先生鷗亭先生から上京をすすめられましたが、北海道から、小樽から離れることなく「不争先」を貫き通し、堂々と生き通しました。

静山先生103才。臥龍社全員一同静山先生の長寿をお祝いし、悲しまず、先生から受けた数々のご指導に深く感謝し畏敬の念でお見送り致します。合掌

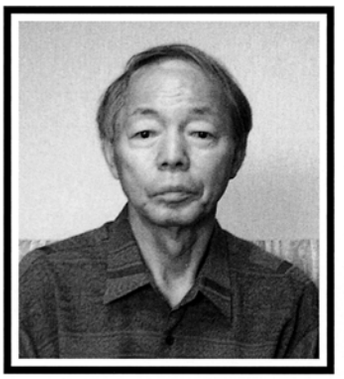
（本間桂龍・記）



放神青雲外絶跡窮山裏

宇野静山先生年譜

１．学歴　師承
明治39年　10月15日苫前村に生まれる
大正11年　札幌師範入学
大正12年　漢字を松本芳翠　仮名を高塚竹堂に師事
大正15年　札幌師範卒業　同年　習字文検
昭和７年　国語文検
昭和８年　比田井天来に師事（14年１月４日没迄）
昭和24年　上田桑鳩に師事（43年９月４日没迄）
昭和11年　庁立小樽商業学校教諭
昭和23年　道立小樽桜陽高等学校教諭
昭和35年　北海道学芸大（現教育大）講師
２．主な書歴
昭和12年　第１回大日本書道院展（比田井天来単独審査）銅賞　（最高は銀賞）
昭和15年　第５回全国教職員展特選　同年第２回興亜書道連盟日満支三国展銀賞　同年臥龍社創立
昭和16年　第３回三国展推薦出品
昭和28年　日展入選（北海道ではただ１人。以後不出品）
昭和45年　個展開催作品集刊行
昭和47年　比田井天来門流展推薦出品
昭和49年　比田井天来記念館に作品収蔵
昭和52年　東京銀行パナマ支店新築にあたり２点収蔵され落成式典にパナマ大統領の鑑賞を受く
昭和53年　バレイ書会展推薦出品
昭和55年　第１回大璞展推薦出品　同年東大寺昭和大納経　華厳経奉納
昭和57年　日中書道芸術交流展推薦出品　同年成田山大塔建立記念献書奉納
昭和58年　喜寿記念代表書家作品集に推薦出品
昭和61年　パラグアイ大使館に作品収蔵
中国大連個展　作品集刊行
大連個展記念宇野静山個展作品集刊行
３．其の他
昭和45年　第２回小樽市文化功労者
昭和52年　北海道文化賞
昭和62年　地域文化功労者文部大臣賞
平成22年　７月８日　103才　逝去





隅

書と人生　ああ河合蕉竹先生

河合蕉竹先生は　今日の書作家には数少ない完全自立の文人書家でありました。

既にご承知の方も多いと思われますが、昨年９月亡くなられました。

若い頃から健康に気を使われ、奥様やご家族も何かとご心配されておられましたが、60代になられてから持病とも言える胸をこじらせ、更に先年、脳卒中で倒れられ、ついには、右半身不随となり、展覧会には左手で揮毫されておりました。

ご家族には「もうこれ以上がんばれと言うのは酷だ…」と言う意味の言葉を残され、そのまま、塊ってしまわれました。書家としての特に残される言葉も無く、大袈裟なことを好まない先生らしい晩年なのか…。社中の皆さんも指導に定評のあった河合先生のご健康を一心に祈られたことと思います。享年75歳でした。

北海道新聞社をはじめ、道展や北海道創玄の皆様と交流をされ、創玄書道会の道南の支部ともいうべき、函玄社の会長職を太田鶴堂先生の後を継ぎ、永くつとめられ、漢字書と近代詩文書の分野で指導をされ、作品も数多く発表されました。道立函館美術館等で創玄関係の行事が開催される時など、きめ細かな采配で、内外ともに、重要な役目をこなしておられました。

私どもと致しましても無念の極みでございます。ここにご報告申し上げ、改めて奥様ともども生前のご厚情に御礼申し上げます。

蕉竹先生は無我の人でありました。函館市文化賞の推薦も断られ、創玄展二十回記念賞も遠慮されました。展覧会には具体的な目標を設定せず、「俺はそれでいいんだ…」といつも淡々としている。先生を「文人」と言ったのは、単に漢文や文学に長けて居るからではなく、故人のように人生を達観し、無欲で常に、「拙」を守った人であったからです。同時に高等学校教師として厳しい正論を魄き、現実との調和を模索され、生れ故郷の「駒ヶ岳周辺」に籠り、充実した精神世界を謳歌された人生でした。

また、北海道新聞の俳句投稿で選者を刮目させたのは、毎年の事でした。絵画に於いては油彩で「赤駒ヶ岳」の連作を発表したり、墨絵では与謝蕪村を私淑しておられたのか、よく俳画や山水画を得意とされ、澱みのない空間を描き、また、観る人の創造力を刺激したり、ご自身の「河合」の姓をもじり「かわい」とかけて「烏」の絵を描いたりしておられました。まさに先生独特の滴るようにみずみずしい情趣が湛られ、先生の「文人のこころ」は人間の最も豊かな心情として、改めて書と文学と墨絵との融合世界を、新鮮なものとして、気付かされます。感情が純化された絵画的な哲学部分は私などには殆ど分かりませんが、古今の著名書家の後を追うということを一切せず、いつも自然で自身の境地のみを深められてこられた河合蕉竹先生。代表作の「ものぐさ太郎」とともに、右肩を少し落とした後ろ姿が、何時までもいつまでも私の瞼から離れません。

（千葉軒岳・記）

河合蕉竹先生年譜

昭和10年	３月13日　渡島　森町に生まれる
	少年時代　天賦の才能を小林露竹先生に見だされる
昭和30年	大学時代　太田鶴堂先生のもと　日本書道美術院展教育部文部大臣賞
昭和30年	北海道学芸大学函館分校卒業
	駒ヶ岳周辺の各地で教職に就く
昭和41年	北海道書道展に於いて特選　翌年会友
昭和48年	病後書道再開　創玄書道展に於いて推薦毎日賞
	翌年教育部審査員
昭和50年	北海道書道展に於いて準大賞　翌年審査会員
昭和51年	創玄書道展に於いて準大賞　翌年二科審査会員
	のち一科審査会員
昭和55年	毎日書道展に於いて毎日賞　翌年会員
昭和58年	日展初入選
平成11年	函玄社会長就任（平成22年まで）
平成12年	函玄社が函館市文化団体協議会白鳳章を受ける
ほぼ毎年	道立函館美術館企画の書道関係行事に函玄社会長として陣頭協力
平成16年	北海道書道展30年表彰
平成22年	９月７日　75才　逝去



師を懐う

私は、師である清風先生に四十四年間に亘り指導を受けてきました。先生は昭和四十二年に羊城会を設立し、後進の育成に努められました。

先生は伊達高校で故佐々木寒湖に師事し、北海道学芸大学に進み、本格的に書の道に入られました。

先生の書を書く姿は、蝶が紙の上を舞うように、軽快なリズムを奏でたかと思うと、或る時はゆっくりかつしっとりと筆を運び、また或る時は紙がバリバリ音を立て、筆勢豊かに迫力を感じさせるなど千変万化に富んだ姿でした。筆の動きは概して早く、何か手品を見ているような心地がしたものです。先生は自分の描きたい書の姿を追い求め、寸暇を惜しんで努力されていました。

先生の書は、羊毛筆を使った直筆主体の作品が多く、深みのある豪快な作風が主となっていると言えます。反面、細い線で繊細な情趣溢れる作品も数多く書かれています。常に新しい作品を求め、一作品一面貌を心がけていました。その作品は、古典臨書を基盤とした漢字作品を主としながらも、近代詩文書まで幅の広いものでした。

全国を視野に毎日展や創玄展で活躍されましたが、常に北海道の書を求め北海道書道展をとても大切にされていました。濃墨を好み、肉厚の線で大きな動きを見せ、そして温かく周りを包み込む作風は、北海道の豊かな自然と大地に魅せられていた先生独特な心象の表現だったのではないかと思います。

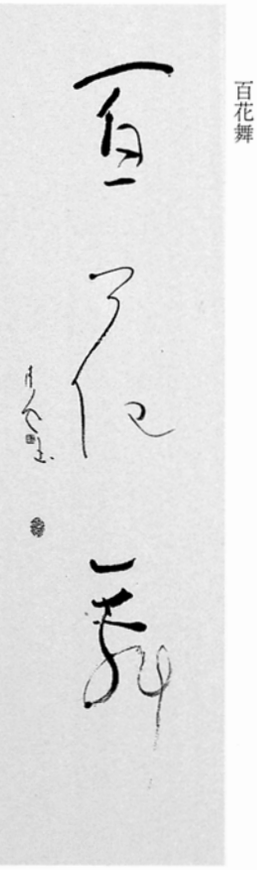
また、細線の作品では、清貧な心を大切にされ、揺れる内面を表現し、よく「旅」「唄」「寂光」「幽境」など人生の指針となるような言葉を好んで書かれていました。その書境の振幅の大きさに、今更ながら感嘆いたします。さらに、良寛の楷書の要素を取り入れた書を羊城会の作風といわれるまで指導されました。

歌が好きで、その歌声は甘く、力強く、歌のうまい書家として有名でした。先生の十八番は「長崎の鐘」で、NHKののど自慢で好成績を挙げたことは知る人ぞ知るところです。酒は強くないのですが、少しでもお酒が入ると気が大きくなり、周りをリードするのが上手でした。

そのような先生が、体調を崩され闘病の生活が続き、私たち門人は、直接的な指導を受けられなくなりましたが、いつも会員のこと、北海道書道展のことなど書の世界に思いを馳せていたと伺っています。

あまりにも早い旅だちに、残念な思いを胸に秘め、門人一同の心の中に生き続ける清風魂を大切にして、それぞれ邁進することを誓い、追悼の言葉といたします。

（文責　松山朴羊）


百花舞

中川清風先生年譜

昭８	北海道虻田郡豊浦町に生まれる。清と命名
昭24	伊達高校に入学し、佐々木寒湖に師事
昭30	藤根凱風・中野層翠と「書の三人展」を札幌市石川物産館ギャラリーで開催
昭35	第一回個展を札幌三越で開催（以後八回の個展開催）
昭36	道立月寒高等学校に書道科教員として赴任
昭37	日展初出品初入選（以後一回入選）
昭41	第二回創玄展において大賞受賞 第十八回毎日書道展にて毎日賞受賞
昭42	第八回北海道書道展にて準大賞受賞 書道研究会「羊城会」を創立し、会長となる
昭50	札幌市議選に豊平区から出馬するも次点
昭55	第八回札幌市民文化奨励賞受賞 第二十三回創玄展にて文部大臣奨励賞を受賞
昭63	毎日書道展中国上海展に日本代表選抜作家として出品 北海道文化奨励賞受賞
平２	毎日書道展カナダ展に日本代表選抜作家として出品
平４	羊城会創立二十五周年記念企画展として中川清風近作展を大丸藤井セントラルにて開催 ビデオ「中川清風書の秘密」を発行
平６	創玄代表作家大作展に出品
平19	羊城会創立四十周年記念展「書・羊城会展」
平23	六月十三日、享年七十八歳を以て永眠



原　錦穂先生の業績を偲ぶ

原錦穂先生と最初の出会いは昭和34年で、私が同じ職場で同じ担当係で働くことになり、上司でありました先生に一からやさしくご指導戴きました。

その後、昭和40年に愛好者を募り奈井江親書会を再度たち上げ、この時に私も誘われて会員に、以来書の道を47年間にわたってご指導を戴いたのでございます。

先生は戦後間もない21年、書を通し心豊かな人間性を養いたいという教師や事業所の職員の仲間と相集い奈井江親書会を結成し、日本書道研究会の渡辺錦舟（緑邦）に師事、熱心なご指導を戴いたと伺っております。

生来、温厚で誠実、物静かにそして冷静に事の判断をされ、決して怒ることなく丁寧な説明と説得力は、衆の認めるところでありました。

お酒、煙草、勝負ごとは全く無縁、書道一筋でおられ２DKの狭い木造の公営住宅で奥様や家族の暖かいご協力を得ながら懸命に練成、精励されました。この甲斐があって30才代に日本書道美術院展で特選、日展で入選２回を果たしたことも伺いました。

このあと昭和40年の春、小さな町で再び奈井江親書会を立ち上げて紆余曲折を経ながら今日に至っております。

強く記憶に残っていることは、先生が作品を書くと筆がキリキリと鳴り、数枚で額から汗がポトポトと落ちることしばしば、集中心の現れと感じました。

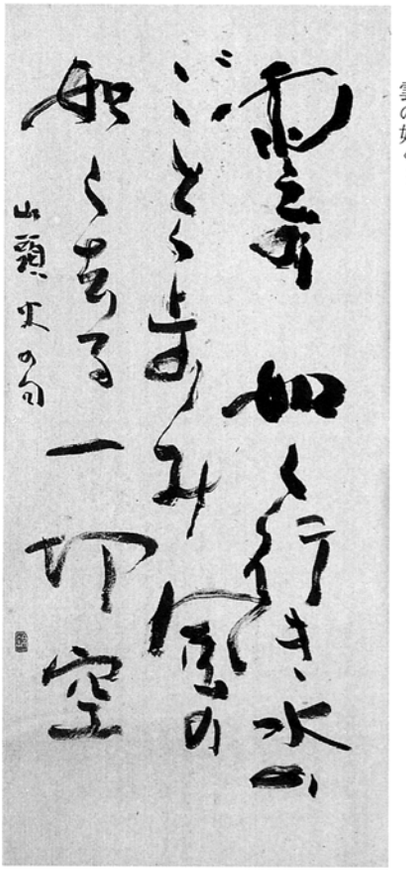
この頃から先生は漢字から大衆が理解でき、読み得る現代書の研究に軸を変えることに務め、44年その努力が認められて道展準大賞の栄誉に浴し、翌年から会員として長年活躍いたしました。

また錦穂先生は空知および地元奈井江町の文化活動にも係わりを持ち、41年奈井江町文化連盟の発足と同時に17団体の理事長に就任、事業の推進に務められました。

その後副会長を経て63年から平成19年の実に19年間の長い間、会長を歴任し、連盟の創立30、40周年事業を始め町の文化振興と発展に尽くされました。この間、空知管内の文化団体連絡協議会の理事として活躍しました。

さらに職業であります町の職員としては、幹部職員を務め上げ、特別職である収入役４年を全うしその後も監査委員や社会教育委員等多くの公職を歴任されました。

先生は文章作成に長けておられ、退職後は町開基百年記念事業の一つ「奈井江町百年史」、その後「町立病院30周年史」「開町50周年史」の執筆編集にも従事されました。


雲の如く…

年齢的なこともあって、数年前から通院を余儀なくされておりましたが85才にしてはお元気で昨年の２月まで作品選別会にもご出席され、批評を戴いておりましたが、３月中旬に身体の不調を訴えられて入院、早いご回復を願っておりましたが願いも空しく、帰らぬ人となりました。誠に残念でなりません。

これから門下生共々、錦穂流を大切に継承して行くことをお誓いするとともに、師のご冥福をお祈りいたします。

（岡　一穂・記）

原　錦穂先生年譜

大正15年　９月30日　後志　倶知安町に生まれる（本名）正美
昭和16年　奈井江産業組合に勤務
昭和20年　兵役に服する
昭和21年　同志と共に奈井江親書会を創設、日本書道研究会　渡辺錦舟（緑邦）氏に師事
昭和23年　奈井江村役場に事務吏員として就職
昭和34年　日本書道美術院展特選
昭和38年　日展第５科入選（40年再入選）
昭和40年　奈井江親書会を再発足し、会長に就任
昭和41年　奈井江町文化連盟発足と同時に理事長に就任
昭和44年　北海道書道展準大賞　翌年審査会員
昭和58年　奈井江町収入役に選任（～62年）
昭和62年　奈井江町100年史編さん専門編集員を委嘱
昭和63年　奈井江町文化連盟会長に就任（～平成19年）
平成２年　奈井江町監査委員に就任（～６年）
平成７年　奈井江町自治功労者表彰
平成20年　空知文化団体連絡協議会長表彰
平成23年　北海道書道展功労顕彰　招待会員に推挙
平成24年　５月15日　85才で逝去



田上小華先生を偲んで

田上小華先生を失ってはや一年が経ちました。

新しいあしす会の会員は、以前と変りなく制作にはげんでおりますが、きっと田上先生と二人連れで道を探し続け乍ら歩んでいるのではと思う今日此の頃です。

先生のお父様である故桑島雁来先生は、御長女の田上先生に特別な期待を寄せられ、四才から筆を持たせて書道の基礎を徹底的に厳しく指導されたとのこと。先生の小学校からの学生時代の作品は素晴らしかった、と妹様の鈴木竹華先生より伺っておりました。

昭和30年、桑島先生が関西のかなに心を動かされて正筆会の故西谷卯木先生に師事し、田上先生もその頃からお父様と御一緒に神戸の正筆会に通われる様になりました。昭和54年に教員を退職された後は指導にも力を注がれました。道新文化センターの行事で海外旅行に参加された後はいつも楽しそうに旅行のことを語っていらっしゃったことを思い出します。

道展、正筆会、読売書法会などにおける先生のお元気な御活躍振りが思い出されてなりません。

御家庭では、御両親様二方共を百才迄自宅介護されて、その御様子は只でさえ多忙な書生活なのにと、我々の眼には超人的にさえ写ったものでした。

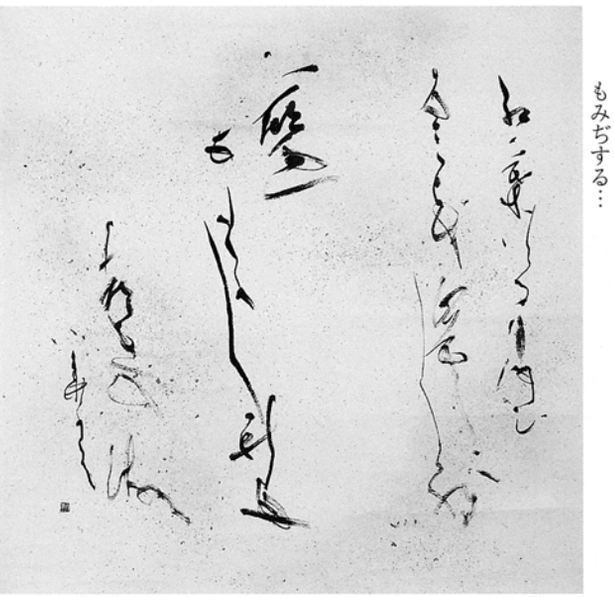
法名　遊導院釋尼小華については、御葬儀の中でお坊様が「道を極めた人はその後、遊び楽しむといわれている」と由来を説明され、意を得たりと嬉しうございました。

苦しみを表に出さずに何時も明るく屈託なく振る舞われていらっしゃった先生は、寸暇を惜しむ努力の生涯でしたから今もきっとあちらで書を楽しんでいらっしゃるに違いないと思います。

先生、永い間御苦労様でございました。そして本当にありがとうございました。謹んで深く御礼を申し上げます。

合掌

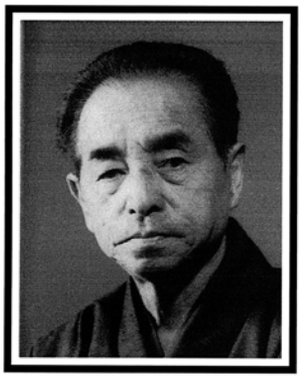
（中山深雪・記）



もみぢする…

田上小華先生年譜

昭和８年１月１日札幌市に生まれる　命名　裕子
４才の頃より父故桑島雁来先生の指導を受ける
昭和30年　正筆会故西谷卯木先生に師事
　以後正筆会会長黒田賢一先生に師事
昭和42年　北海道書道展特選一席
昭和43年　日展入選　北海道書道展特選
昭和47年　北海道書道展準大賞受賞
昭和48年　北海道書道展審査委員
昭和54年　教員退職
　道新文化センター講師
　自宅、市民会館などで指導
平成４年　大丸藤井セントラルスカイホールにて
　桑島雁来・田上小華・鈴木竹華
　親子三人展を開催
平成10年　読売新聞社賞を受賞
平成12年　正筆会総務理事
平成13年　桑島雁来先生逝去のため、あしす会会長就任
平成14年　二度目の読売新聞社賞を受賞
　北海道書道展30年表彰
平成15年　読売書法会理事審査委員
平成18年　大丸藤井セントラルスカイホールにて
　あしす会70周年記念展
平成23年　大通美術館にて
　第29回あしす会書展
平成24年４月23日　永眠　享年79才



一徹

荘牛先生との出会いは、書業60周年を記念した01年の札幌での個展会場であった。その後、度々お会いする機会を得て交流させていただいた。その中での話題は非常に多岐に渡っていたが、特に熱く語っておられたのは手島右卿、八幡関太郎、広中平祐の三氏との出会いであった。いずれもその専門とする分野で頂点を極めた人物である。三氏が中島荘牛という書家に与えた影響は計り知れない。

傘寿・函館文化賞受賞30年記念展を紹介する北海道新聞の記事の中で、「広中平祐先生から西欧的分析科学、八幡関太郎先生から東洋的精神哲学の両対極軸の思索の機を得たことが、我が書作のバックボーンとなった」と語っておられる。

信じた道をひたすら進み、困難を克服するエネルギーが、あの小柄な体のどこにあったのか不思議でならない。そうした一徹な生き方の中で、独自の書境を開き、清新な作品を発表し続けてきた。また、教育に対する強い思いは「公立はこだて未来大学」の創設に大きな足跡を記した。

以下に手島右卿氏のご子息、恭六氏の著書『右卿外伝』から荘牛先生に関わる部分をご紹介し、追悼文とさせていただく。

「最近、複雑系という言葉をよく耳にしますが、書の複雑系を提唱したのは函館市の書家・中島荘牛先生です。右卿の高弟荘牛先生は、書の高い芸術性を主張してやみません。

墨の粒子、水の分子、筆の繊維、紙の組織、そして天候――これら無機質の集合体に人の意思が加わることで「書」という芸術が造り出されてきます。それは書の複雑系といえるかもしれません。さまざまな要素が組み合わされ偶然性と思えることも重なって、思わぬ書美が創造されることもあります。」

「そもそも右卿門には三人の牛が居ます。東都には小林抱牛。北には中島荘牛。そして南の和泉蒼牛です。(中略)同じ牛でも北の荘牛先生は多弁で批評精神の旺盛な能書家です。しかしこの人もいったん決めたことは頑固なまでとことん追求します。

近年、荘牛先生は函館の新大学設立に向かって奔走――世界的数学者でフィールズ賞受賞者の広中平祐先生を引き入れての大活劇を演じました。

ことの起こりは平成に入り、函館における新大学を創設する市民レベルの運動でした。荘牛先生は書家としては道草とも思われる「公立はこだて未来大学構想」に参画しました。(中略)

最晩年、父は母みやと共に札幌に旅して親しく荘牛先生と旧懐を温めました。このとき右卿が依頼された書は「白馬入蘆華」。荘牛先生によって北の空にも父の遺風は脈々と受け継がれています。」

彼岸の地でも一徹に筆をとっておられることでしょう。

合掌

(青木空豁・記)



竹

中島荘牛先生年譜

大正15年	1月1日　函館市に生まれる（本名）榮一
昭和18年	国民学校教員検定試験合格（17才）
昭和21年	中学校教諭となる
昭和23年	書を手島右卿先生に、漢籍を八幡関太郎先生（白樺派同人）に師事
昭和27年	第4回毎日書道展秀作受賞 独立書人団会員となる（後に参事） 日展（新・旧）入選後、日展には不出品、独立展を中心に書作活動
昭和34年	北海道書道展に委嘱作家推挙（後、審査員歴任）
昭和35年	毎日書道展会員推挙（後、審査員歴任、参与会員）
昭和49年	函館市文化賞受賞（芸術） 教職を退き、書研究に専念
昭和52年	函館市文化団体協議会会長推挙（～昭和53年）
昭和58年	広中平祐先生との出会いを機に、新大学創設を提言、湧源大学実現推進会を興し、平成12年「公立はこだて未来大学」開学直前まで推進の中核となる
昭和60年	北海道文化団体協議会「文団協賞」受賞
平成20年	紺綬褒章受章
平成23年	北海道文化賞受賞
平成24年	1月「北海道文化賞受賞記念　荘牛米寿雪月華書展」開催 8月27日　87才で逝去

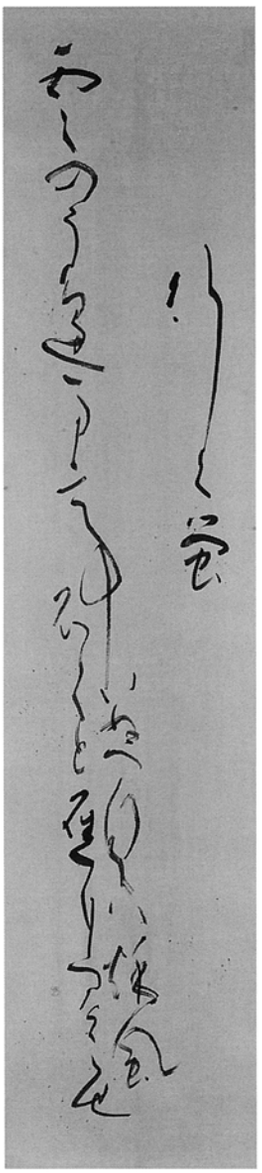
に、ご逝去されましたことは本当に残念で、寂寞の思い今尚胸をよぎります。

沙恵子先生有難うございました。

心からご冥福をお祈り申しあげます。

合掌

（千鶴敏子・記）



ゆく蛍雲の上まで



長縄沙恵子先生を偲び

長縄沙恵子先生がご逝去されてから早や一年近くの日が過ぎ去りましたが、先生との思い出は、しっかり私の胸に刻みこまれております。

先生は松本春子先生に師事されておりましたが、春子先生の没後、平成元年より松本暎子先生に師事され、さわらび会常任理事としてご活躍されておりました。決断と行動力に勝れた方で、事務局長の任にある時は、諸々の行事、その他の仕事を滞りなく、見事に遂行されるなど、会にとって誠に貴重な存在で、この先まだまだ生きていて欲しかった方です。

沙羅の会主宰でもありました先生は、お忙しくお過しでしたが、書に対する思いは熱く、かなの書は勿論のこと、漢字を辻井京雲先生に学び、只管、道を極める可く努力されておりました。

趣味の領域も広く、お忙しい中でいろいろと行動力を発揮されているお姿は、若く・明るく・とても魅力的でした。

東京での書展を見に、二人で上京した折の事です。

オープンして間もない、六本木ヒルズ森タワーに行き、警備の人が、あちこちに立つ中を臆することなく、めぐり歩くうち、迷ったりしながらも途中の階で見つけた、屋上行きのエレベーターに乗って、一気に最上階まで昇り、展望台で東京の街を眼下に眺めた時は、少々疲れを感じ乍らも、楽しい満足感にひたった二人でした。その後、ビルを出たところで、男性が自転車で曳く人力車ごときものを見つけ、彼にすすめられるまま、話しの種にとばかりに乗り込み、六本木の街中を10分程の走りを楽しみましたが、何れも、茶目ッ気を少しプラスした先生の、若く・明るい行動力にあやかった得難い思い出と感謝しております。

「子」歳生れの二人は、山田太虚先生が催された「子」歳書人展にも参加しましたが、先生は私より一廻り下の「子」歳生れです。今後のご活躍を期待しておりましたの

長縄沙恵子先生年譜

昭和11年	２月３日　札幌に生まれる
	藤学園在学中に書道に出会うが、本格的には、40才を過ぎた頃から始める
	松本春子先生・松本暎子先生・辻井京雲先生に師事
昭和63年	札幌市民芸術祭奨励賞受賞
平成３年	沙羅の会　主宰
平成13年	第１回沙羅の会かな書展開催（セントラル　スカイホール）
平成14年	創玄書道展に於いて準大賞受賞
平成16年	北海道書道展に於いて準大賞受賞
平成18年	第２回沙羅の会かな書展開催
	北海道書道展審査会員
	創玄書道展二科審査会員
	毎日書道展会員
平成25年	６月６日　78才で逝去



山田九溟先生を偲んで

清明で穏やかなお人柄でありました九溟先生が、昨年の10月28日にご逝去されました。暇をみてはウォーキング、ヨガ、パークなどで健康に気をつけられていたのですが、昨年の春頃病気が見つかり、その後病院・自宅での懸命の療養にもかかわらず、残念なことに涙してのお別れとなってしまいました。

生前、先生は本当に書作を生きがいとしていて、グループ研修会などではさまざまな雰囲気の作品を持参され私達会員を魅了させました。先生の作品は、直線的な線質を大胆に駆使させながらの作風が多かったのですが、そのことから、表現された空気はいつもピンとしていました。そこから醸し出される空間〔白〕は、厳冬の静まった、澄みきった風景を感じさせるものでした。本名は久明〔ひさあき〕、音読みにして「きゅうめい」より、号・九溟として、後に師・赤石蘭邦先生の賛同を得てのこととうかがっております。

一方、先生は教育者としても情熱を注がれました。上川教育研修センターの指導員として教師の資質向上の仕事に携わり、その後、管理職となってからは学校経営に敏腕を発揮しました。平成２年に旭川で開催された、全国書写書道教育研究大会では、当時、学習指導要領の改訂に伴い、書写の授業時数の減少が打ち出され、さらに、硬・毛を関連させる指導のあり方が求められた時でしたが、先生は研究部長として、先頭にたってその方向を見定められました。今日でも、その源は大事にされているものと思います。

先生は退職後、昨年の３月まで教育大・附属旭川小学校の書写専任講師として指導を続けてこられ、その間、連続して北海道学生書道展の団体賞を受賞されるなど大きな功績を残されました。式場のロビーには子供たちからの感謝の言葉が掲示されていました。『山田先生の授業はとてもわかりやすくおもしろかったです。なのに、山田先生は亡くなってしまってとても悲しいです。生き返ってほしいくらいです。休み明けの与太郎話ものすごくおもしろかったです。天国でもぼくたちのことを忘れないでください。』・・など、多くのお礼の言葉が寄せられて、お参りの方々の涙を誘いました。本当に最期まで子供たちを愛した先生でした。



臨　祭姪文稿　　（絶筆）

昨年10月18日に書道グループの皆さんとお見舞いにお宅へ伺った時は話もできて、絶筆となった祭姪文稿の臨書作品を見せていただきましたが、筆力も気力もあり、書に対する執念にしばし言葉を失いました。その頃は体力も落ちておられたので、書くときは、奥様が紙をずらし、看護師のお嬢様が体を支えて書いたとうかがっております。制作に向けて魂を燃やしたことがわかります。

まだ、元気に歩ける頃の写真を拝見しましたが、家族旅行をされてご家族が肩を寄せ合い、にこやかにうつされた写真には、家族愛が溢れていました。帰り際、握手をしたあの温もりはいまだに忘れません。九溟先生長い間本当にありがとうございました。どうぞ安らかにお休み下さい。

（大泉　堅治・記）

山田九溟先生年譜

経　歴

昭和13年　４月18日　樺太・恵須取町にて誕生
昭和38年　北海道学芸大学旭川分校　卒業〔師・赤石蘭邦先生〕
平成25年　10月28日逝去　享年76歳

主な書歴

昭和56年　第22回北海道書道展　特選
昭和57年　第23回北海道書道展　特選
昭和58年　第24回北海道書道展　特選　〔会友推挙〕
平成６年　東川町文化ギャラリーにて個展
平成11年　NHKハートプラザギャラリー〔旭川〕にて個展
平成16年　第45回北海道書道展　準大賞　〔会員推挙〕
平成17年　まるめろの木〔東川町〕にて個展
平成22年　旭川中央図書館ミニギャラリーにて個展

役　職

毎日書道展	会員
創玄書道会	二科審査会員
北海道書道展	審査会員
旭川書道連盟	顧問
書創社	顧問
蘭風会	相談役
土筆の会	代表



安喰のり子先生を偲び

突然の訃報でした。

安喰先生と何度かご一緒した銀座で創玄現代展を観ての帰途、羽田に向かうモノレールの中で阿部和加子先生からお知らせをいただきました。受けとめきれず、何故に？と呆然と帰札した11月３日、文化の日でした。

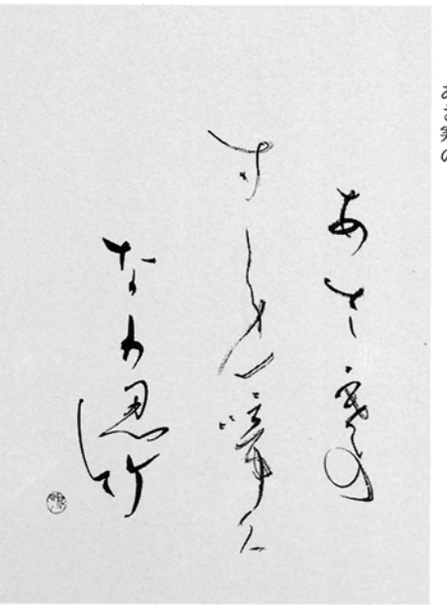
ほんのひと月前、毎日展北海道展が開催されました折、副実行委員長としての大役を立派にお勤めでいらっしゃいました。特に記念講演会の講師としてご来道の東京国立博物館副館長島谷弘幸先生をお迎えして夕食のお席を松本暎子先生が設けてくださいました時も、安喰先生の豊かな話題で盛り上がり楽しい会となりました。

常にさわらび会の副会長兼外務大臣として活躍くださる安喰先生ですが、一昨年の暮のご入院からとみにお痩せになられましたので私達は心配しておりました。が、この日もそんな気配もみせず最後まで和やかにとお気遣いくださいまして、ご満足そうに笑顔でお別れしたばかりでございました。

美しく、しなやかな先生、やさしいお声の電話が今にもくるような気がいたします。

安喰先生は松本春子先生のかな書道に強く憧れてさわらび会にご入門なさいましたのはお若く、二十代はじめと伺いました。私はある年、創玄展の受賞者として上野精養軒の晴れ舞台でご一緒に立ちましたことからご縁を深めることになりました。やがて私達は、さわらび会会長松本暎子先生の下で運営や節目節目の大きな行事に取り組んできました。安喰先生ならではの機知に富むご判断で諸事万端整えてくださるのもお見事ながら、そこまでの綱渡りもこれ又スリル満点!!悲喜交々の珍道中ではありましたものの同行者としての絆は深まるばかりでございました。

そんなある日、先生は50代半でしたでしょうか、慶応大学に入学されます。『万葉集』を学びたいとの意欲に燃えてのことだったと思います。卒論のテーマも「折口信夫の万葉論」にしたいと熱く語られましたのも覚えております。先生は額田王がお好きでした。ご主人さまとのロマンスを



あさ寒の…

色彩やかに織り重ねて多くのお作品を発表しておられました。常に注目の的でしたが、私が一番に心打たれましたのは昨年の北海道書道展出品のお作品でございます。

医師である御子息様に見護られての治療の日々、書作に没頭されましたことが偲ばれます。心血を注がれたそのお作品は、万葉歌人山上憶良の子を思う心情と安喰先生の想いとを重ね合せた深遠な世界が展開されています。安喰先生の全てを表現し得たお作であると思えてなりません。

しろがねもくがねも玉もなにせむに
まされる寶子にしかめやも

安喰先生が求めてこられた『万葉集』の真髄を教えてくださっているような気がいたします。

万葉の世界とかな書道の融合にと生きた安喰のり子先生のご冥福をお祈りし、御家族様につつしんでお悔みを申し上げます。数多の感謝と共に。

平成27年３月

（大川壽美子・記）

安喰のり子先生年譜

昭和14年	２月12日　札幌生まれ
	藤学園時代にかな書道に出会い、松本春子先生に師事
昭和56年	第22回北海道書道展特選第１席
昭和58年	第24回北海道書道展会友推挙
平成元年	第30回北海道書道展準大賞、会員推挙
平成18年	第47回北海道書道展運営委員審査部長
平成20年～22年	第49回～51回北海道書道展理事
平成26年	11月３日逝去

北海道書道展会員
毎日書道展審査会員
創玄書道会一科審査員
さわらび会常任理事
北海道書道連盟参与
紀の会代表



石井華賀子さんを偲んで

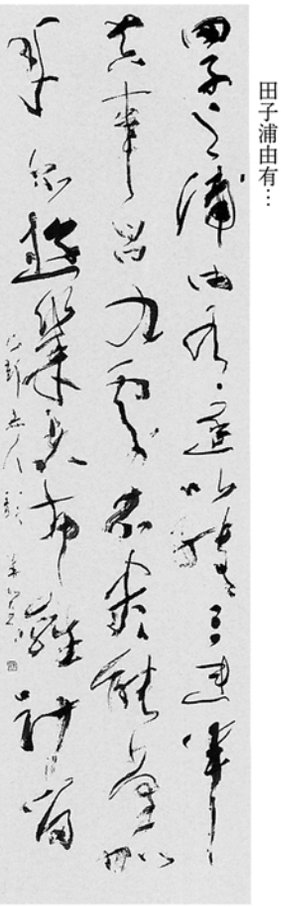
「創玄展・道展・連盟展と続いているのに先生、大丈夫？」　今電話をかけたら、こんな返事がかえってきそうな気がする。まだ別の世界に逝ってしまったような気がしない。

私が入院してすぐにお見舞いに来てくれた時、少し元気がないナァと感じた。「どうしたの？」と訊いたら「一寸胸が痛いので医者に行ってみたら、大きな病院で検査してもらいなさいと言われたの、近いうちに医者に行ってみるから」と返事があった。声にいつものハリがないと思った。私の気が滅入っていたせいかと思っていたが、それから半年足らずで入院、そして二ヶ月くらいであの世へ旅立ってしまった。お通夜に出席しても現実感がない。本来ならば私が葬儀委員長になるべきだったのに、息子さん達が「あまり大袈裟にしたくない、ほんの内輪だけの葬儀にしたい」と言われたので、それは実現しなかった。私も入院中、それにこんな状態では葬儀委員長としての挨拶もできなかったろう。

私の不備な状態を全て補ってくれていた彼女。数ある展覧会の事務・実務。これからどうする？と考えたら暗然たる思いになった。決断力と実行力のある人で、私の多くの足りない所を全て埋めてくれていた。

ある道展審査員が言っていた。「あの人は女性じゃないね。仕事の歯切れがよく、迷わずにテキパキとこなす。判断力も鋭い。」まさにその通りと思う。

書の方も歯切れがよい。私のネチネチした線と異なって紙と空気を切裂く様な線を創った。道展は七年で会友となり、第23回展（昭和57年）で準大賞を受け審査員となった。昭和62年には日展に入選した。彼女の書線が鋭利な刀で袈裟斬りしたような線になったのは会友になってからであり、最近はそれに温かみも加わって来たようだ。私に無いものを創造した。モーションが大きいのだろう。ともかくも私の弟子でありながら別の世界を創ったことになる。



田子浦由有…

これから更に彼女の書が落ち着きと渋い艶を創って行くはずだったのに・・・・・この世とオサラバしてしまった。残念でたまらない。

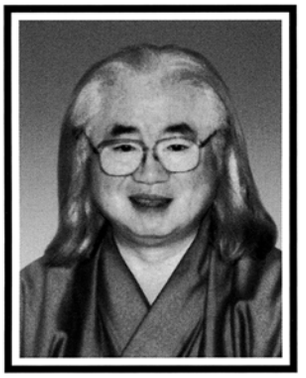
享年八十五歳。ご冥福を祈るより仕方あるまい。　合掌

（島田無響・記）

石井華賀子先生年譜

昭和５年　１月14日　大阪市に生まれる
昭和38年　島田無響先生に師事
昭和40年　第６回北海道書道展初出品
昭和47年　第13回北海道書道展会友推挙
昭和57年　第23回北海道書道展準大賞
昭和62年　第23回創玄書道展準大賞
昭和62年　第19回日展入選
昭和62年より毎日書道展会員（秀作賞５回）
平成22年　第39回北海道書道連盟功労賞
平成24年　第53回北海道書道展30年功労者賞
平成26年　７月９日逝去　享年85歳

北海道書道展会員
創玄書道展二科審査員
毎日書道展会員
UHB大学講師
書響社同人
華燿会主宰



島田無響先生を偲んで

ご指導は厳しさの中にも包容力にあふれ、生き字引のような先生でした

▶言葉少ないひと言が心に残り、刻まれています▶いつも温かく気長に、時にユーモアを交えた厳しいご指導に励まされてきました▶ご指導の後は意見交換会と称して先生のひと味加えたお話で書道談議に花を咲かせてくださるのがとても楽しみでした▶先生の懇切丁寧なご指導により何とかこの道の楽しさを会得でき、先生や同門の皆さんとの素敵な思い出が沢山できたのが私の生涯の宝物だと思います▶悩み、書き止まっていると「それでいい。その調子で思い切り書きなさい。」と言われ、どれ程心強く思ったことか▶その年代にしか出せない書の素晴らしさを子供たちに教えてくださいました▶自分の書を創り上げていくようにとのご指導方針。それは苦しみでもありましたが書の楽しみを何倍にもしていただきました▶「まず羽ばたいて動かさないと前へは進めない。」という教えを信じて取り組んでまいります▶新奇で実験的な作品を持ち込むと誰よりも強く一番に支持してくれた▶一時もじっとしている姿を見たことがない▶病が悪化。こんな中でも原稿や半紙の手本書き。強い人だった。日々創作活動に研鑽を積んでおられた先生のお姿が浮かんできました▶最後まで作品制作に意欲を持っていらした姿に深い感銘を受けました▶汗をポタ！ポタ！と紙面に落としながら疲れを知らないように次々と枚数をこなしていく先生。練成会での強い印象です▶先生の庶民感覚、又、知識人としての物の見方は、私の老後の人生にとって大切な教えとなりました▶つらい時は先生のそばにいると温かさに包まれました。

點の会誌第74号に会員から寄せられた先生を偲ぶ文の一部です。

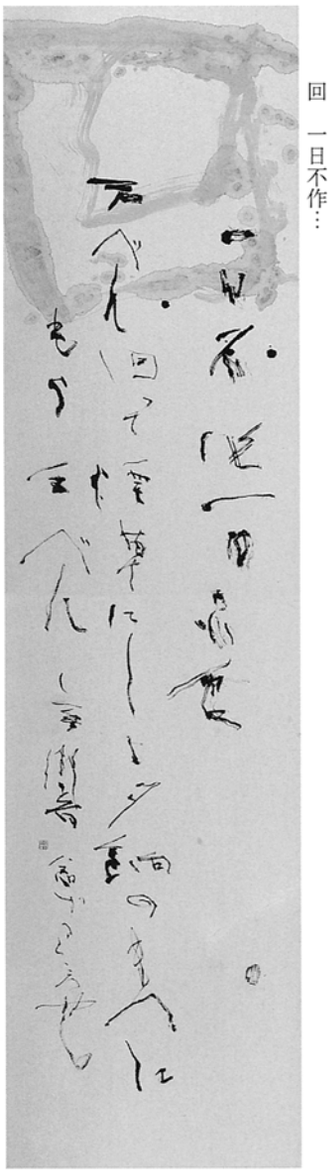
私と無響先生との出会いは40年程前になります。まだ学生だった私に幅広く学ぶことの大切さや自分の書を目指すことを強く進めてくださいました。先生は、私たちの書の師であり、人生の師でもありました。

最後に会員の寄稿文からもうひとつ……。
～あの張りのある声での「わっはっはっはっ」をもう一度聞きたいです。無響先生！空の上から「わっはっはっはっ」を響かせてください。～

会員みんなの思いです。

享年87歳。数多くの感謝とともに心よりご冥福をお祈りいたします。

（清兼　吼・記）

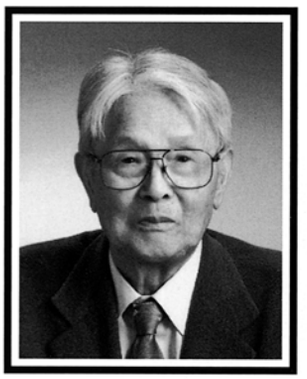


回　一日不作…

島田無響先生年譜

昭和３年　３月30日　千葉県生まれ
昭和26年　早稲田大学（旧制）政経学部卒業
昭和36年　第４回日展初入選
昭和41年　第７回北海道書道展準大賞　会員推挙
昭和45年　（改組）第２回日展入選以後平成２年まで連続入選・創玄書道展審査会員・點の会結成
昭和49年　毎日書道展審査会員
昭和52年　日展会友
昭和55年　カナダ・トロント市日本祭書道部門単独参加
昭和56年　「書響」発行
昭和63年　豊平川サケ公園モニュメント「カムバック・サーモン」揮毫
平成２年　第10回個展（札幌京王プラザホテル）･札幌市民芸術賞
平成10年　第11回個展（札幌京王プラザホテル・大丸藤井スカイホール）
平成19年　無響書展（ギャラリー大通美術館）
平成27年　４月３日逝去　享年87歳

北海道書道展招待会員
毎日書道展名誉会員
創玄書道会名誉会員
高風書道会理事長
書道研究「點の会」主宰
書道研究誌「書響」主宰



永田青雲先生を偲んで

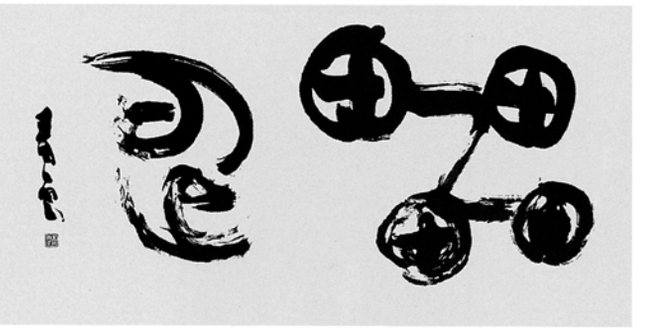
先生の米寿のお祝いの会をしようと、仲間と相談し始めた矢先、入院中とお聞きし、ただただご快復を願っておりました。教育大学100周年記念美術展には、ご出品とともに、車いすでご来場くださったとのことから、今度こそはと意気込んでいたところでありましたので、訃報には、寂しさと無念さしかありませんでした。

松前町生まれの先生は、苦労を重ね函館師範学校を卒業。中学校勤務を経て、本格的な書の研究・指導への夢を追い求め、学芸大学に編入学。その後、母校の教官となり、多くの学生の指導にあたられました。

書と初対面の学生たちに、「ふーっ。うんっ。」と唸り声をあげ、体ごと筆になり、紙に立ち向かう先生。書は気迫だと言わんばかりでした。臨書と格闘させ、筆力・技能の向上を図り、古典の品格を説き続ける姿はまさに「臨書の鬼」。「筆・紙・墨はいい。あとは腕だねえ。」と何気ない一言で、学生を発奮させることも度々・・・。また、学生たちをご自宅に招き、和やかに酒を囲み、書を語り合う一面もありました。今でも、「鵲会」と先生に命名いただいた会が、先生を慕う卒業生の手で開かれ、教え子たちの教壇・書壇での活躍を酒の肴に、楽しいひと時をお過ごしになっていました。

第９回北海道書道展で大賞を受賞した先生は、創玄展会長賞受賞作「暢達」をはじめとする雄渾な大字作品、松前藩家老の蠣崎波響の漢詩を素材にした繊細な作品、そして造詣の深い殷周の金文、秦漢の瓦当や篆刻による骨力のある作品を個展などで多数発表され、道南の書壇に一石を投じ、書家としての存在感を際立たせていました。退官後は、函館書藝社会長を務めるとともに、岡田静園先生とともに青甤社のご指導にも携わり、地域の書活動の活性化にも力を尽くされました。

また、「誰も手をつけていない、新しい仕事を残したい」との研究者としての思いから「道南における碑碣・墓銘の研究」にも着手されました。人知れず埋もれていく道南の歴史を掘り起し、次代に伝えるというスケールの大きなこの研究は昭和51年の採拓から始まりました。母校機関誌「人文論究」への掲載９回。採拓百基の集大成「道南の碑」を平成８年に刊行。見覚えのある拓本写真に、学生として手伝いをさせていただいた採拓作業が甦りました。深緑の中に佇む巨石、たんぽが刻む響き、浮かび上がる文字群。交代で臨みましたが、かなりの重労働。これまで先生お一人でされていたとは。採拓後、西埠頭で函館ドッグのゴライアスクレーンを眺め、先生からいただいたビールは格別でした。先生のこの研究の意義は、神山茂賞、そして函館市文化賞の受賞がすべてを物語っています。



雷神

手に持ったかばんを前後に揺らしながら、時折おなかをポンポンとたたかれしゃきしゃきと歩かれていた先生…。今頃は、杯を手に、数々の先人たちと碑文の解釈や書法について熱く語り合っているのではないでしょうか。教え子として、何もできないままのお別れとなってしまい、後悔ばかりですが、先生と出会ったころを今一度思い出し、あらためて踏み出したいと思っております。先生、ありがとうございました。ごゆっくりお休みください。

（葛西青龍・記）

永田青雲先生年譜

昭和２年５月10日　松前で生まれる
昭和17年　吉岡国民学校卒業と同時に函館師範学校予科１年に入学
昭和23年　北海道第二師範学校を卒業（校名変更）
昭和43年　第９回北海道書道展にて大賞を受ける
昭和47年　北海道教育大学函館分校に勤務
昭和51年　助教授となる
昭和54年　15回記念創玄展で会長賞を受ける
昭和56年　教授となる
昭和58年　附属小学校校長を併任される（平成元年までの６年間）
昭和59年　第35回毎日書道展審査会員推挙
平成３年　函館分校を退官
平成８年　約100基の拓本を「道南の碑」として刊行。神山茂賞受賞
平成９年　神山茂賞受賞を記念し、テーオー小笠原において「道南の碑　拓本展」を開催する
平成11年　第１回の個展を丸井今井百貨店５階で開催する　函館市文化賞受賞
平成27年　９月７日逝去　享年88歳



廣瀬香雲先生を偲んで

私は廣瀬先生と出合ったのは、昭和46年、故岩井鶴泉先生のご自宅だった。当時、浦河高校に勤務しており、概ね２ヶ月に一度札幌に歩を運んでいた。

廣瀬さん（この稿に臨むと往事を彷彿させてくれるので以降「さん」呼ばせてください）とはよく苗穂の薄暗い居酒屋で熱燗を酌み交わしたことを思い出す。物腰の柔らかい廣瀬さん。温厚で口数の少ない人に映るも、内に秘めた惻隠の情が迸る人であった。「あんた、いいか、こういう生き方もあるんだよ」私はこの一言を何度聞いたことか。熱燗を酌み交わすほどにギューッと腹にしみ込む。廣瀬さん、こうして稿を埋めていくと岩井先生のことも脳裡をかすめます。先生が逝き、しばしたって私に言いましたね「あんた、青魚会の行く末をどう考えているんだ」と。「これはあんた自身の生き方に応えるときでもあるなあ」とも言ったね。今、私はこうして齢を重ねてみるに、「あんた、いいか・・・」の応えにやっと辿り着いたような気がする。

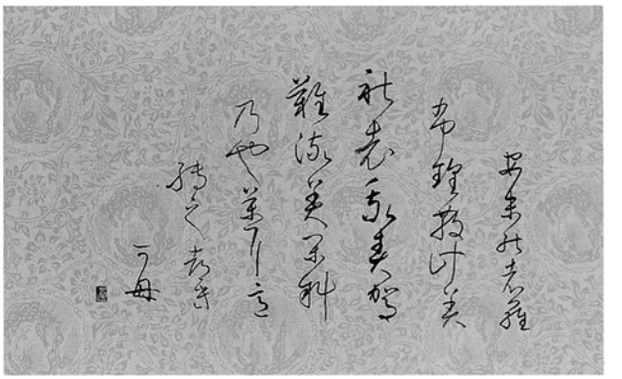
廣瀬さんとは書を通して絆を深めたというより、廣瀬という先達者の人生訓が私をして離さなかった人のように思える。

廣瀬さんは、昭和43年、岩井鶴泉が興した青魚会に入会している。そのころ先生は、北海道にかな書道を広めたいという熱い思いを抱き、当時、正筆会の重鎮だった西谷卯木先生の思い入れのもと、札幌で、第１回正筆会北海道地区講習会を開催し、以後鶴泉先生没の昭和61年まで師のサポートとして奔走してきた。

関西のかなの息吹きを北海道に。昭和53年、正筆会菁華書作展開催、これにいたる準備を師の懐刀として、黒子として汗を流した廣瀬さん、ご苦労さまでした。ありがとうございます。

エピソードをひとつ。

この書作展開催のイベントに、古筆学者、春名好重（国士舘大学教授）先生をお招きして講演を、そして宴の席上、春名先生は廣瀬さんに「ご苦労さま」と一言おっしゃったことを私は覚えてます。



天の原…

時を戻せるなら、もう一度あの薄暗い苗穂の居酒屋にお誘いして一献かたむけたいものです。そして別れにあの七言絶句、王維の「元二の安西に使ひするを送る」を吟じたいと思います。

（八巻水鷗・記）

廣瀬香雲先生年譜

昭和２年　７月５日　上湧別に生まれる
昭和18年　富樫三味先生に師事
昭和24年　町谷鶴斎先生に師事
昭和42年　岩井鶴泉先生に師事
昭和43年　青魚会入会
昭和45年　北海道書道連盟入会
平成３年　第32回北海道書道展準大賞・会員推挙
平成27年　10月10日逝去　享年88歳

北海道書道展招待会員
景象展招待作家
香墨会代表



宇野渓雪先生を偲んで

書道一家の長男として生を受け、静山無き後の大黒柱で、これから活躍して頂こうと云う先生の訃報に接し、一瞬頭の中が真白になった。

会議等では、いつも控目での発言であるが、それが実に的を射ているのである。

1960年頃から開眼したか、数々の賞を受賞、あれよアレヨと言う間に各展の公募は卒業した。

発表される書は、精練にして濁りなく、清流を思わせ、高い山に登って雲海を見降ろす感があり、清々しい想いを懐いた。

これは自分の書に対し常に真摯に向きあっている証左であって、温厚篤実な人の在り方である。

これから、真にこれから一花も二花も、咲き誇ると云うことが、充分に予測された逸材と言える人だった。

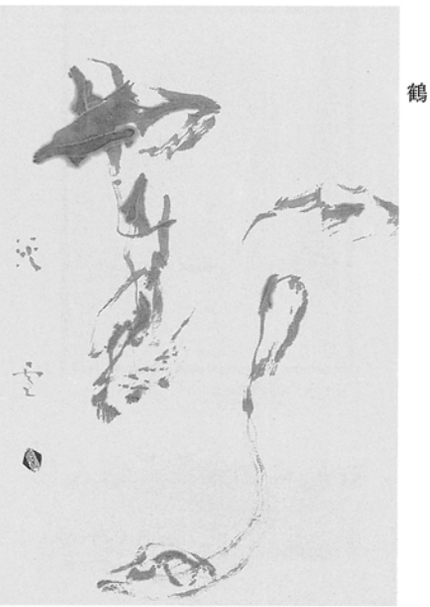
飲んでクリッとした目で笑っている。そんな顔が思い出される。

それなのに病と闘っていたなんて、思いもよらず。又良い人が一人、彼我の地へと旅立ってしまった。

静山先生から　お前は未だ来るのは早い。と叱られるだろうに。

あゝ…　寥しくなるなァ。　合掌

（北川稲谷・記）



鶴

宇野渓雪先生年譜

昭和11年　６月23日　小樽市に生まれる
昭和36年　北海道教育大学函館分校　卒業（師　太田鶴堂先生）
昭和39年　第５回北海道書道展　特選
昭和40年　第８回日展　入選
昭和41年　第７回北海道書道展　特選委嘱推挙
昭和44年　第５回創玄書道会二科審査員
昭和46年　第12回北海道書道展準大賞　会員推挙
平成14年　宇野渓雪　書展　大丸藤井セントラル　スカイホール
平成27年　８月１日逝去　享年79歳

北海道書道展会員
北海道書道連盟参与
国際現代書道展理事
臥龍社　社主代行（平成９年～）
臥龍社　社主（平成22年～）
碩水会（旧渓臨会）主宰
創玄書道会二科審査員



寺島瑤林先生を偲んで

寺島先生から“「書響」送ってくれてありがとう”との電話の声が、昨年の春ごろから聴き取りにくくなっていました。寺島先生は４・５年ほど前から体調を崩し、幾つかの病院に通いながら自宅で療養を続けておられましたが、とうとう昨年６月22日、帰らぬ人となってしまいました。79歳の生涯でした。

寺島先生は書道は勿論ですが、他にも多くの趣味を持っておられて、華やかな社交ダンスや、カラオケ等も上手で、書響社の新年会や、點の会の親睦旅行で良く披露して下さいました。

寺島先生が島田無響先生に師事して書を始められたのは30代後半のようです。まもなく北海道書道展に出品するようになり、第19回展から第22回展まで連続４回秀作。第23回展、第24回展と特選で、アッという間に会友に昇格されました。

寺島先生は純粋な性格で、優しい表面の奥に強い意志を秘めておられ、平成７年、60歳の時に初個展をコンチネンタルギャラリーで開催されました。大作「沙羅双樹」や「淑気」を含め多彩な32点の力作を発表し、私達会友仲間を驚かせた素晴らしい個展でした。それからも第34回創玄書道展では特選を受賞されたり、北海道書道連盟展や、西区文化フェスタ、湖の会展にも勢力的に作品を発表されました。その間、毎月の「書響」にも、さりげない運筆でしっかり紙を捉えた強靭な線、しかもそれが温かく寺島先生独自の書で、無響先生からは常に好評を得ておられました。そしてついに第50回北海道書道展で、見事「準大賞」に輝き、会員に昇格されました。その時無響先生は「君の線の良さが今まで解ってもらえなかったが、今回は、より高い落筆と、そこから生まれた造形が相俟って、線・造形ともに高度な所で融け合っている。空間処理も筆の立体的運動が作用して厚い振幅を見せた。」と受賞作を讃えています。

寺島先生が病に侵されたのは、会員になられてまもなくでした。これから益々ご活躍が期待される時に旅立たれてしまい、本人もどんなにか無念だったことでしょう。どうぞそちらでも寺島先生にしか書けない温かい、そして深い線で思う存分書いて下さい。

寺島先生を偲び、心からご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

平成28年３月

（杉山透雪・記）



瑤樹生輝……

寺島瑤林先生年譜

昭和10年　７月24日　札幌に生まれる
昭和47年　島田無響先生に師事
昭和53年　第19回北海道書道展　秀作
昭和54年　第20回北海道書道展　秀作
昭和55年　第21回北海道書道展　秀作
昭和56年　第22回北海道書道展　秀作
昭和57年　第23回北海道書道展　特選
昭和58年　第24回北海道書道展　特選（会友推挙）
平成７年　初個展　コンチネンタルギャラリー
平成10年　第34回創玄書道展　第１科　特選
平成21年　第50回北海道書道展　準大賞（会員推挙）
平成27年　６月22日　逝去　享年79歳

北海道書道展会員
書響社同人
瑤林会主宰



山田汎暁先生を偲んで

山田汎暁さんは、昨年11月16日、惜しまれて82年の生涯を閉じた。

遺言により書創社の親交を深くしていた者が中心となり、同月18・19日葬儀を執り行なった。道内外の多数の書家から、弔意を届けていただき、関係者の一人として心から御礼を申し上げたい。

汎暁さんは留萌出身で、戦後のことでもあるが、小さな時から父親の炭焼きを手伝い、友達と遊ぶ時間が無かったと聞かされていた。高校卒業後、私鉄の鉄道マンとして勤めていたが、高校時代の下村先生の書道の授業が忘れられず、昭和27年学芸大学旭川校に入学、赤石蘭邦先生の指導を受ける。

卒業後は、留萌管内小平小学校に勤務後、旭川市立朝日小学校に転勤となった。昭和39年赤石蘭邦先生を代表に書創社を結成し参加した。以来52年間、会の運営の中核となり活躍した。豪放磊落でしかも繊細な人柄は、会員の支えとなり慕われていた。

汎暁さんの代表作、第22回毎日書道展毎日賞「昏々と眠る黄金の鷲」は、金子鷗亭先生から「歴代の受賞作の白眉」と絶賛された。

この作の制作に当たってのエピソードがある。定山渓で日展の錬成会があった夜。金子鷗亭先生、大平山濤先生、東地澅涯先生と麻雀をして、一人勝ちになった。その折、金子鷗亭先生から「毎日展の作品頑張れ。」と激励を受けた。6×6を250点程書き上げ、見事、毎日賞受賞となった。当時私は、この熱意に衝撃を受けたことを思い出す。

脳梗塞、癌、パーキンソン病の三重苦に悩まされて十数年、更なる精力的な書活動の展開に目を見張るものがあった。一日の薬の摂取量は、手の掌に山盛りになる程であった。将に食事の如くであった。

障害が進んで言葉が不自由になってから、メールで意志疎通を図ってきた。ある日から返事が届か無くなり奥様に電話したところ、入院しているとのこと。「皆さんに会うと、興奮して眠れなくなるので、見舞いは遠慮して欲しい。」との奥様の言葉を受け、いたたまれない心情を持ち続けていた。



山百合の…

数日後、本人が会いたいと言っているとの連絡を受け、病院にかけ付けた。病室に入ると細い両手を差し出し、私の手を力強く握り締め「ありがとう。もう俺だめだ。」と、はっきりとした口調で伝わってきた。咄嗟に慰めの言葉をかけもしたが、汎暁さんとの最後の会話となった。人間は、最期を予知できるものだろうか。それから十日程経って亡くなった。

この時の所作、言葉、表情は、私の身体から離れない。

「ありがとう。汎暁さん。」

（石崎閑雲・記）

山田汎暁先生年譜

山田汎暁　本名：弘道　昭和７年生まれ
昭和29年　北海道学芸大学旭川分校において書道を専攻
　赤石蘭邦先生に師事
昭和45年　毎日書道展毎日賞
昭和46年　ジャパン・アート・フェスティバルに出品
　ニューヨーク、フィラデルフィアを巡回・同時訪米
昭和46年　創玄書道展推薦
昭和47年　第１回個展
昭和52年　第２回個展
昭和57年　北海道書道展準大賞
昭和57年　第３回個展
平成12年　毎日書道展会員賞
平成27年　11月16日逝去　享年82歳

毎日書道展審査会員
（公社）創玄書道会一科審査員
日本詩文書作家協会評議員
北海道書道展会員
北海道書道連盟常任理事
旭川書道連盟顧問
書創社（旭川）副会長
蘆（あし）の会顧問
北灯会主宰



佐藤　満先生を悼んで

北海道書道連盟顧問、元北海道書道展理事長の佐藤満先生が平成28年８月11日享年90歳で生涯を閉じられた。11年前、軽い脳梗塞が発症し、その後は療養を専らにして、好きな読書をするなど、快方に向かっていると聞いていただけに、諸行無常、会者定離を禁じ得ない。先生の書業を讃え、ご冥福を祈りたいと思う。

先生は昭和２年旭川生まれ小樽で育ち、小樽経専（現小樽商大）時代に鈴木翠軒（芸術院会員）に入門を許され、和漢古今の名蹟を研究、認められて子の日会会員、千紫会常任理事などを務め、桑林会創設主宰など翠軒流とはいえ新たな作風を樹立し、若手書人の育成にも努めた。

書作は、淡墨で軽妙洒脱、天女の舞うが如く抒情美溢れる澄んだ筆致、ロマン的な書品で、平成９年全道書道展で文部大臣奨励賞、10年には北海道文化賞を受賞された。

道書壇に置いても大きな功績を残された。流派の垣根を超えた親和と連携に心を配り、北海道書道連盟と北海道書道展の発展に貢献された。例えば、昭和57年の連盟常任委員長時代に「慶弔に関する内規」を制定。平成５年から新体制の理事長に就任し、７年には連盟初の創立40周年記念祝賀会や功労者表彰を実施。道展創立満35周年と連携して220名なる大訪中団を率い成功させた。９年には連盟会報百号を記念して「復刻版」を刊行した。

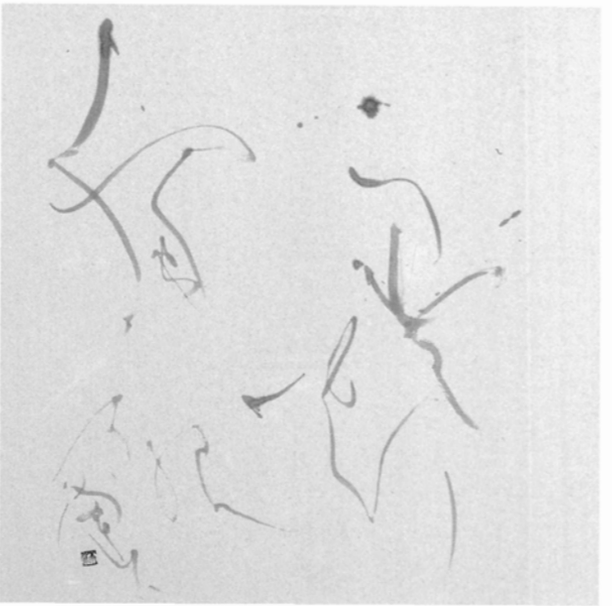
道展では第24回運営委員長として10都市に亘る移動展を成功させ、13年から理事長として道展の拡充発展に貢献された。

また、大の読書・収集・旅行家で、平成９年から３年間、毎日新聞のコラム「書のひととき」を担当、文房四宝から東洋文化、思想など広い見地で執筆された。

ただ、先生は若くして最愛の奥様を亡くされ独身を貫かれたが、千代田電装株式会社代表取締役を退職するや中央仏教学院にて僧籍を得たという。それは奥様への供養でもあったかと憶測する。その人知れずの心境で50数回に亘り中国を訪れ、釈迦か三蔵法師の心境で前人未踏的な奥地まで旅し、たとえそこで死んだとしてもそれが本望だと話されていたことが、お人柄とともに今も心に残っている。

ここに謹んで先生のご冥福をお祈りいたします。

（本間孤峯正啓・記）



寒灯独親

佐藤満先生年譜

昭和２年４月10日、旭川で生まれる
昭和20年　庁立小樽中学（現小樽潮陵高校）卒
昭和21年　鈴木翠軒に入門、本格的に書を学習する
昭和24年　小樽経済専門学校（現小樽商大）卒
昭和39年　日展初出品初入選、以後11回出品、会友
昭和42年　翠軒門下の北雲会展を開催、代表
昭和44年　桑林会創設　主宰
昭和45年　北海道書道展特別委嘱出品
　　鈴木翠軒主催千紫万紅展、翠軒賞受賞
昭和46年　千紫会常任理事、道展会員に特別推挙
昭和56年　竹村亭舟らと北心展、以後20回開催
昭和57年　北海道書道連盟常任委員長
昭和58年　第24回北海道書道展運営委員長
昭和63年　中央仏教学院卒
平成５～11年　北海道書道連盟理事長、３期６年
平成８年　札幌大丸藤井セントラルで個展開催
平成９年　第28回全道書道展、文部大臣奨励賞受賞
平成10年　北海道文化賞受賞
平成11年　中国遼寧省美術館で個展開催
平成13～15年　北海道書道展理事長
平成28年８月11日逝去　享年90歳

北海道書道展招待会員
北海道書道連盟顧問
国際現代書道展顧問
桑林会主宰





青鬼が目を…

本間敬三先生を偲んで

昨年９月２日ご逝去、享年95歳。

本間先生の息子さんから突然の訃報がありました。先生はここ数年何回か電話で「脚が弱くなり札幌に出かけると家族が心配するので、会合は失礼します。」でもその時の声はお元気そうなので安心していました。

亡くなる三日前には教室で書道を指導し夜はテレビを見て就寝、翌朝突然胸が苦しくなり家族と共に病院へ。更に転院して次の朝早く帰らぬ人となりました。家族はもちろん、私達天彗社友も呆然とするばかりです。

先生は後志管内神恵内村のお生れで、旭川商業高等学校を卒業し、旭川市役所に勤務されたと伺っています。やがて本人の夢である喫茶店「カサブランカ」を経営しました。昭和30年代に書家でもあった父親が亡くなり、父の書を継続することに決め、当時中野北溟先生が毎日書道展で大賞を受賞された「富士山」に憧れて、指導を仰ぎました。

昭和42年、中野北溟先生を代表として「天彗社」が結成され、創立会員として参加し、研究会や練成会にも積極的に参加されました。書風は日本海の荒波を思わせる豪快な筆運びで、道展の連続特選や、創玄展の創玄書道会賞、毎日展の毎日賞など躍進が続き、更に日展には透明感のある作品で６回の入選を重ねました。

そして道展、創玄展、毎日展の審査会員として活躍され、旭川を中心にお弟子さんを育てました。その間、旭川書道連盟の理事長を歴任し、旭川市文化奨励賞、北海道書道展功労賞、旭川市文化賞など受賞されました。

後年は、奥様の体調を気遣い、自身も持病のため道展以外の活動を休止しました。天彗社は今秋、北海道立近代美術館で50周年記念展を開催予定です。本間先生の雄渾な新作が見られないのが誠に残念でなりません。

先生のご冥福を衷心よりお祈り申し上げます。

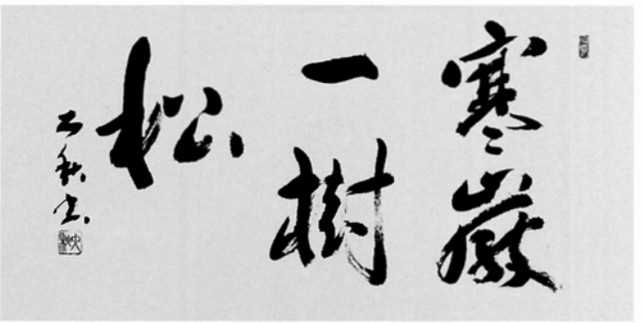
（加藤幸道・記）

本間敬三先生年譜

大正11年２月４日　後志管内神恵内村に生まれる
昭和42年　北海道書道展　特選（以降２回）
昭和44年　毎日書道展　毎日賞
昭和45年　創玄展　創玄書道会賞
昭和46年　北海道書道展　準大賞
昭和46年　日展　入選（以降５回）

毎日書道展審査会員（平成９年～平成16年）
創玄書道会一科審査員（平成９年～平成16年）
北海道書道展会員
北海道書道連盟会員
旭川書道連盟理事長（昭和47.４～昭和48.５）
旭川書道連盟顧問
天彗社参事・運営委員





寒巌一樹松

立野大秋先生を偲んで

私は、立野大秋先生が主催する「滬墨会」の一員で、道新文化センター「漢字書道」教室にて教えを受けておりました。昨年の先生の急逝の報に接しまして、大変驚き、深い悲しみにとらわれました。その２年前のご入院の時は退院がかなって教室にも復帰なさって下さり、大変嬉しく思っておりましたのですが、今回はそれがかなわず、大変残念な思いです。

先生の教室での書の指導では、書への毅然とした真摯な姿勢を保ちながら、私達には優しく励ますように接して下さり、個々の作品に丁寧に批評を加えて下さっていました。先生は「書は線の質が大切で、良い線質の字は光って見える」とよくおっしゃっておられました。私たちは一歩でもその域に近づきたいと願いながら精進してまいりました。

先生主宰の滬墨会による書展が、毎年旭川市の文化会館にて開催され、昨年で32回を数えました。平成13年には「旭川ななかまど文化賞」を受賞されております。一民間人が主催する書展としては、旭川でも最大級のもので、先生の作品とともに50名近い会員の作品が会場いっぱいに展示されるのは壮観で、先生も毎年楽しみになさっておいでした。

また、先生は「全日本書芸文化院」や「書宗院」に役員として早くから関わり、臨書を中心とした古典探究による造形と線質の追及を行ってこられ、独自の書のスタイルを確立してまいりました。「すべての書体を裏打ちに、筆致の力強さのみならず対極にある繊細さ、優美さをも表現できなくてはならない」とおっしゃっておられました。師と仰いでいらっしゃった故桑原翠邦先生との親交のことも大切になさっておられました。

さらに、先生は「北海道書道展」の会員でもございましたし、北海道と旭川の「書道連盟」、札幌の「書究院」の役員としても活躍され、旭川東高校やいくつかの小・中学校の校歌も書かれておられます。

こうした多くの功績を残された先生を失ったことは、私達にとって大変大きな悲しみでありますが、これまでの先生のご指導に深く感謝を申し上げつつ、先生のご冥福を衷心よりお祈り申し上げます。

（裏野北峰・記）

立野大秋先生年譜

昭和５年２月23日
昭和48年　書宗院無鑑査院友
昭和54年　全書芸展準大賞
　　全書芸展審査役員
昭和55年　北方書展賞
昭和57年　北海道書道展会友
昭和58年　第一回立野大秋書展
昭和59年　全日本書芸文化院常任理事
昭和59年　書宗院理事
昭和59年　書究院展大賞・書究院展審査員推挙
昭和59年　第一回滬墨会書展
平成３～６年　旭川書道連盟理事長
平成５年～　北海道書道連盟理事
平成６年～　旭川書道連盟相談役
平成11年　北海道書道展会員
平成13年　旭川ななかまど文化賞受賞

　　書宗院参与理事
　　北海道書道連盟参与



藤根凱風先生を偲んで

藤根凱風先生は、平成29年２月27日午後０時30分、奥様、お二人の愛娘と私の４人が見守る中、一滴の涙と共に静かに眠るように彼の岸へと旅立たれました。余りにも突然のことに、ただ見守ることしか出来ませんでした。

行年83歳のご生涯でした。

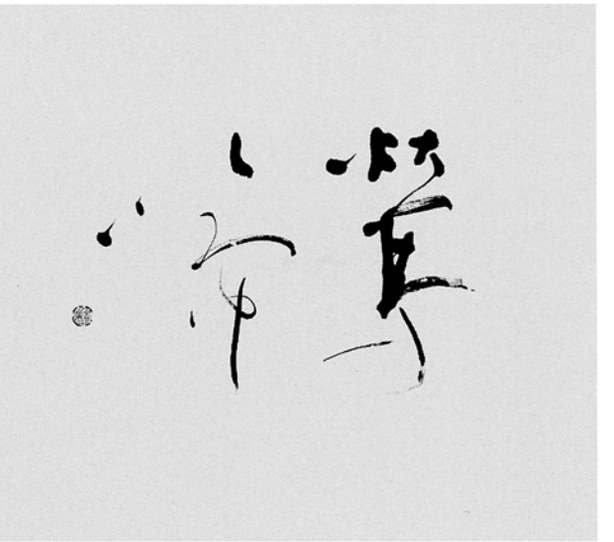
戒名　慈光院信空凱風龍雲居士

凱風先生との出会いは、昭和36年４月私が大学入学間もなくの頃、青沼先生のお声かけによる書道研究室でのことでした。先生27歳、その清新な若さに驚き、更には、「これから書道研究室をしっかり作っていこう」と語り掛けてくださったことにも驚きに似た感銘を受けた出会いでした。以後この時の気持ちのまま、先生の旅立ちを見守るその時まで、私の凱風先生への心は一刻も離れることなく続いたことになります。

また、入学間もなく、ご尊父星洲先生の夕張市での初個展に凱風先生の依頼で一週間星洲先生とご一緒する機会がありました。同じ部屋に床を並べ、書の語らいがありました。目覚めた時、窓辺の机に向かい書作する後ろ姿に感動を覚え、その後ろ姿がずっと印象深く残っていました。その後、平成20年刊行の「書□藤根凱風」の後書き冒頭に、「端然として机に向かい、筆を執っている父の姿があった。子ども心にも何か不思議な厳しさを感じたものである。」とあるのを読んだ時、凱風先生も同じような思いで星洲先生の姿をご覧になっていたことを知り、ここに先生の書の原点があると思い至りました。

またある時、「先生は書の天才では…」と語り掛けた私に、先生は言下に否定されたということがありました。後に、一途な古典の研究、創作への執念にも似た簡略化や抽象化、そして空間の輝きとが一体化していく書作の姿勢を知ることとなりました。そこには〝黒い墨で白を書く〟自ら書き残された言葉がありました。

北海道書道展において第39回展理事長の折、記念すべき40回展に向け漢字少字数部門創設に先生はご尽力されました。そして今日に至っていることは特筆すべきことであり、北海道の書の今を牽引された書家であったという査証の一端ではと思います。書人として、指導者として、また教育者としても魅力溢れる人でした。人との接し方や指導に、共に歩んでいきたいと強く思ったものです。



鶯啼

大学専攻生に対しては、卒業後も一人の書を志す人として向き合い続けました。先生はこれまで一体どれ程の人の作品を見、指導を続けてこられたのでしょう。

書を愛し、人を愛し、ご家族そしてお孫さんを愛し、更には人から広く敬愛と尊敬を受け続けた稀有な存在であったことに、今改めて感じ入っています。

人が好きで、少し寂しがり屋でもあった先生の柩には、楽しかった思い出を共有する人たちとの写真が沢山納められ、溢れんばかりの花々に包まれ旅立って行かれたご尊顔は忘れることができません。55年余りに及ぶご親交いただいた日々に心から感謝を捧げ、お別れしたいと思います。

今回展の作品「鶯啼」は、自ら雅印を押され出品を決められたとのことです。回復を信じていらしたのではないでしょうか。愛するご家族は勿論のこと、何方にも最期までお別れの言葉や思いを残されてはいなかったとお聞きしました。この春の訪れを待ち望んでいらしたであろう先生の思いを胸に、遺作となった作品を皆様と賞翫したいと思います。

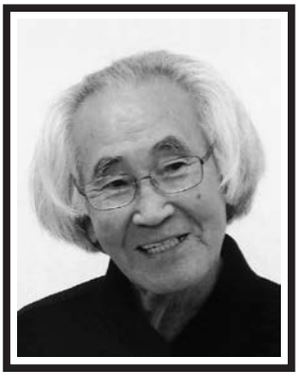
心からのご冥福をお祈りいたします。合掌

（羽毛蒼洲・記）

藤根凱風先生年譜

昭和８年11月１日　夕張市に生まれる
昭和45年　北海道書道展大賞・会員に推挙される
　　書道研究「清池会」設立
昭和53年　北海道教育大学教授
昭和59年～平成３年
　　北海道書道教育連盟会長
平成４年　札幌市民芸術賞受賞
平成10年　北海道書道展理事長
平成11年　北海道教育大学退官・名誉教授
平成19年　北海道書道連盟理事長
平成20年　北海道文化賞受賞・第４回個展

北海道教育大学名誉教授
北海道書道展会員
北海道書道連盟顧問
北日本書道学会代表
書道研究「清池会」代表





淵

馬場怜先生を偲んで

秋も深まり、そろそろニカワでの作品制作が出来そうだと思い始めた昨年10月末、恩師馬場怜先生が彼岸へと旅立たれました。本当の書を求め続けた92年の生涯でした。

私が先生と初めてお会いしたのは、旭川の永山での墨象の夏季合宿でした。そこで偶然同じ班になり、指導していただいたのが縁で先生の立ち上げた「北方墨人会」に入会し、長きにわたって指導を受けました。

先生は私にもそうですが、他人に厳しく、それ以上に自身に最も厳しい人でした。常々「創作は臨書なくしては成立しない」と同志に言い聞かせ、それを晩年までひたすら実践していたのが他ならぬ馬場先生本人でした。

その日々の鍛錬は、一昨年に開催された最後の個展でも余すところなく発揮されていました。通り側の窓の近くには日々書いてきた半紙での臨書作品が丁寧にファイリングされ、会場内にはその鍛錬を見せつけるかの如く、所狭しと最新作が展示されていました。

馬場先生の創作というものはまさに「深淵」というもので、見るものをその世界に引き摺り込む、ある種魔性のようなものを秘めていました。それは最晩年においても変わることはありませんでした。

そうした先生の本当の書を求めるひたむきな姿を語る上で、最も大きな出来事は書道芸術院審査員を辞して、墨人公募展に応募したことだと思います。先生が作品集を作るにあたって書かれた文章の中でも当時の先生の前衛書に対する苦悩は痛いほど伝わりました。それでも先生は審査員という地位よりも自分が求める本当の書の道を選んだのでした。

本当の書を求める姿は多くの同志を巻き込み、「北海道墨象会」や「北方墨人会」といった現在の北海道書道展第５部に必要不可欠な仲間たちを数多く生み出しました。

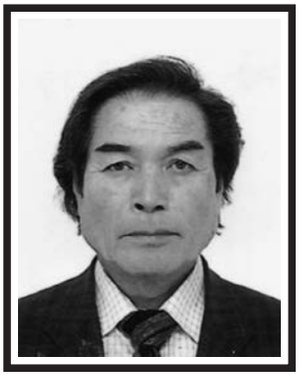
北海道に墨象の文化を、本当に書を、と貫き通した先生の意志は私に、そして未来ある若者たちに伝わっていると感じています。最後にお会いしたのは、ちょうど私が社中での展覧会をやり終えたときでした。十代、二十代の若者たちの作品の写真を嬉しそうに、そして真剣に見つめ「いいね」と言ってくださいました。

その若者たちとともに先生の意志を確かに受け継いでいきたいと思います。ここに謹んで先生のご冥福をお祈りいたします。

（山崎光雲・記）

馬場怜先生年譜

1925年10月５日　北海道岩内町（旧島野村）に生まれる
1945年　後志管内の小学校に勤務。以後86年の退職まで小学校の校長を歴任
1947年　宮城野書人会加藤翠柳に師事
1948年　加藤翠柳の勧めにより、平原社大澤雅休に師事
1950年　第３回書道芸術院展に入選。第７回展にて理事審査員となる
1957年　毎日前衛書展委嘱作家として出品。66年の墨人公募展出品まで続く
1960年　第１回個展開催（札幌）。以後、銀座等にて2016年まで複数回の個展を開催する
　第１回北海道書道展に委嘱作家として出品。審査会員推挙
　塩田慥洲、佐藤大朴氏と「北海道墨象会」を立ち上げる
1966年　書道芸術院理事審査員を辞任。墨人公募展に出品し、墨人賞受賞
1967年　第１回日本現代書展に出品。東京タイムズ賞、墨人賞を受賞し墨人会会員に推挙
1969年　第３回日本現代書展にて準大賞受賞。日本現代書展会員推挙
1970年　「北方墨人会」を立ち上げる。2002年に退くまで代表を務める
1979年　紺綬褒章授与
1987年　旭川墨人・北方墨人の同志らで北海道墨人展を立ち上げる
1999年　余市町教育文化貢献章受章
2000年　北海道文化賞受賞
2001年　余市町功労章受章
2002年　勲５等双光旭日章授与
2003年　余市町文化協会文化賞受賞
2017年10月25日逝去　享年92歳



片倉大成先生を偲んで

平成29年３月30日ご逝去。享年69歳。

片倉先生は前年の暮れから急性肺炎で入退院を繰り返していて、かなりやつれてはいましたが、３月10日に見舞った時に、「元気になってまた書道で頑張ろう」と握手して別れたのです。しっかりと力強く握ってくださったので、きっと回復出来ると感じたのですが先生のお兄さんからの訃報に愕然、あれが最期の握手になろうとは。

先生は昭和23年、月形町に生まれ、月形高校を卒業後、大東文化大学文学部中国文学科（書道専攻）へ、卒業後は帰郷して書家の道へまっしぐら。その経緯については、先生の第２回個展の図録のご挨拶で次のように述べています。「小学４年から筆を持ち続け、高校３年で書家になる決意をし、大東文化大学に進学。国内第一線で活躍する諸先生から教えを受け、全国から書道を学ぼうと集った同志に圧倒され、触発もされた。書家になるために来たんだと、自己を励まし、書友にも恵まれて頑張りました。卒業後、帰道してすぐに教室を開設し、書家としてスタートしました。

私の１回目の個展は26歳の時に岩見沢ダイマル画廊にて開催しました。その時に、いつか必ず札幌の大丸藤井セントラルで開催すると心に決めました。それから30年経て念願叶い、この度２回目の個展開催となりました。

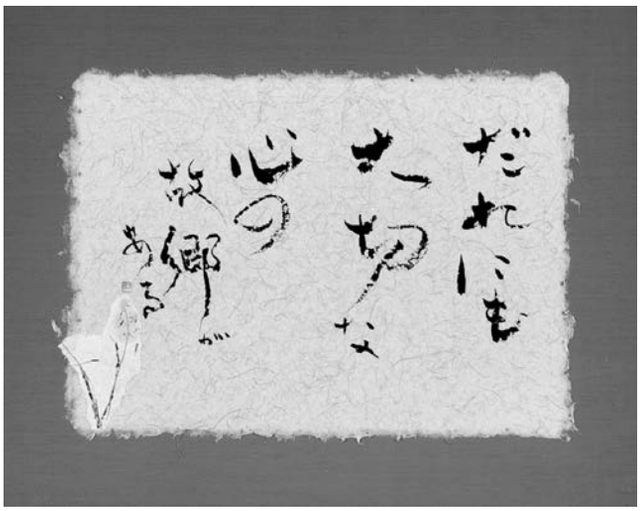
昭和55年に小原道城先生に出会い、今日まで師事し、ご指導を頂いています。先生との出会いが、私の書道人生を築き、今日まで歩んでこれた大きな要因です。…以下略」この個展は片倉先生しか表現出来ないユニークな書展で好評でした。

先生は昭和55年に小原道城先生主宰の「心華社」に入会。研修会や錬成会に積極的に参加され、明朗闊達で心優しく、誠実で、仲間にも慕われ、長年事務局次長として活躍。

先生の書風は鋒の弾力を利かした豪快な筆運びで、道展では連続特選や準大賞を、全道書道展（国際現代書道展）では大賞を、毎日書道展でも秀作賞を重ねて会員へと、書家としての実力を身につけ、岩見沢、月形、美唄で子弟を育て「大成会」を主宰。教育者としても月形高校、美唄高校、国際情報高校、北海道文理科短期大学・非常勤講師、日本書道大学通信講座・助教授などの講師を務め、コープさっぽろ文化教室やシルバー人材センターで児童・生徒・一般の育成指導など書道ひとすじの道を懸命に歩んでこられて、書家として大成を期待されていただけに、先生を失ったことは本当に残念であります。

ここに謹んで先生のご冥福をお祈りいたします。

（新谷谿雪・記）



だれにも大切な心の故郷がある

片倉大成先生年譜

1948年４月23日　月形町に生まれる
1971年　大東文化大学中国文学科卒業
　　書道研究「大成会」主宰
1974年　第１回個展　岩見沢ダイマル画廊
1980年　小原道城先生に師事し、書道研究「心華社」に入会
1985年　北海道書道協会訪中団副幹事長
1993年　北海道書道協会訪中団幹事長
1997年　全道書道展（国際現代書道展）大賞　審査会員推挙
2000年　北海道書道展　準大賞　会員推挙
2005年　第２回個展　大丸藤井セントラル
2007年　毎日書道展　会員推挙
2008年　幕田魁心氏等と４人展（銀座の画廊）

北海道書道展会員
国際現代書道展審査会員
毎日書道展会員
北海道月形高等学校講師
北海道美唄尚栄高等学校講師
国際情報高等学校講師
北海道文理科短期大学非常勤講師
コープさっぽろ文化教室講師
日本書道大学通信講座・助教授
書道研究「心華社」常任参事
書道研究「大成会」主宰



福森龍子先生を偲んで

昨年６月30日朝、書道展審査業務のため羽田空港についた時、福森先生の悲報を受け愕然とした。その日の夕刻中野会長・石原事務局長と打ち合わせ中に、吉田三枝子先生から道新夕刊のコピーが送られ、住宅全焼の大惨事により急逝したというニュースが届いた。享年77歳。

天彗社創立50周年記念展の事業を目前に、創立会員として天彗発展に尽力されているなかの訃報は、社友一同の深い悲しみと、痛恨の極みです。

先生は、北海道教育大学札幌校在学中に、教育実習生として札幌市立啓明中学校で、中野北溟先生の指導を受けた。「授業のほかにクラブ活動に於いても生徒に囲まれ（先生、先生）と、親しまれ活動の様子を皆とカメラに収められていた。」と中野先生が当時のことを語っている。

昭和42年に天彗社創立会員として活動の一歩を印され、高校に勤務しながら昭和49年に北海道書道展の準大賞を受賞され、活動の幅が大きく広がった。その後「雪女」を題材に、悪戦苦闘中と言いながらも、楽しそうに書作に励まれた。

創玄展二科審査員・創玄展一科審査員・毎日展審査会員となり、当番審査には、上京して審査業務に当たると同時に、その作風や地域性など、深い洞察力で語り次回への準備をしていた。

昭和50年から始まった、北玄12人展（金子鷗亭先生提唱による）では、57年から４回選抜され出品している。

天彗社では、理事・会員部長として綿密な計画のもとに会員の把握は勿論のこと、関連する諸行事の遂行に努力を重ねられてきました。大変ご苦労様でした。

２・３年前から体調を崩されていましたが、記念展は乗り越える意欲で頑張っていたのに、誠に残念でなりません。

先生のご冥福を衷心よりお祈り申し上げます。

（加藤幸道・記）



福森龍子先生年譜

1940年８月21日生まれ
1974年　北海道書道展　準大賞
2017年６月30日逝去　享年77歳

毎日書道展審査会員
創玄書道会二科審査員
創玄書道会一科審査員
北海道書道展会員
北海道書道連盟会員
天彗社理事・会員部長



及川泉石先生を偲んで

先達（せんだち）はあらまほしきかな（兼好法師）

及川泉石さんがお亡くなりになって、今、失ったもののいかに大きいかを改めて痛感させられるばかりである。

及川泉石は宇野静山の直弟子。臥龍社の同人である。早くに滝川市に「白壽会」を興こし、幾多の俊秀を世に送り続けてこられた。北海道書道展にも参加させてきた。今は皆さん方滝川・札幌・石狩などで、それぞれ活躍していらっしゃる。

及川泉石は別格（宇野静山）

小樽市緑町の臥龍庵、書の「講義の会」。毎月一回、新人からベテランまで多数の志の者たちが参集する。ここでは条幅の書評、書の話、筆記試験なども行われた。

これが終ると、高弟たちを中心に引き続いて、酒宴となるのである。

準備に余念のない母（小夜）は一方で、「及川先生はお酒をお召し上がりにならないから」と茶菓の吟味に懸命だ。

話題は深更に及び、地方の方々はそのまま雑魚寝で仮眠を取り、早朝それぞれの職場へと帰っていくのであった。

さて、静山は、「酒を飲まずして、自分だけ『字』が上手くなろうなどいうてはならん。」「さァ、呑め」といって皆に酒を勧めるのである。が、そんな中で、ただひとりだけ、及川泉石さんには、ニコニコ顔で、「美味いものを喰え。」と言って一切、酒は勧めなかった。皆とは別扱いであったのだ。

そのことを、いつかぼくは父に「なぜなのか」と問うたことがある。すると、「教職で多忙を極める身であるのに、万難を排して毎月『会』に来てくれている。競書を欠かしたことがない。及川君はよく勉強する青年だ。敬服している。」と言い切ったのであった。

及川泉石さんが石狩市に居を移してからのこと、ぼくは及川家を訪問した。その折、披露してくれたのは、江戸時代から伝わってきたという美術品の数々であった。

日本画の軸ものを目にしたときは、圧倒させられた。いまだかつて目にしたこともなかったぼくはその素晴しさに「ビックリ」であった。

及川家は代々お酒の蔵元の家柄だったのだ。泉石さんは幼少の頃からそうした美術品に囲まれた環境に身をおいて、その中で自らの感性を培ってこられたのだ。

泉石さんの条幅の書き方のナゾの一つが分かったような気になったものである。

及川泉石さんの書は一見、飄逸の風を見せながら、自在の書きっぷりを見せる。が、及川泉石の線の深さとみずみずしい感性にあふれた表現は、余人の遠く及ぶところではない。

今、そのありし日の一端をここに書きしるすものです。

（合掌）

（宇野雉洞・記）



伏龍鳳雛

及川泉石先生年譜

1927年２月25日生まれる
1948年　臥龍社入会　宇野静山先生に師事
1960年　日本書道美術院展　美術院賞
1960年　北海道書道展　特選一席北海道知事賞
1963年　毎日書道展　毎日賞
1964年　北海道書道展　準大賞
1991年　滝川市文化功労賞
2008年　全道書道展　中華人民共和国駐日本国大使館賞
2019年１月８日逝去　享年91歳

白壽会代表
毎日書道展会員
創玄書道展審査員
北海道書道展招待作家
全道書道展審査会員
滝川市書道連盟名誉会員



本間桂龍先生を偲んで

桂龍先生は書作に対し、求道者にも似て私達の範となっておりました。

自分の描きたい書の姿を追い求め、師宇野静山先生の書の趣意を汲み、自分の中で咀嚼、信じた道をひたすら進み、古典を追求し、克服するエネルギー。あの細身の小柄な体のどこから生まれるのか不思議でならない。

桂龍独自の書境を開き清新な作品を発表し続けてきた。

桂龍先生を作品だけで知る人は、その書かれる線の厳しさから表現されることで、男性と間違えられる程。それは日書美展・毎日展等に出品された時のこと、金子鷗亭先生が、「この男の作は仲々良いナ」と宇野先生に云われた時先生は、「否この作者は女性だョ」と答えられ、鷗亭先生はこれにはびっくり「ずーっと男性だと思っていた」と話された由。小樽での集まりで宇野先生から紹介されたのでした。

臥龍社に於いては、高齢ではあったが、事務局長として長年にわたり務められ、決断と行動力に勝れた方で、諸々の行事に滞りなく見事に遂行される、臥龍社にとっては誠に貴重な存在であった。

会としてはそれはそれは惜しい逸材を失ったことになる。

酒席では宇野先生から、「酒の飲めない奴は書は上手くならないぞ」と云われ、随分と勧められるのですが、桂龍先生は流石女傑で、都度受けておられる程でした。

いよいよ卒寿を迎えられ益々書境も円熟、北海道にこの人ありと気を魄いて頂ける筈だったのに…誠に惜しい先生でした。

心よりご冥福をお祈りいたします。

（北川稲谷・記）



行雲流水

本間桂龍先生年譜

1928年３月27日　小樽に誕生
1963年　小樽書道市展第一回市長賞
1964年　第二回市長賞受賞
　　市展審査会員となる
　　日本書道美術院第17回展推薦毎日賞受賞
　　同会同人となる
　　臥龍社第一回社中展出品　以後欠かさずに出品
1993年　北海道書道展第34回展準大賞受賞
　　北海道書道展会員となる
1998年　小樽市文化貢献賞受賞
　　臥龍社同人となる
2018年９月27日逝去　90歳



河原啓雲先生を偲んで

平成30年12月15日　空気が澄んだ穏やかな冬の朝、河原啓雲先生が58歳でご逝去されました。書を愛していた先生が若くして逝ってしまったことは、いまだに現実として受け止められずにいます。

生徒一人ひとりを思いやる気遣いにあふれ、老若男女どんな世代からも慕われる温厚で人間味あるお人柄で、私たちに書の奥深さを教えてくれた啓雲先生。

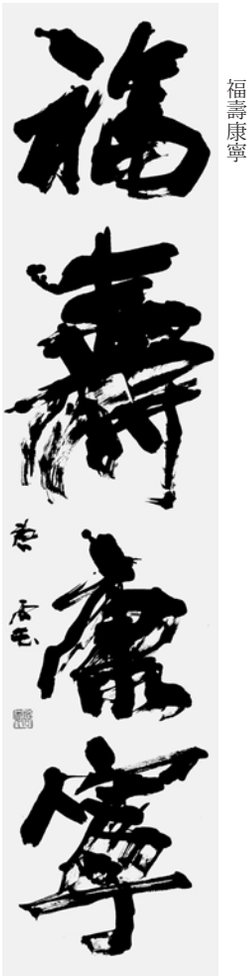
どんな小さいことでも最後まで目を向けて真剣に向き合ってくれました。とても残念でたまらず門下生一同深い悲しみにうちひしがれております。先生の存在と愛情は私たちにとって、とてもとても大きなものでした。

私たちの会には、幼年から一般までの会員が大勢います。啓雲先生は幼少のころから指導されていたので今となっては、親子二代が門下生のケースも多々あります。一教室の人数が大所帯の学生部では、子供たちが賑やかで明るい教室から、全道一や全国展上位入賞者を多数輩出しております。「それぞれが楽しく書ける環境が長続きの秘訣」と啓雲先生の持論でした。先生は誠実で真面目な性格ですが、子供たちを笑わせたり、喜ばせたりするユーモアのセンスが抜群でした。優しい笑顔でありながら、時には厳しい指導も…。

一般部では、八段師範以上を対象に研修会を設け、古典の勉強会も定期的に開催していただきました。展覧会出品者の勉強会では、先生の筆さばきに感動させられました。

さらに、日展の入選をはじめ数々の入賞のほか、地元苫小牧市の文化賞受賞、最近では「むかわ竜」の揮毫など、啓雲先生のご活躍は私たちの喜びであり誇りでした。師匠としても上司としても、細やかな気配りに何度救われたことでしょうか。

そんな中、２年ほど前に体調を崩し、強靭な気力で病魔と闘い続けながらも私たち門下生を見守ってくれた日々…。



もっとご指導を受けたかったのに願いも届かず、まさか永遠のお別れになってしまうなんて惜しんでも惜しみきれません。先生のご恩に報いるためにも、その教えを忘れず、ご遺志を受け継ぎ「河原啓雲魂」を絶やさぬよう、門下生一同微力ではありますが、前向きに精進してまいります。

啓雲先生に出会えた門下生一同は幸せでした。本当にありがとうございました。

これからもどうか、ずっとずっと私たちを見守って下さい。

ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

（鈴木紅藍・記）

河原啓雲先生年譜

1960年６月７日　むかわ町で生まれる
1990年11月　創玄現代書展選抜作家（東京）（以後５回）
1994年12月　北玄12人展推薦作家（以後２回）
1998年５月　北海道書道展準大賞（会員昇格）
1999年７月　毎日書道展会員賞（審査員昇格）
2000年11月　苫小牧市文化奨励賞受賞
2001年７月　創玄展一科審査員昇格
2008年10月　第40回日展初入選
2009年10月　北海道書道展・イン・シンガポール展出品訪問
2010年12月　ノーベル賞鈴木章氏「むかわ町特別名誉町民称号」賞状揮毫
2011年11月　苫小牧市文化賞受賞
2012年３月　第48回創玄展21世紀賞受賞
2013年４月　日韓交流展出品参加（韓国ソウル訪問）〈８回目〉
2014年６月　苫小牧書道連盟理事長に就任
2015年１月　ＴＯＫＹＯ書2015（東京都立美術館）大作展出品
2016年１月　第57回北海道書道展　運営委員長
2017年３月　むかわ町「町民憲章」揮毫
2017年９月　「むかわ竜」揮毫
2018年11月　改組第５回日展入選（７回目）
2018年12月15日逝去　享年58歳



千葉軒岳先生を偲んで

軒岳先生は、函館書藝社を土台に、活動の拠点を函玄社に置き、体制を整えた。函館文化団体協議会を含め当地の文化・書道の向上への貢献も著しく大きかった。

昭和61年、道立函館美術館がオープンした。金子鷗亭先生の作品展に始まり、テーマ展が続々と企画された。それらに出品すると同時に、関連する諸行事にも大奮闘をした。

書に関しては、作品集『軒岳小画廊』のオイラの座右銘の中に「筆はあるが、努力の二字が…。」とある。書作品からみれば謙遜か?!

若い頃より紙にむかって練習していた姿はみかけたことは少ない。

発想・感覚だけで書けるか？天才なのか？否、洞察力に鋭い独特のものがあった。

子供の頃から釣り竿、バットが多くの時間を占めていた。釣りでは岩場、川の流れの状況などをよく見極めて竿をふる。足の位置、手首、肩から腕のふりの強弱大小のしなやかさ、はやさをいつも素振りで確認していたはず。バットでも足腰、体の構え、握り肘の開閉の工夫、一瞬に対応する素振りの音をかぎとっていたはず。これが原点となり、いつでも無意識にものを手にして、動きや身ぶりをしていた姿はよく見かけたものだ。

これが筆に代わるものだったのでは？自然の中で培った動体視力から生まれた、独特の動き－個性の感じられる書を生んだ。

退職後は、完成度の高い書から大変身する。中国訪問で古墨と出会い墨色の研究にコリ始め、その後、3回も訪問。

故棟方志功に何かを感じたか、墨に彩色を加え、色の構図に書の配置、造型のトリコになって、奇抜とも思える大胆な表装をも考案し、不可思議な書を展開した。まだ誰もしていない世界をつかみ、異彩を放った。

とにかく、トコトンまで追求していく姿がスゴイのだ。「馬鹿になり切ると、廣がる小宇宙」の心境をつかみとったのだ!!

しかし、彼の中にはまだやり残したものがあったのかも知れない。

「人工知能－君には負けない。書は絶対に負けん！筆の遅速と捻転－これは神から授った神業なんだ！」と叫んで、先生は神道なので、神様となってしまいました。

平成31年2月8日　　（髙橋海堂・記）



雨はやみ…

千葉軒岳先生年譜

1938年1月31日　上磯町（現北斗市）に生まれる
1957年　北海道学芸大学函館分校入学　太田鶴堂先生に師事　雅号「軒岳」を授かる
1959年　北海道学芸大学函館分校卒業
熊石町雲石小学校赴任以来1998年函館市立深掘中学校退職まで40年間教職
1973年　函館書道界の将来を見据え同志と共に『函玄社』創立
1976年　第17回北海道書道展大賞　会員に推挙
1978年　第14回創玄書道展大賞　審査会員に推挙
1979年　第11回日展初入選（以降4回）
1984年　毎日書道展審査会員に推挙
1992年　社団法人創玄書道会理事に就任（以降16年間）
1993年　五稜郭タワー皇太子様来塔記念旗柱銘を揮毫
1995年　日本詩文書作家協会理事に就任（以降　参与・常任理事・顧問）
1996年　北海道創玄代表に就任（以降2期）
新刊「函館新聞」の題号を揮毫
1998年　函館市文化団体協議会白鳳賞　受賞
毎日書道展50周年特別企画パリ書展に出品
1999年　函館市文化団体協議会会長に就任（2期）
2000年　日本書家代表団による日中文化交流訪問（以降4回）
函館市社会教育委員長に就任（2期）
日本ドイツ100年記念「現代日本の書　代表作家ベルリン展」に出品
北海道書道展理事に就任
2003年　北海道文化奨励賞　受賞
2004年　函館市文化賞　受賞
2005年　北海道立三岸美術館運営協議会会長に就任
2009年　松前町「北鷗碑林」建立に参画　石碑建立
2018年　作品集「軒岳小画廊」上梓（作品243点掲載）
2019年2月8日逝去　享年81歳



村上碧舟先生を偲んで

村上碧舟先生の悲しい知らせが届いたのは、「村上碧舟卒寿作品展」開催予定のちょうど１か月前、２月18日でした。先生の作品制作意欲は、衰えることを知らず記念展の作品を全て書き上げ、万全の準備を終えて後は臨川書道会35周年記念会員展と併せ発表を待つばかり、そんな矢先の訃報であり痛恨の極みと言えましょう。

享年93歳のご生涯でした。

「波乱万丈」と言う言葉がありますが、先生は正に波乱万丈の生涯を送られたと思います。昭和３年室蘭市で生まれ、陸軍少年飛行兵に志願し、その後終戦を迎えました。戦後自衛隊に入隊、書歴は昭和31年北海道教育大学教授・金丸梧舟先生に師事、その後昭和47年小原道城先生に師事し、昭和54年第10回全道書道展大賞受賞、北海道書道展大賞受賞、毎日書道展審査会員推挙、第26回全道書道展で文部大臣奨励賞、平成８年サロン・ド・パリ賞を受賞する等、国内外でもその作品が高く評価され、その活躍ぶりは目を見張るものでした。

しかし、そんな輝かしい書活動の反面、病魔との闘いでもありました。肝硬変、腎臓がん、３度に渡る脳梗塞、骨折等次々と病に襲われましたが、そのたびに強靭な気力と生命力で甦り不死鳥の如く復活し周囲を驚かしていました。

先生は、斬新な発想で作品を創造する作家でした。３年前の米寿記念作品集で小原道城先生は、「村上碧舟の書は、漢魏六朝の古朴重厚なものや、晋唐の遒麗な書、宗元や明清の知的な耽美の世界、日本の藤原佐理や行き着くところ良寛の飄逸さなどを、ことごとく自己の体内にとり込み…（中略）命のほとばしる活力と格調を求めて書境を膨らませている。（後略）」と絶賛していました。またこの作品集の中で、村上先生はこう述べていました。

愛・感謝
先人に学び
朋に学び
師に習う
亦説しからずや

墨に酔い
書に酔い
酒に酔う
そんな人生に
ありがとう　　碧舟

作品を通して多くの感動を与えてくれた村上碧舟先生、ありがとうございました。

ここに謹んで先生のご冥福をお祈りいたします。（合掌）

（佐藤翔雲・記）

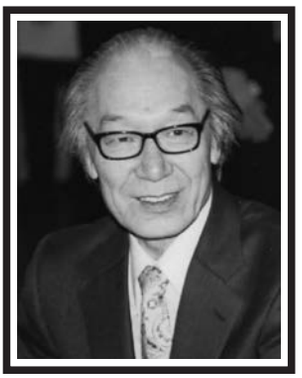


阿轆轤地

村上碧舟先生年譜

1928年　７月２日　室蘭市に生まれる
1956年　金丸梧舟先生に師事
1972年　小原道城先生に師事
1978年　第９回全道書道展　準大賞
1979年　第10回全道書道展　大賞
1992年　第33回北海道書道展　大賞
　　毎日書道展審査会員推挙
1994年　第26回全道書道展　文部大臣奨励賞
1996年　第11回サロン・ド・パリ、マイアミ展サロン・ド・パリ賞
2003年　第１回個展
2009年　第40回全道書道展　文部科学大臣賞
2010年　毎日書道展参与会員
2013年　第２回個展
2015年　第３回米寿記念個展
2019年２月18日逝去　享年93歳

北海道書道展会員
国際現代書道展審査会員
毎日書道展参与会員
国際書道協会副理事長
月刊「書の研究」元編集長
日本書道大学講座「日本書道アカデミー」教授
書道研究「心華社」副会長
北海道デザイン二期会会員
サロン・ド・パリ会員
書道研究「臨川書道会」主宰





リラびえの…

辻井京雲先生を偲んで

辻井京雲先生は、令和元年５月19日午前５時15分、奥様、ご子息が見守る中静かに眠るように旅立たれました。行年74歳のご生涯でした。

先生は、昭和43年、大学をご卒業と同時に上京、金子鷗亭先生に入門し錚々たる俊英に囲まれ研鑽を積まれました。昭和50年に母校北海道教育大学書道科の教官として北海道に戻られた時に、私は大学１年生として初めて出会いました。先生31歳、強い陽光が射し込める研究室でした。それからの４年間は驚愕と感銘、苦悶、憧れ、……。

北海道書道展開催の時期には、研究室生全員で国鉄（「からまつ」夜行列車）で先生とともに釧路から札幌へ出かけました。車中で作品集を見ながら、先生を交え作品を批評しあったのが鮮明に思い出されます。その頃は先生も公募で私たちと同じステージでしたが、先生曰く、「道展では、特選第１席を狙っているから……」有言実行とは正にそのことで、第17回展第１部で、第18回展第３部で特選第１席を受賞し、会友に昇格され、第22回展で大賞を受賞され審査会員となられました。

大学を卒業後一時期は離れましたが、先生が札幌に来られ何と嬉しかったことか……

昭和59年10月13日、かねてより待ち望んでいた辻井京雲先生を代表とする『書圏』が発足されました。

『……徒党を組むことにしたいと思う。書に限らず表現活動というものは本来“個”であるべきであるのだが、志を同じくする者が時に集い、お互いを語り、書を語り、切磋琢磨することもあながち無益なことではないでしょう……』『理想とするところはいささかも変わるものではない。それぞれの道をそれぞれがベストを尽くして探り、悩み苦しみ、そして喜び、語り合う。そんな中から、書を学ぶ中から“自分の、自分らしさの追求”をしてゆきたいものと願っている。』『作者を髣髴とさせる書。若い意欲溢れる作品。これまでにはみられない試みや、研究論文、実践報告、臨書考などを会員諸君に大いに期待している。』（書圏会報創刊号　巻頭のことばより）

書圏発足以来35年、北海道教育大学書道科の教官として多くの卒業生を送り出すとともに、書作家として数多くの斬新な作品を発表され続けました。

北海道書道展において第58回展より３年にわたる理事長の折、古典から前衛書まであらゆる書表現の形態を網羅した全北海道展となることに尽力されました。その他にも作品寸法による表現の定型化（類型化）からの脱却を模索し、新寸法を設けたりと改革を推し進めました。書人として、指導者として、また教育者としても魅力溢れる先生でした。

わが書圏はそんな先生の後姿や先生に教わった書の魅力に引き込まれた人間の集まりです。先生の求めていたものを我々も求めていこうと思っています。

先生、長い間本当にありがとうございました。どうか安らかにお休みください。合掌

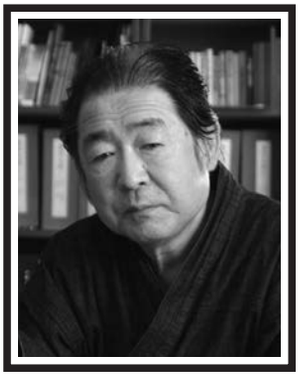
（相澤太煌・記）

辻井京雲先生年譜

1944年　北海道雨竜町生まれ
1966年～「北海道書道展」「創玄展」「毎日展」に出品
1973年　毎日展毎日賞、日展初入選（以降23回）
1977年　創玄展大賞
1979年　毎日展準大賞、個展（釧路・カントリーハウス　以降14回）
1981年　創玄展文部大臣奨励賞　北海道書道展大賞
1982年　訪ミュンヘン伝統芸術展（ミュンヘン／以降、北京・ウィーン・ストックホルム・サンパウロ等海外展多数）
1989年　ロンドン大学SOAS客員講師（～90）、大英博物館研究員（～94）
1991年　英国「ジャパンフェスティバル'91」記念書制作（ロンドン）
1993年　JAPANESQUE－うるしと書の二人展（札幌）
（94～ロンドン、95～エドモントン＝伊藤隆一氏と）
2000年　中国・龍門、白園（白楽天の故地）内日本碑林に「雨竜」碑造立
2003年　札幌芸術賞
2008年　松前町北鷗碑林に「舞」碑造立
2018年　北海道文化賞
2019年　瑞宝中綬章を受章

役　職　日展会友
㈳創玄書道会常任参与
㈶毎日書道会評議員・北海道展実行委員長
日本詩文書作家協会参与
北海道書道展理事長
書道研究　書圏　代表同人
北海道教育大学名誉教授

著書等　『図説　漢字の成り立ち事典』（教育出版）
『天柱山の摩崖～鄭道昭研究～』（匠出版）
『アルファベット・書・カリグラフィー』CD-ROM（データクラフト）
『小学書写』『中学書写』『高等学校書道Ⅰ』『高等学校書道Ⅱ』『高等学校書道Ⅲ』（教育出版）



父・柏木淳風を偲んで

今まで、娘が追悼文を書くというのはなかったようですが、今回は書かせていただくことになりました。

最後に、一つ深い呼吸をして、とても穏やかに、父は旅立ちました。

稚内で生まれ、戦時中は樺太在住、終戦後引き揚げ、原爆が落ちて１年後の広島市に身を寄せていた時期もありました。数年後、北海道に戻り、20代後半に仕事の転勤先でたどり着いたのが岩見沢でした。岩見沢の成人学校で藤根凱風先生に出会い、書道を始めたのは30歳の時でした。成人学校は無くなっても藤根先生の札幌のご自宅に作品を持って伺うほどののめりこみようだったようです。そして、第23回展においてグランプリをいただきました。それが大きなきっかけとなり、生業が書道一本となりました。在住していた岩見沢においては、多ジャンルの芸術家との交流、子供たちへの教育活動、岩見沢市や空知地区に関する文化活動のお仕事、月形刑務所の篤志面接員など、広く長く様々な活動をさせていただきました。南空知ファミリー展においては、北海道新聞社さんに支えて頂きながら、地域の諸先生たちとの強い連携のもと長期にわたり継続することができたと聞いております。道展では、運営委員などのお仕事にも多く携わらせていただき、父はいつも楽しそうに出向いておりました。2002年には、会員推挙同期の山田汎暁先生、石井華賀子先生、熊川景子先生との四人展を開催でき、非常に充実した内容、かつ、大盛況で、父も思い出深かったことと思います。

道展のグランプリ受賞は、父の人生を激変させました。たくさんの良き生徒さんにも恵まれ、会派を超えて多くの書の仲間に支えられてきました。書道が好き、教えるのも好き、書道に助けられた人生でした。

たまたま、娘の私は書道に携わることとなり、父であり仲間という二面を、父・柏木淳風を通して体験してまいりました。台北・故宮博物館に二人で行ったり、音楽とのコラボレーションの企画を一緒に立ち上げたりなど、遊び心満載で楽しいことが多くありました。私個人は、父の篆書小品が好きでした。



碧荷

葬儀の日、父の顔をご覧になられたかたが異口同音に「きれいな顔だ」とおっしゃって下さいました。最後に、いい男になって旅立っていったようです（笑）。

長年にわたり、父がお世話になりましたすべての皆様に、この場をお借りして深くお礼申し上げ感謝致します。ありがとうございました。

（柏木志保・記）

柏木淳風先生年譜

1933年　本名・栄治　稚内市生まれ
1965年　淳風書道会を結成
1982年　第23回北海道書道展大賞　会員推挙
1997年　書と音の融合「舞」〈書とジャズの即興による〉
（岩見沢市・岩見沢文化センター）
2002年　第23回北海道書道展グランプリ受賞20周年記念書展「IKKY」
（札幌市・大丸藤井セントラルスカイホール）
淳風書道会35周年記念会員展
（岩見沢市・岩見沢文化センター）
2004年　重要文化財　増毛町旧商家丸一本間家　看板題字揮毫（増毛町）
2005年　空知文化団体連絡協議会表彰受章
2006年　第６回個展　（札幌市・大丸藤井セントラルスカイホール）
2011年　藍綬褒章受章
2015年　岩見沢市市政功労（文化）受章
2019年　９月13日逝去　享年85歳

北海道淳風書道会主宰（1966～）
岩見沢書道連盟会長（1983～2011）
札幌矯正管区月形刑務所篤志面接委員〔書道講師〕（1989～2010）
岩見沢文化連盟参与（2010～）
空知管区文化団体協議会参与（2010～）
北海道書道展招待会員（2019～）



伊藤天進先生を偲んで

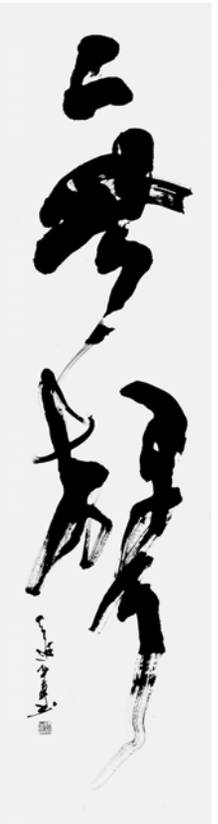
先生の白寿のお祝いに恵庭一門は、お花といちごを持参し遊心館に行きました。綺麗なお花を「持って来てくれたの」と大変お喜びになり、いちごもおいしいと、働いている方々にもさしあげました。また、元気な時は、ゴルフ、盆栽、囲碁と沢山の趣味をたしなみ、毎日を彩っていました。天進書道会におきましても、おおらかで優しく、穏やかな性格から多くの人に慕われ、面倒見の良い先生でした。その先生の悲報に接して、私達一門はどうしたら良いのか、只々茫然としてなすことを知らないありさまでした。

今浮かんできますのは、どんな時でも全身に闘志をみなぎらせ「大丈夫、大丈夫」と微笑んで下さり、私はどんなにか安心させられたかわかりません。また「これを見てくれるかい」と、卒寿の記念として天明元年から昭和56年までの、米一俵の変動史を書き「これは記念に残しておくから」と言われ、私はとっさに「それは宝物ですよ」とお話ししました。そして私に小中学校の硬筆指導についてお話しになり、小学３、４年生は用具の持ち方、筆順に従って文字を正しく書くこと。５、６年生は文字の大きさや配列に注意して、点画文字の組み立てを理解しながら形を整えて書くこと。中学生は実形文字の大きさ配置など、目的や必要に応じ調和よく書くこと、と指導を受けました。一般の創作は、自分の心で書くことと指導を受けました。このように長い間御指導下さり、本当に有り難く心から感謝申し上げます。

今後も精進を続け、先生から「まあまあ書けるようになったね」と言われるよう頑張って、其のうち先生に逢いに行きます。

ここに謹んで先生のご冥福をお祈りいたします。

（島田澄溪・記）



無聲

伊藤天進先生年譜

1919年　三笠市生まれ
1939年　京都、丹羽五山、谷辺橘南先生に師事
1941年　京都丸物展審査員特別賞
1943年　高等師範学校教員免許
1966年　渡辺緑邦先生に師事
1968年　天進書道会創設
1969年　北海道書道展特選　以後連続４回特選
　　毎日書道展入賞　以後４回入賞
1970年　日展入選　以後３回入選
1971年　創玄書道会賞
1977年　北海道書道展　準大賞
1978年　北海道書道展　審査員
　　恵庭市文化協会文化功労賞
1979年　天進個展開催　以後４回
1981年　毎日展入賞　通算５回
1983年　日本書道研究会講師就任
1986年　毎日展会員
1987年　創玄展二科審査員推挙
1989年　島松病院芸術療法講師
1990年　恵庭市　文化功労賞
1993年　市民講座サークル講師
1994年　恵庭市　功労章
1997年　恵庭市　善行章
1999年　北海道書道連盟感謝状
2006年　石狩管内文化団体　文化賞
2007年　北海道書道展30年表彰
　　北海道書道展　招待会員
2019年　11月４日永眠　享年100歳



石川玉舟先生を偲んで

玉舟先生は文房四宝について、とても強い思いを持っておられました。教え子のために、何十反もの本画仙紙の中から、良いものを選別して下さったり、古い良質の固形墨を紹介して下さったりしたことが、思い出されます。また、学書に適した筆を、という思いで、長栄堂に依頼して、時間をかけて筆を作っておられました。玉舟清賞、晋唐自在、停雲は、いずれも学書に適したもので、広く普及していました。特に玉舟清賞は、60余年前から多くの人に愛用されてきました。60年以上も一定の質を保つことは、容易なことではありません。実際に毎年使いながら、筆質の保持のために長栄堂とやりとりを続けておられました。墨は固形墨の良質なもの、紙は本画仙紙というのは、先生に関わった者には、当たり前のことでした。墨液は使いませんでした。

書の指導に対する情熱は、大変なものでした。時間に捉われず、納得のゆくまで指導されていました。それは先生の手本にも良く表れていました。確かな技術で完成されたそれは古典のにおいを感じさせる物でした。いつも同じ高いレベルの手本を書き続ける事は、容易な事では有りません。「古いと言われるかもしれないが、私はそれを追求する」と学書についての思いを述べておられました。斬新なものが好まれる昨今ですが、変化を前進と捉えるか、後退と捉えるかは、その本質に照らして考えないと結論は出ません。一つの道を迷わず進むためには、確固たる信念と大きなエネルギーが必要です。安に迎合することなく、ただひたすら自分の信じる道を歩み続けることが、いかに大変なことであったかと思わずにはいられません。

以下に心に浮かぶ先生の生前のお姿を記して、追悼の言葉と致します。

・部屋の中にはたくさんの虫カゴ。その中には鈴虫。虫かごの中からピンセットで糞を一つずつ拾う。小さな野菜のえさを嬉しそうにカゴに入れる。そして時間を忘れてその声を楽しんでいる。



然則燕雖兼齊…

・庭のツツジをいとおしむように見ている。茶色く変色した花びらを一つずつ手でつまんで取っている。そして、緑の葉っぱだけになったツツジを嬉しそうに眺めている。
・猫と遊ぶ。時間を忘れて。何度も何度もおやつをあげる。目の前の立派に太った猫を笑顔で見ている。
・小さな子どもが泣いている。書の練習が長い時間続く。妥協しない指導の中で、その子どもは成長し、立派な書の愛好家になった。成長しても変わらぬ視線で見つめている。

書と厳しく向き合い、人を愛し、小さな命を大切にした、そんな先生でした。

彼岸の地でも毎日筆を取っておられる事でしょう。ご冥福をお祈り申し上げます。

（青木空豁・記）

石川玉舟先生年譜

1929年　北海道池田町生まれ　本名・文雄
1949年　北海道第一師範学校卒業
1949年～以下の札幌市立中学校に勤務
　札幌市立美香保中学校
　札幌市立柏丘中学校
　札幌市立東栄中学校
　札幌市立陵陽中学校
1962年　北海道書道展新委嘱推挙
1967年　北海道書道展新会員推挙
1973年　玉筍会結成
1974年　第１回玉筍会書展（以降20回展まで）
2020年　７月14日逝去　享年91歳

北海道書道展招待会員
北海道書人展特別招待作家
玉筍会主宰
北日本書道学会顧問
北海書人社顧問
北海道書道教育連盟顧問





多田博英先生を偲んで

多田博英先生、令和２年８月11日ご逝去。

この訃報を知ったのは、年賀欠礼のあいさつ状を戴いて知った。

ご遺族への遺言という。遺族関係者以外には知らせなかったという。

私が、この道展作品集物故者欄の稿をお受けすることになった。

以前、先生は私に「私(わし)は弟子をとらん」とおっしゃったことを思い出した。何か不思議な縁(えにし)のように思えた。

私が先生と出会ったのは、読売書法会北海道同交会発足の時だった。平成に年号が改まって世の中があらたなスタートをきったときでした。一本気な性格、ときには言葉を選んで話す慎重なタイプの人だった。

酒を愛する私とちがって酒を苦手とする先生だった。

長きにわたり読売書法会北海道同交会のフロントランナーとして、一途に突っ走った人だった。

筋を通す信念の人・多田博英を中心とした第一回読売書法会北海道同交会展を平成５年11月に札幌大丸藤井セントラルを会場に開催された。先生にとっては待ちに待った晴舞台であったと思う。

私は、先生と膝を交えてお話しをしたことがあった。それは後にも先にも心の底から語る機会には恵まれなかった。

平成26年７月、北海道読売書法会伊達移動展の開催のときだった。

会期の最終日、しかも会場の後片付けに入ろうとしたときだった。ぽつんとお一人で。会場を一巡しながら私はこうきりだした。「先生、この移動展にグループで来ていただいた同志は前日の直会の後帰りましたよ。」「いやいや八巻さん、あんたの古里に来てみたかったし、私は札幌を離れて少し話しかったからさ」と。私はそのときはあまり意を汲み取れなかったが会話の中から篤い空気を読みとることができた。

「世界の文字のうち、字を書くことが芸術にまで押し上げたのは、漢字と仮名よりほかにない。われわれもそうだが、書展があるからひたすら書くことに努めるが、書の歴史にはあまり関心をもたない。書を志す者の使命は歴史を学ぶことだろう、あんたそう思わんか」あらましこんな話が中心だった。

最後に先生にメッセージを届けます。

第１回読売同交会書展に出品したメンバーを挙げます。思い浮かべてください。

阿部和加子　賀来弘子

加納溪村　北彰子　木村雅芳　倉部直子　黒田仙雪　近藤道峰　佐々木禎翠　鈴木竹華　田上小華　多田博英　滑志田方苾　橋本智水　廣田玲子　堀岡萩雨　本間愛子　八巻水鷗

黄泉(よみ)の国で安らかに…。

（八巻水鷗・記）

多田博英先生年譜

1931年　札幌市に生まれる
1950年　北海道札幌南高等学校卒業
　　在学中、大木金一郎先生に師事
1970年　謙慎書道会　小林斗盦先生に師事。以後、高木聖雨先生に師事
1986年　第27回北海道書道展準大賞　会員推挙
2002年　第19回読売書法展　読売新聞社賞　理事推挙
2012年　読売書法会　参与推挙
2017年　北海道書道展招待会員
2020年　８月11日逝去　享年89歳

日展入選（１回）
読売書法会理事
読売書法会北海道同交会事務局長
謙慎書道会理事
槙社文会会員
北海道書道展会員
北海道篆刻会副会長





新しい道…

大川瀟湖先生を偲んで

早くから漢字・近代詩文書を各種書道展に出品を続け、毎日書道展会員、創玄書道会一科審査員、北海道書道展審査員・理事役員として、幅広く活躍していた大川瀟湖先生が令和３年９月16日逝去された。夏頃の氏の電話では「検査入院なので一週間位かな…？」と元気そうに話していたので、こんな日が来るとは予想だにしていなかった。書家として、教育者として、文化人として活躍中の74歳の氏の逝去はあまりにも早すぎた。

氏は、北海道教育大学書道専攻科に入学以降、旺盛なる探求心を発揮し、古典に裏付けされた確かな技術を駆使し現代書の研究を重ね、書の理論に関する知識量も群を抜いていた。学生時代から酒・タバコは一切口にせず趣味は実に多彩。日曜日も研究室で墨を磨り、墨ができると一人グラウンドでマラソンに興じる。時にはピアノ、アコーデオンも弾く。夏の港祭りのど自慢には、仲間の澤田蒼岳氏（故人となってしまったが）と二人で出場し周りを驚かせていた。結果は鐘一つだったとか。

昭和45年に教職に就き、中学校、養護学校に38年間勤務し、平成20年３月に教員生活を終える。その間、北海道教育大学函館校非常勤講師、市内中学校教頭、３中学校で校長を歴任し、氏の誠実な人柄、仕事ぶりは生徒は勿論、親、同僚から慕われていた。

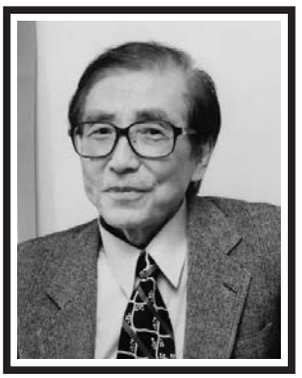
公立学校教職員を退職した平成20年、函館市文化団体協議会事務局長に就任。当時52団体が所属している裏方での事務まとめ役として函館市の文化芸術の向上発展のために会の運営に寄与。平成18年函館市文化団体協議会表彰「青麒章」を受章、平成30年には永年の功績が認められての「白鳳章」を受章する。その後は協議会の評議員として貢献。そのほかにも教育大学函館校の書写実技非常勤講師、函館西高校、大野高校の非常勤講師、七飯町教育委員会公民館講座講師として活躍。永年にわたり函館書藝社理事（理事長３期６年）、公益社団法人創玄書道会所属の「函玄社」会長として、次世代を担う若手の育成を推進してきたところであった。

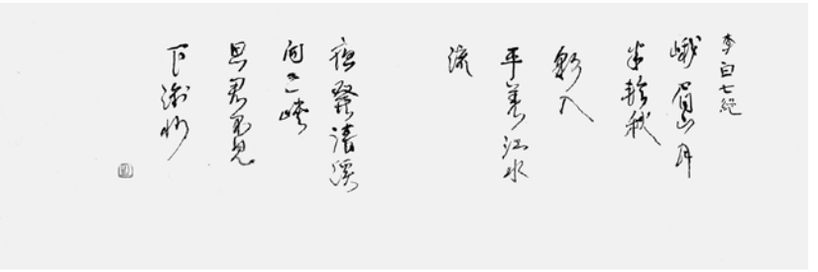
私は55年間お付き合いさせていただいたが、氏は学生時代から亡くなるまで人柄も風貌変わらぬ人だった。誰の評価も同じである。誠実で、努力家で、指導力に優れ、誰からも愛された我らの大川瀟湖先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。合掌　　（安保天壽・記）

大川瀟湖先生年譜

1947年　６月30日七飯町に生まれる　本名　冨美男
1970年　北海道教育大学函館校卒業（師・太田鶴堂先生）
　　創玄展推薦毎日賞受賞
1983年　北海道教育大学函館校書道実技非常勤講師
1988年～　函館書藝社理事・理事長
1997年　函館市立潮見中学校教頭
2001年～　戸井町立潮光中学校校長・函館市立西中学校校長・桐花中学校校長
2006年　函館市文化団体協議会「青麒章」受章
　　北海道書道展準大賞受賞
2008年　函館市文化団体協議会事務局長
2011年　函玄社会長
2012年　北海道教育大学函館校書写書道非常勤講師
　　高校書道時間講師（大野農業高校・西高校）
2014年　道新文化センター書道講師
2016年　七飯町公民館書道講師
2017年　北海道書道展理事
2018年　函館市文化団体協議会「白鳳章」受章
2021年　９月16日74歳にて逝去

毎日書道展会員
創玄書道会一科審査員
北海道書道展審査員
函館書藝社評議員
函館市文化団体協議会評議員
函玄社顧問





李白七絶…

真田昇先生を偲んで

「おそらく、これが最後の作品です」

令和３年４月、出品した第62回北海道書道展のチケットが届いた時に、脳梗塞で２月に倒れ病院のベッドの上にいた叔父に突然言われた言葉です。

どのような作品か確認すると、

峨眉山月歌

峨眉山月半輪秋　影入平羌江水流

夜發清溪向三峡　思君不見下渝洲

と詠みました。

昭和14年９月、北海道千歳市で真田家の８人兄弟の７番目三男として生まれた叔父は、小学生の時に担任の先生に褒めて頂いた事がきっかけで書道を始めたそうです。

昭和37年から弟子屈高等学校、札幌北高等学校、（昭和47年から２年間は札幌北陵高等学校にて兼務の講師）、札幌藻岩高等学校に勤務致しました。国語の授業で漢文を教えているうちに、唐詩を音読したいという気持ちになり中国語の勉強を始めたそうです。

書道の会の方達と中国旅行にも行き、中国語学校の講師との出会いにより昭和56年からの２年間、中国政府からの招請状が札幌の中国領事館を通じて札幌市教委に届き、叔父は海外研修員として中国に派遣されて四川大学外文系日語科で日本語講師となったと聞いています。

在職中に、四川省にある峨眉山に３度足を運んだようです。「峨眉山民間故事」としてまとめられている本に興味を持ち、日本で初めて日本語訳をした「峨眉」（昭和59年）を自費出版し、中国書法を学んだ四川大学専家何應輝氏には「峨眉」と「続峨眉」（平成13年出版）、「西域漫録」（平成19年印刷）の題字を書いていただいています。

書道の関係者の皆様にも恵まれました。日本だけではなく中国にも沢山の方々とも交流がありました。皆様の支えがあったから叔父は幸せな人生を歩む事ができました。「幸せです」と「さようなら」と「ありがとう」。叔父の最後の言葉です。寝ているように静かに旅立ちました。

長年にわたり、お世話になりました全ての皆様には感謝申し上げます。ありがとうございました。

（姪・澤田奈美）

真田昇先生年譜

1939年　９月20日北海道千歳市生まれ
1962年　３月　学校法人東洋大学文学部国文学科卒業
　　４月　北海道弟子屈高等学校に教諭として勤務
1965年　４月　北海道札幌北高等学校に教諭として勤務
1968年　３月　北海道大学文学部研究科王朝文字専攻修了
1972年　４月　北海道札幌北陵高等学校に兼務の講師として勤務
1973年　２月　北海道教職員美術展招待
　　５月　北海道書道展委嘱会員
　　６月　創玄書道会学生審査員
1977年　４月　北海道札幌藻岩高等学校に教諭として勤務
1981年　６月　中国の中国四川大学外文系専家で日本語講師として２年間勤務
1998年　３月　北海道札幌藻岩高等学校（現：市立札幌藻岩高等学校）退職
2022年　１月５日82歳にて逝去

北海道書道展かな部第一席（特選）
創玄展創玄書道会賞
毎日書道展連続10回入選（秀作２回）





北砺

書友・武田恵さんを偲んで

武田恵さんとの親密と言える出会いは、恵さんが札幌市立啓明中学校の教師として赴任され、小川東洲先生と職場を共にされたころでした。

私は、当時既に東洲先生とは、北海道学芸大学での恩師藤根凱風先生との御縁から親交があり、こうした関係もあり恵さんとの交流が始まりました。

こうした中、夏休みを利用しての書作を中心とした合宿の話が持ち上がりました。若手教師だけではなく、縁の深い知人やその家族、更には親交のある友人を含め、それは大変賑やかな集団となりました。道南江差を始め、道央・道北と汽車の旅にて道内各地の学校の校舎をお借りし、地元の子ども達との交流を計りながら夏合宿が行われました。

50人をはるかに越える家族的な雰囲気の中、書を中心とした人間関係が深まり、長期間にわたり継続されました。これが切っ掛けとなり、恵さんとの関係も強く築かれていきました。

暫くした1988年、「核土社展」の機会が突然のように浮上しました。小川東洲先生を中心に、藤根凱風、中川清風、中野層翠の４先生に加え、何故か若手として武田恵、髙橋祥雲、松山朴羊に小生も加わり８名での書展開催となり、北海道立近代美術館での書展開催はこれが初めてのことでした。

私を含め、若手４人にとっては大変なプレッシャーのかかる書展であり、以後の書を中心とした人生に多大な影響をもたらすことになったことは間違いありませんでした。互いの人間関係の深まりに繋がって行くことにもなりました。

その後、私たち４名はそれぞれ高等学校の書道担当教師としての書道教育への関わりも深まり、恵さんは1992年に北海道高等学校文化連盟専門委員長に就かれました。４年後、恵さんを中心に高文連専門部長の中野層翠先生の下、「第20回全国高等学校総合文化祭北海道書道部門」の大会が開催されました。この時、恵さんはリーダーシップを十分に発揮され、この大会の規模・内容等、その充実振りは過去の高文連書道部門の全国大会に見ることの出来ぬ歴史に残る大会としたものです。大会開催後もその評価の大きさを幾度となく耳に致しました。

武田恵さんの書活動には、書表現の世界にのみ留まることなく、スケールが大きく豊かに展開し、生き方や絵画的視点が大きく影響しているように感じられます。それが、書表現の背景を構築していると思っています。視点の大きさは後輩の指導にも生かされていたようです。

恵さんのお父様も教師であり、その赴任地であった利尻島の学校をお借りしての夏合宿では、夜通し書作をしたり、利尻岳登山では言葉では言い尽くせぬ自然のスケールの大きさと、360度海に囲まれた自然美に抱かれての合宿でした。この経験は技術習得に止まることなく、互いの生き方や感性にまで、大きく寄与していったのではないかと思います。

恵さんに取り、退職間近であったとは言え、早期退職され、療養生活に入られました。暫くの間、書活動を続けられたとは言え、私達との楽しい語らいの場が戻ることなく、交流の機会さえ叶わぬまま、昨年４月突然の訃報に、唯々驚いております。

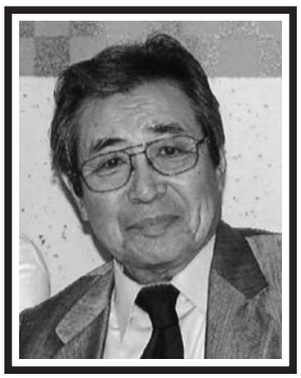
ここに、謹んで心からの御冥福をお祈り致します。

合掌　　（羽毛蒼洲・記）

武田　恵先生年譜

1940年　稚内町に生まれる
1956年　北海道札幌西高等学校卒
1964年　北海道学芸大学札幌分校卒
　　国語・書道の免許取得　金丸梧舟先生に師事
1976年　第６回北海道教職員美術展書道　特選受賞
1984年　第25回北海道書道展準大賞受賞　会員推挙
1988年　核土社展出品　於北海道立近代美術館
　　北海道高等学校書道研究会事業部長
1992年　北海道高等学校書道研究会副理事長
1996年　北海道高等学校書道研究会理事長
1992年～1996年　北海道高等学校文化連盟専門委員長
1996年　第20回全国高等学校総合文化祭北海道大会書道部門開催
1998年　体調を崩し、早期退職し、療養生活に入る
2022年４月逝去　享年83歳

教職歴　津別町立二又中学校
　　札幌市立啓明中学校
　　札幌市立西野中学校
　　札幌市立清田高等学校
　　札幌市立新川高等学校
　　札幌市立旭丘高等学校



野村墨水先生を偲んで

8月の末日、野村墨水先生より電話、「紅葉の中で同期会をしたい、記念に書の小品を用意するので頼む」と元気な声。同期会は紅葉の時季、遅くとも降雪前にと思い準備していた所、一月足らずの9月19日逝去、驚きと大きな悲しみでありました。卒寿を精力的に生き抜いてきた身、生者必滅、会者定離とは言え、人生の無常を感じます。

野村墨水先生とは、小学校同期の朋で、先生は学習、スポーツ、遊び、軍事訓練等すべての面でリーダーでありました。温厚で誠実なお人柄はクラスの信望も厚く、低学年の頃は「たけちゃん」、高学年になって「野一くん」、国民学校高等科2年、師範学校受験の頃から誰からともなく「先生」と呼ばれる様になり、級友から、よき教師になる様、励ましを受け、札幌師範学校へ進学、師範学校が学芸大学になり、「書道」を金丸梧舟先生に直接指導を頂く喜びを時々語ってくれました。

1964年赤平西高校へ赴任。書道の指導を通して生徒一人一人との対話を大切に「全人格的指導」を実践しているとの事、私は関心を持ち、尊敬しておりました哲学者であり教育者である玉川大学学長の小原国芳先生の実践された「全人教育」に通ずるものを感じ意気投合でありました。

墨水先生は1955年「臥龍社」入会、宇野静山先生に師事、努力を重ね「己が人生、書に生き抜く…」といつも語ってくれ、私の書への取り組みの甘さを見て、冗句、ユーモアを交え、「書は生命の燃焼、取り組みは無心…」と自分の取り組みを語ってくれました。その時、私は書への有心、無心を考えながら、学生時代、作品展示の期日間近に、思う作品が書けず、悩んでいた時、山口野竹先生から「下手でよい、心を込めて書く様に」と指導を頂き、ホッとした当時を思い出しておりました。

墨水先生は1930年10月29日、士別市音根別生まれの芦別育ち。郷土芦別に関心を持ち、1954年、芦別市書道連盟発足当時の初代理事としてご活躍でありました。

墨水先生は「書」の他に「詩」作家としてもご活躍で、北海道詩人協会会員として幾冊もの詩集を発刊され、詩集「内と外の間で」の跋文の中で、詩人河邨文一郎先生は「野村武は肉体で思考する詩人の特異な典型、まことに独自な詩人」と記して下さっております。

野村墨水先生のご逝去、残念に思いながらお世話になったお礼と多方面へのご活躍に敬意を表し、謹んでご冥福をお祈りいたします。　（須藤桂城・記）



剪花驚歳早　看柳訝春遅（孟浩然）

野村墨水先生年譜

1930年　北海道士別市音根別生まれ
1945年　札幌師範学校入学　金丸梧舟先生に師事
1954年　芦別市書道連盟　初代理事
1955年　臥龍社入会　宇野静山先生に師事
1961年　母校　芦別市立上芦別小学校校歌揮毫
1962年　日本書道美術院展　入賞
1964年　赤平西高等学校へ赴任
1966年　創玄書道展　秀逸入賞
1969年　赤平市文化連盟　表彰
1970年　毎日書道展　秀作
　　詩「詩の村」「核」の同人　北海道詩人協会会員
　　詩「内と外の間で」出刊
1972年　毎日書道展　秀作
　　北海道書道展　準大賞　会員推挙
1990年　国際現代書道展　文部大臣奨励賞

国際現代書道展　審査会員
北海道書道展　招待会員
北海道高文連　副会長　歴任
北海道高文連　書道専門委員長　歴任





花の中にあやされている

藤原太眼先生を偲んで

平成２年の秋ごろであったと思うが、先師辻井京雲先生が私たちの集まりに藤原先生を伴い、「藤原太眼先生に書圏に入ってもらうことになった。先生は書について高い見識を持ち、作品に対する考えも自分と同じである。皆にとっても有益であると思う。」というようなことを述べられた。以来、先生は私たちの研究会「書圏」の副代表として長く会を支えて下さった。辻井先生の２年後輩、金丸蘇洞先生の高弟として早くから頭角を顕し、すでに確固たる実績とキャリアをお持ちの先生であったが、その温和なお人柄から、当時20代、30代中心の私たち若い集団にとって、時にお手本となり、又何でも相談できる、いわば兄貴分的存在として大切な大切な先生であった。酒を酌み交わしては書や作品、又芸術全般について熱く語りあう。そんなことが何度あったことだろう。道展、創玄展、毎日展を舞台に常に新しい表現を模索し、身をもって表現者のあるべき姿を体現されていたと思う。朴素を含みつつ、毎回どんな仕掛けを作品に施したのか、伺うのが楽しみだった。

又、教育者としても道内高校書教育のリーダー的存在として私たち後進の大きな鑑であった。道教委に委嘱され教育課程編成に関わるお仕事に長くかかわり、ご自身の経験から多くの示唆に富んだお話を伺うことができた。お亡くなりになった後、目にした文章で、先生は次のようなことを書かれている。『感性は機械に似ている。機械は使われなければすぐに錆び付いてしまう。感性も訓練を続けないと、どんどん鈍ってしまう。それ故に、芸術科の教師は、すべからく創作活動（表現者としての自己の確立）をすべきだと考える。新しいものを求め、自己を切り開いてゆく努力が芸術教師としての感性を高め洞察力を深化させてゆく。』

マラソンに例えるなら、ペースメーカーのように先頭を走っていた先生を喪ってしまい、ぽっかりと穴があいてしまったような思いがしてならない。先生、いままで長い間本当にお世話になりました。ありがとうございました。

最後にもう一つ、先生の書業について語るとき、特筆すべきことは、えりも岬に立つ二つの『襟裳岬』歌碑の揮毫であろう。一つは島倉千代子の歌ったもので、先生が初任のえりも高校在職中に依頼されたものとの由。もう一つは森進一の歌う『襟裳岬』で平成９年に建立されたものだ。その書はいずれも飾らない素朴さを感じさせ、あたたかな先生のお人柄そのもののようだ。しばらく訪れていなかったが、また、えりも岬を訪れよう。そして先生のあのいつものはにかんだような笑顔に再会しようと思う。

（小林融之・記）

藤原太眼先生年譜

1948年　北海道札幌市生まれ
1966年　北海道教育大学札幌分校入学「北海道書道展」「創玄展」「毎日書道展」に出品
1979年　毎日書道展「毎日賞」受賞（1988年二回目の毎日賞）
1983年　北海道書道展準大賞　会員推挙
1985年　３人展（京雲・蒼龍・大眼）京王プラザ
1997年　個展　アムアートギャラリー
「襟裳岬」揮毫　除幕式
2004年　第45回北海道書道展運営委員長
2009年　創玄展一科審査員
2010年　毎日書道展審査会員
2013年　北海道書道展30年功労賞

2022年　12月15日逝去　享年73歳





萱　登柳先生を偲んで

萱登柳先生は、令和４年12月25日に享年78歳の若さで他界されました。

ご逝去を悼み、衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

萱先生は、北海道篆刻協会の総務部長として長らく、代表である故越坂柳徳先生を補佐されておりました。協会の実務では、山本芳道先生と意気の合った仕事をなされており、協会にはなくてはならない人でした。

人間性もユニークな方で、その性格が作品にも反映されていると思います。協会の仕事を引き受けて下さりながら、店主である文林堂四宣斎の仕事でも活躍されており、北海道の書道愛好家にも好かれる存在でした。

北海道篆刻協会で年に数回発行している会報の中に、萱先生のお人柄が非常によく表れた記事がありましたので、ご紹介いたします。

８月11日、朝一番の JAL で、越坂先生と共に新千歳より羽田へ。東京はやはり暑かったが、上野の森を前にして、冷房のほどよく効いたレストラン「ぶんか亭」で先生より祝って頂き、生ビールで祝杯を上げた。

毎日展46年の間、一度も海を渡らなかった篆刻部の毎日賞が、とうとうやって来たと言う思いはあっても、自分がその賞を受賞した実感はまだない。上野の森を眺めながら、ゆっくりと大ジョッキ三杯を乾す。

越坂先生は気の早いことで有名だ。今回も朝一番の便で上京して来たし、ホームを先生に遅れずに歩くのも大変だが、その分ゆったりとした気分で時を過ごす。やはり達人だ。このあと毎日展を見て、夜にまた祝杯。翌日、受賞者だけの式だが、その数に圧倒される。席次が一番の為、まだ誰もいないステージに上がり、全国を見渡す気分で、俺は北海道から来た萱登柳だと胸を張った。

宿に帰って、箱より取り出した副賞の岩田久利（日展理事）作のガラス器の美しさとその重さが、毎日賞の輝きと重さにかさなり、三日間の東京滞在中、時と共に受賞の喜びと責任の重さが体の中に広がって来た。協会の仲間の皆さん、本当に有難う御座いました。

東京展を見ての感想は、その量の多さと質の高さには驚かされましたが、北海道の篆刻がけっして見劣りしないことを、この目でしっかりと見て参りました。（以下略）

先生は常々、北海道の篆刻界は本州に負けていない、自信をもって発表していこうとおっしゃっていました。このコロナ禍で中央になかなか足を運べない昨今においても、大変に貴重な経験をされてきた北海道篆刻界に必要な方でした。

先生、今頃は天国の柳徳先生、芳道先生と大好きな篆刻談義に花を咲かせている事でしょうね。

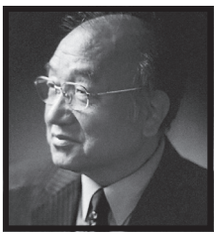
ここに謹んで先生のご冥福をお祈りいたします。

（越坂久雄・記）

萱　登柳先生年譜

1944年３月14日に岡山県で生まれる
岡山県立玉野高等学校卒
関西学院大学卒

第16回北海道書人展　大賞受賞
第34回全道書道展　準大賞受賞
第46回毎日書道展　毎日賞受賞
第50回北海道書道展　準大賞受賞





畫彩仙靈





寧神

池田敬岳先生を偲んで

北見の地で書・篆刻の振興に多大な力を尽くし輝きを放っていた、池田敬岳先生が昨年４月突然逝去されました。

先生は昭和40年代から多くの門人を育て真摯にこの道に邁進し、北見書道連盟会長を務める等、道東を中心として書道会に貢献を果たしてまいりました。

本業の印章業をすすめる中、昭和50年北海道篆刻会に参加し、その後昭和60年に篆刻家越坂柳徳先生に師事する事となり、北海道書道展特選を始めとして中央展でも力量を認められ次々と受賞を重ねる事となりました。

先生の作風は人柄をあらわすごとく悠然として穏やかで、温もりが伝わって来る独特の風格がありました。北海道の篆刻界では得がたい存在でした。

昨年書家・篆刻家として回顧展を企画するさなかに病が見つかり、４月に急逝されてしまいました。大変残念でなりません。令和４年に萱登柳先生、令和５年に池田敬岳先生と相次いで二人の先生をうしない６部審査員は７名と寂しい状況となりました。北見の社中の皆さんも大変な悲しみと落胆の中にありながらも敬岳先生の回顧展の準備を整えて、４月９日から北見文化センターを会場として開催の運びになりました事は先生へのなによりの贈り物となる事と思います。

池田敬岳先生死して尚朽ちず。

ご冥福を心からお祈り申し上げます。　（上山天遂・記）

池田敬岳先生年譜

1941年　樺太（サハリン）に生まれる
1957年　書道を番場敬華先生に師事
1975年　北海道篆刻会に入会
1985年　篆刻家越坂柳徳先生に師事
2002年　北見市技能功労賞
2012年　北見市文化功労賞
2019年　北海道書道展　準大賞
2022年　国際現代書道展　文部科学大臣賞
2023年　４月10日逝去　享年83歳

石崎閑雲先生を偲んで

「私は、これまで筆を持って作品を書いている時間より、何をテーマとし何を素材にするか書く以前の準備に数十倍の時間をかけ、やっと今回の受賞に辿り着きました」
～昭和63年道展祝賀会での石崎先生の挨拶…。

この挨拶を聞いた師赤石蘭邦先生は、「沢山の教え子の受賞の挨拶を聞いてきたが、石崎君の挨拶が一番良かった。君はいつもどのように書くかばかり気を配り過ぎています」と苦言を。

それから35年、石崎先生からの電話です。「俺さ、今道展出品作品書いているんだけど、いい言葉を見つけて久し振りに乗って書いているよ。“無礙一道”（親鸞の歎異抄）って。意味は、何ものにも邪魔をされることなく、書道ひとすじの大道を歩むというんだけど。俺さ、毎日も創玄も書創社も退会してすっきりしていて、今の俺の心境にピッタリな言葉だ。お前も自分らしい自分の世界の作品を書けよ」

その数日後、深夜道展出品作品を制作中、休憩をとろうと階下に降りる途中転倒、そのまま帰らぬ人と…。あれから１年、先生の道場の壁面には、今でも絶筆“無礙一道”３点が掲げられ、私達後輩に対して筆人（ふでびと）としての生き方生き様はどうあるべきかを優しく教示している。合掌

（附記）石崎先生は、私に中学校３年間国語と書写を教え、向後私が書道への道を歩む礎を造ってくれた師です。

（大髙蒼龍・記）

石崎閑雲先生年譜

1936年　上士別町生まれ
1955年　北海道学芸大学旭川校入学
　　赤石蘭邦先生に師事
1958年　日本書道美術院展　大学部推選第一席（文部大臣奨励賞）
1975年　北海道書道展　特選第一席
1988年　北海道書道展　準大賞
2022年　北海道書道展　招待作家
　　秋の叙勲で「瑞宝双光章」受章（旭川市教育委員会指導室長、同学校教育部次長、旭川市立東光中学校長を歴任し、新しい時代を捉えた教育の在り方を推進した功績が讃えられて受章）





呼

君田康子先生の想い出

君田先生は1962年頃から「書鳳」の前身である「火曜会」に入会されました。（師・我妻緑巣先生）

20歳代前半の若さで、会社勤めは第一線で活躍されながら「一生､書道はやめません」と宣言して入会されました。

当時を思い出すと、容姿端麗で颯爽と時代の先端をいく仕事をこなして、私達の憧れの的でした。

北海道書道展、北海道書道連盟展、毎日展、創玄展、書鳳展などでは、全身全霊で迫力極まりない力強い作品を発表したのは強く心に残っております。

2023年３月の北海道書道展の審査会に出席された後、体調を崩されました。

責任感強く、人情熱く、気配りの行き届いた方でした。

存在感のある影響力の強い君田先生には、慕っていた後輩達のためにも、まだまだご指導等頂きたかったと残念に思います。

謹んで心からご冥福をお祈りいたします。

（井川静芳・記）

君田康子先生年譜

1938年　12月７日札幌に生まれる
1962年　火曜会入会　我妻緑巣先生に師事
1992年　北海道書道展　準大賞
2023年　６月25日逝去

書道研究「書鳳」同人
北海道書道展会員
創玄書道会審査会員
北海道書道連盟会員





興趣

平田鳥閑先生追悼文

昨年８月、教育大旭川・書道研究室の同窓会で２時間近く講演されました。又、同じ月の中旬には、中野北溟先生の百歳のお祝いの会に出席、札幌からの帰路の電車での談笑が最後になりました。ご子息の話では、８月末に書創展の作品を制作、９月初めに入院するまでは“硯の水”が乾くことがなかったとのこと。正しく生涯現役作家でした。

先生は富良野鳥沼出身、自然豊かな中で少年時代を過ごし、富良野高校で落合幽岳先生との出会いが縁で書道に興味を持ったとのこと。そして学芸大学旭川校へ進み、卒業後は中学校・高校・大学に教員として勤めました。その傍ら書作活動と東洋美学の研究に没頭すると共に、多くの公職につき其道発展に尽くされました。更に、寸暇を惜しんで盆栽を育て、陶芸制作も楽しみました。「書と陶芸」の個展では多くの書道ファンを唸らせたのは記憶に新しいところです。

先生は、真摯に書に取り組む姿勢を“うしろ姿”で語り続けました。それはあの超大作の古典臨書作品です。（３×６×10）いづれの日かお目にかかりたいと願いつつ。

ご冥福を心よりお祈り申し上げます。　（瀧野喜星・記）

平田鳥閑先生年譜

1932年　７月21日富良野市鳥沼で出生
1968年　北海道書道展　準大賞
1975年　創玄展　会長賞
1976年　毎日書道展審査会員
1981年　教育大旭川助教授
1983年　教育大旭川教授
1984年　旭川ななかまど文化賞
1991年　還暦個展
1992年　旭川市文化賞
1993年　北海道文化奨励賞
1995年　退官記念個展
1996年　北海道文化審議員
2004・2005年　北海道書道展理事長
2014年　「書と陶芸」個展
著書　「白い校庭」「書のひととき」





天

吉田瞭風先生追悼文

昨年７月７日、吉田瞭風さんがご逝去されました。一昨年の社中の道展錬成会及び審査には熱心に参加して下さっていたのが最後になり寂しい限りです。

振り返りますと、故中川清風先生の個展をご覧になったのをきっかけに、清風先生社中の羊城会に入門されたのが1977年でした。翌年の第19回北海道書道展初入選に始まり、第27回、28回、29回展に特選受賞、第30回展の秀作受賞で会友昇格となり、とても溌溂と活動され、その後は大胆な筆致の大字書にも挑戦されて、見事第44回北海道書道展で準大賞を受賞されました。以来、社中の道展錬成会の講師を務められるなど大変お世話になり感謝しております。

謹んでご冥福をお祈りいたします。合掌

（久保田朴雲・記）

吉田瞭風先生年譜

1977年　羊城会入門
1978年　第19回北海道書道展　初入選
1986年　第27回北海道書道展　特選受賞（第28回、第29回も特選受賞）
1989年　第30回北海道書道展　秀作受賞　会友昇格
1992年　第54回毎日書道展　会員昇格
2003年　第44回北海道書道展　準大賞受賞　会員昇格
2023年　７月７日逝去　享年85歳





風鈴や…

長内敬子先生を偲んで

長内先生はさわらび会松本春子先生に師事されました。春子先生のお稽古場で事務のお仕事をして下さっていたこともありました。北海道書道展、毎日展、創玄展、北海道書道連盟展とたくさんの作品を発表されました。

さわらび会創立70周年記念展には常任理事として大作を発表され、その時もですが、御主人の詠まれた短歌や俳句を折にふれて書いておられました。又三人展のことはなつかしく思い出されます。

先生は数年前圧迫骨折で入院されました。退院されてからはリハビリに励んでおられ、よくお電話でお話していたのですが、昨年11月お電話も通じなくなって気になっておりました。11月７日にベッドから下りようとした時転倒され意識が戻らぬまま11月30日に亡くなられたことを御遺族の方からお聞きし、あまりに突然のことで信じられませんでした。春になったらお会いしたいと思っていましたのに残念です。これまでありがとうございました。

心より御冥福をお祈りいたします。　（髙畑美智子　記）

長内敬子先生年譜

1928年６月15日札幌に生まれる
1955年頃　さわらび会入会　松本春子先生に師事
1965年　　北海道書道展６回展委嘱会員推挙
1966年　　ひさき会設立
1969年　　毎日賞　毎日展会員　後退会
　　創玄書道会会員　後退会
1971年　　北海道書道展　準大賞
　　北海道書道連盟会員　後退会
2001年　　北海道書道展　30年表彰
2005年　　大丸藤井セントラルにて
　　書の三人展　長内敬子・髙畑美智子・山本美智子
　　さわらび会退会
　　北海道書道展　招待会員
2024年11月30日逝去　享年96歳





感興

斉藤香月先生追悼文

北海道書道展の草創期からご出品なされ、私の大先輩、斉藤香月先生のご冥福をお祈り致し、謹んで追悼文をしたためます。

先生が筆を持たれたのは中学生の頃から、本格的には学芸大学時代赤石蘭邦先生に師事、その後昭和四十九年、小原道城先生と出会い、心華社に入会。古典研究は深く、多くの全臨を手掛け、常に厳粛。また良寛調の詩情溢れる作品で、北海道書道展では入賞を何度も果たされました。国際現代書道展旭川移動展と併催で、喜寿個展開催、大いに話題と成り称賛に値致します。調和体書作品では、独自性を醸し、文字が楽しく舞い円熟味を増して居ました。近年は甲骨文字に傾倒､骨格確か、ロマン溢れる作風は見事でした。

書道研究「香月会」主宰。優しさ厳しさ合わせ持ち、愛情豊か、優秀なお弟子さんを育てて、今も引き継がれておいでです。

糖尿病を患い､週三回の透析､そうした中でも筆を置かず、皆の範です。足をひきずり乍ら、練成会出席なさって……。

「休まず自分のペースで五十年以上、奥深い書の道を追い求めてこれた事、自分はとても幸せ者」と、おっしゃっておいででした。

令和六年二月二十日ご逝去、心からご冥福をお祈り致します。　（奥村素紅　記）

斉藤香月先生年譜

1956～57年　赤石蘭邦先生に師事（学芸大時代）
1974年　小原道城先生に師事（「心華社」入会）
1979年　書道研究「香月会」主宰
1981年　全道書道展（現・国際現代書道展）　会員昇格
1983年　北海道書道展　会友昇格
1989年　毎日書道展　会員昇格
1993年　全道書道展（現・国際現代書道展）　審査会員就任
1999年　北海道書道展　大賞
2011年　毎日書道展　審査会員就任
2024年　２月20日逝去





新谷谿雪先生を偲んで

新谷谿雪先生は、実直で誠実で真面目、強い意志を持ち後進の私たちを温かく導き、懐の広く優しい先生でした。

その先生の訃報を聞いたのは、令和６年５月25日土曜日でした。入院されていると聞いていましたが、気丈な先生でしたから、再び国際書道協会の会合や心華社の練成会に元気な姿を見せ、範として指導してくれるものだと思っていました。新谷先生の悲しい知らせは、国際書道協会、心華社にとって重要かつ頼りにしていただけに、とても辛い知らせでした。

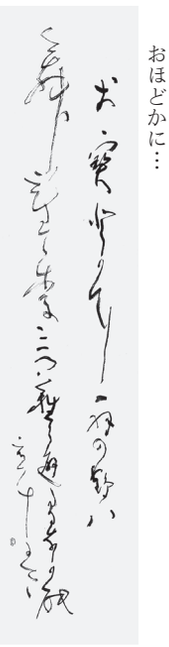
新谷先生は、書道を愛し、「書の研究」を愛し、国際書道協会、国際現代書道展の重鎮として活躍されていた先生でした。また書道人としては、豊富な経験を背景に常に王道を歩み、発表される作品は威風堂々、風格があり格調の高いものでした。さらに先生は岩見沢市を拠点として、地域の文化振興、社会教育に尽力貢献され、多くの人材を育てられるなど、その功績が高く評価され令和元年には岩見沢市政功労者表彰を受彰されるなど、その活躍ぶりは大変幅の広いものでした。新谷先生のご逝去は、私達にとって大きな柱を失った悲しく残念なことです。しかし、新谷先生の意志を少しでも継ぎ、これからの書道界発展に繋げていきたいものです。新谷先生ありがとうございました。そしてご苦労様でした。

心からご冥福をお祈りいたします。　（佐藤翔雲　記）

新谷谿雪先生年譜

1931年　８月８日新十津川町生まれ
1970年　故・志田杜洋先生の手ほどきで「書の研究」競書に出品
1975年　小原道城先生に師事
1988年　第19回全道書道展　大賞
1998年　北海道書道展　準大賞
2004年　第35回全道書道展　文部科学大臣奨励賞
2012年　第43回国際現代書道展　文部科学大臣賞
　　岩見沢市教育振興表彰文化功労彰
2019年　岩見沢市政文化功労彰
2024年　５月25日逝去
北海道書道展招待会員
毎日書道展参与
国際現代書道展審査会員





千鶴敏子先生を偲んで

令和６年７月百歳のお誕生日を迎えられました。心ばかりのお祝いを差し上げた所、お礼のお電話をいただきとてもお元気でした。それから２ヶ月あまりの訃報に只々驚き、声が耳からはなれません。

先生は、勤めながら松本暎子先生に師事し、退職と同時にNHKカルチャー教室の指導者となりました。また水野良子先生の後を継ぐほか、競書雑誌「書鳳」のお手本書きもされておりました。年齢を感じさせず、書に対する思いは熱く、指導にあっては個々に合せて丁寧にわかりやすく教えてくださいました。先生は「いつかは自分の字で書ける様に」とおっしゃっていましたが、今もそれが胸に深く残っております。

平成22年には「千鶴会展」が開催され、先生の集大成の一つとなったものと思います。

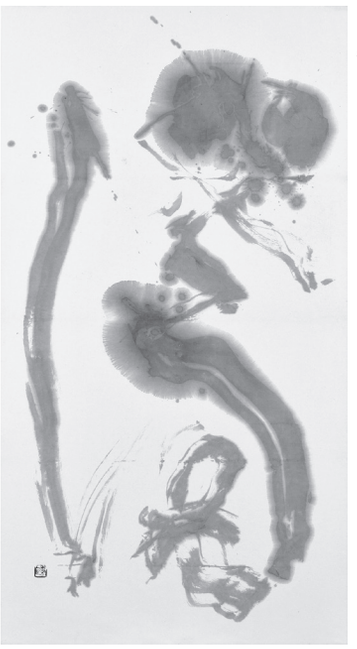
平成29年、約30年間の指導者生活を終えられ、その後も展覧会や、さわらび会の諸行事でお会いする機会があり、お元気な姿を拝見しておりました。

先生のこれまでのご指導に感謝し、心よりご冥福をお祈り申し上げます。　（中野八重子　記）

千鶴敏子先生年譜

1924年　７月27日生まれ
1992年　北海道書道展準大賞
1988年　創玄展準大賞
2024年　10月４日逝去　享年100歳





僂

畠山紫香先生を偲んで

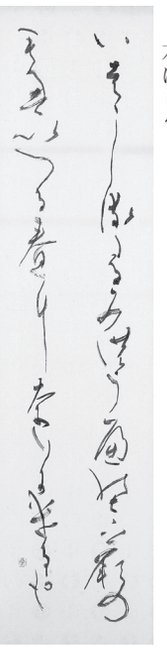
畠山先生は石狩市に居住していた時、当時小学生だった子供さんを伴い、遠藤香峰先生の門を叩いたと聞き及んで居ります。その後ご自身も本格的に書を習うことにし研鑽を重ね、第50回北海道書道展で準大賞を受賞。その年の北海道書道連盟報で「書を始めてから二十七年、紆余曲折の人生模様を経る中、今日迄続けることが出来ましたのは師遠藤香峰先生の書に注ぐ揺るぎない情熱に心を打たれたからです」と心中を吐露して居りました。もの静かでほほえみの絶えない方でしたが、一方では長年経営者としての顔を持ち、芯のしっかりした方とお見受けしていました。作品は墨色に拘り、常に美を追求していた様子が見て取れました。2024年３月の審査会前に突然逝去されました。最後の作品が「僂」 ご冥福を心からお祈り申し上げます。

（品田國子　記）

畠山紫香先生年譜

1951年　10月４日室蘭生まれ
1982年　遠藤香峰先生に師事
2009年　北海道書道展準大賞
2024年　３月４日逝去
書道研究「書鳳」同人
北海道書道展会員





石ばしる…

暎子先生のご挨拶

挨拶は書と違い､聞いて忘れてしまい残らないものです。

暎子先生は話術の巧みでもありました。さわらび会々長として内輪の会ではもちろんですが、要職につかれてからの様々のご挨拶はさすがその立場にふさわしく、鮮やかな着地を見せたものでした。ご挨拶のスタートは少し震え気味の口調ですが、話題の捉え方、まとめ方は聞き終わって説得力抜群だったと思います。

2006年北海道書道展理事長としての挨拶には時代を冷静に見る目線を読みとることが出来ます。その内容は20年近く経った今､直面している問題でもあります｡「道展の風景」と題して「草創期の熱気が失われ、飼いならされた羊の群れ」という言い得て妙な表現で自戒をこめて審査会員としての責務が書かれています。先生の願い「審査員は名伯楽たれ」の言葉に応えるべく、個性を磨き、後輩の範となり「活力ある道展」を目指していかなければならない｡それが､先生の思いに応えることと思います。

長い歳月、導いてくださったことに深く感謝し、ご冥福を心からお祈りいたします。

（千葉和子　記）

松本暎子先生年譜

1928年　２月９日生まれる
1966年　北海道書道展準大賞
1991年　個展開催（東京銀座三越）
1994年　第２回個展（東京銀座三越）
1996年　札幌市民芸術賞受賞
1998年「西本願寺本三十六人集の字彙」刊行
2000年　藤女子大学教授退任
2003年　紺綬褒章受章
2006年　北海道書道展理事長
2024年　７月２日逝去





秋菊有佳色

山本玉沙先生を偲んで

山本先生のご家族から訃報の連絡を頂いた時、締切り間近の北海道書道展の作品を書きながら先生に常に言われてきた「線を大切に生きた線を書きなさい」を思い出している所でした。

昨年春にご自宅に伺った時には、幾度となく行った中国旅行の話、今読まれている本のことなど色々な話を聞かせて頂きました。帰り際「来年の道展は横で少し紙を足して書いてみたら…」と課題を頂き挑戦した作品を見ていただけない事が残念です。

「良いものを見て目を養いなさい。初めはわからなくても目が育っていきます。色々な体験をして感じることが大切です」と言われてきたことを心に刻んでいきたいと思います。

ご冥福を心よりお祈り申し上げます。　（廣田智　記）

山本玉沙先生年譜

1932年　旭川市に生まれる
1971年　佐藤滿に師事
1986年　国際現代書道展審査会員
1987年　北海道書道展　準大賞
1988年　草萌会設立
2025年　１月30日逝去